

---

# ペナルティ2

謎沢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペナルティ2

### 【Nコード】

N0165B

### 【作者名】

謎沢

### 【あらすじ】

ペナルティに続くペナルティシリーズ第二弾というべきものできました。

ペナルティ2・1（第103話〜第110話）（前書き）

“ご覧になる方へ”

このページは、ペナルティシリーズ第2弾のページです。内容が分かりにくいことがあると思いますので、ペナルティのほうをまずご覧になられることをお勧めします。

なお、ページにつきましては、作者の作品をご覧ください。

本文中に誤字脱字がございましたら、メールにてご指摘ください。

ペナルティ2 - 1 (第103話〜第110話)

第103話 地球に起こる謎の事件

マオたちが居なくなつてから一ヶ月が経つか経たないかの頃、地球は大変なことになっていた。まるで地球の気候が入れ替わつてしまつたかのような状態になっていた。

学者の中には秋原町にたこやきが落ちてきたせいだというものがあったが、星座の方向などから考えるとその論には矛盾があつた。

一月の終わりなのにクーラーをつけるといふ異常な状況(南緯度では普通なのだが・・・)に熱斗も体調を壊してしまつて、家で寝込んでいる。一体どうしてしまつたのだろうか。

熱斗は幻覚を見るぐらいになっていた。この日の気温は50度。イラクで記録された世界最高気温並だ。

その頃、マオたちは戦渦に巻き込まれそうになっていた。広州では日本と清が争っていた。

ところでそれを起こしていたのは実はあるウイルスの仕業だつた。そのウイルスは工場から排出される二酸化炭素の量を増やし、日本を温室状態にしていたのだ。

しかし、ウイルスはそれだけでは気がすまなかつた。そのウイルスを作つたのは湯田中だつた。

マオが消えた一週間後。湯田中はある男に会つていた。それは、ワイリーだつた。

ワイリーは言った。

「君の活躍を見させてもらった。今、あなたを私は必要としている。その頭脳で地球に恐怖と戦慄を与えたい。そうすれば、人の思いどおり動ける。」

ワイリーのおかげでこうなつていたのだ。しかし、まだ熱斗たちはそのことを知らなかつた。

ワイリーは次の行動へ移そうとしていた。それは、地球を再構築するというものだった。一体これからどうなってしまうのだろうか。

「第104話 謎の生物現る！」

熱斗の熱も下がり、久しぶりに気候が持ち直した二月の始め頃。その頃、また鼻から脳みそが垂れるという珍事件が発生した。しかし、この事件の犯行手段などは未だに見つかっていない。さらに犯人だった少年はいつの間にか刑務所から消えていたそうだ。こう謎の残る事件であった。

しかも、なぜか気温が異常な日だけ起きるのである。不思議なことにさらに不可解な事件がおきた。

それは、怪獣が現れたことだった。しかも、その怪獣は前、李が作ったというゲームの中で戦ったあの恐竜だ。それが秋原町に現れたのだった。しかし、なぜか科学省は熱斗たちを呼んだ。

「一体、どうしてぼくたちを呼んだんですか。」  
祐一郎は答えた。

「どうやら、あの怪獣はペナルティたちが体験した。李の3Dゲームの中から逃げ出し、さらに実体化して秋原町に出現したみたいだ。」

「しかし、なぜネット空間から実体化したんだ。」  
それには祐一郎も答えられなかった。

ともかく熱斗などのネットサーバーを現場に派遣した。この様子の一部始終を見ていた男がいた。それは湯田中だった。

しかし、熱斗たちは気づいていなかった。  
熱斗たちはともかく攻撃をした。

攻撃はゴジラに効いていた。  
そして、ゴジラは消えていった。

しかし、ワイリーにとっては都合のいいことだった。  
なぜ現れたのか祐一郎は疑問だった。

ともかく怪獣がいなくなったことだけでも喜ばなければならない。  
ワイリーは次の段階に移った。湯田中の高度な技術を使って。

湯田中は自分が使われていることに少し疑問があった。しかし、今は  
の行おうとしたことを実行に進めようとしているだけであった。

## ＝ 第105話 時空開放 ＝

その頃、時空にも変化らしきものが起きた。それは前に使った試験  
路（つまりペナルティとマオがここを通り、熱斗たちの世界に来た  
のだ。）が又開いたのだ。確かに消えてしまったはずなのに。マオ  
たちはというと山中にいた。腹が減って力が出ないという状況だ。  
だんだん気がもうろうつしてきた。死んでしまう状態だった。そし  
て、ついにマオたちは目をつぶってしまった。

そして気がつくところかで見た光景だった。

さっきいた場所ではなかったが、どこかで見たことがあった。

そうここは熱斗の家の近く秋原町だった。

「一体何故。」

マオたちが首をかしげていると科学省から戻ってきた熱斗とペナル  
ティが通った。

「よお。」

最初は熱斗とペナルティはびっくりもしなかった。しかし、ペナル  
ティは少し経ってからびっくりした。それに続いて熱斗もびっくり  
した。

ともかく熱斗の家へ向かった。

熱斗の家でもかくたくさん食べた。

それから熱斗とペナルティが聞きはじめた。なぜこの時代に戻って  
これなのか。

しかし、当の本人はそれすら分からなかった。

その時、たまたま祐一郎が戻ってきた。

そして、祐一郎はマオたちを見てこう言った。

「熱斗。ペナルティ。それは時空が開き始めたからだよ。マオやペナルティに時代だけでなくほかの時代へのリンクも開き始めた。なぜかは分からないがどうもおかしい。誰かが必死で次々と開いているようにしか思えない。高度な文明を持った人間の仕業だと思う。」

その時、やっと操作が始まるうとしていた。

しかし、ワイリーはそれ以上のことをやろうとしていた。

ワイリーは湯田中を呼んでこう言った。

「ついに始めることとなった。地球改造計画第二期。そして、我が王となるのだ。地球帝国のね。」

ワイリーは薄気味笑いをしていた。

## ＝ 第106話 地球革命 ＝

時空との接続が完璧になるうとしていた。

ワイリーはついに実行しようとしていた。これにより、地球は別の星と化す。こんな面白いことはワイリーにはとてつもなく気がせいせいするものだった。

その時。2月のはじめ。地球の歴史が動こうとしていた。

ワイリーは久しぶりに街頭やテレビを占拠して言い始めた。

「これから皆さんにとてつもなく大きなショーをお見せします。」  
そういうとワイリーはプログラムを動かし始めた。それは、地球の景色を一変させるものだった。皆が何かに包まれたと思った。それから開放された時。科学省は大変なことになっていた。それは祐一郎にも伝わった。

「大変です。秋原町の周りの年がなくなりました。」  
名人の言葉に祐一郎ははっとした。

すぐに秋原町の周りの写真を見た。そこには一面森が映っていた。そして、科学省に一通にメールが届けられた。

それは、ワイリーからのものだった。  
ワイリーはメールの中でこう言った。

「あなたたちは地球の変貌を見たいですね。だが、地球の土地の配置が変わっただけではないのですよ。日本で言えば戦国の武将や原始人。それに江戸の徳川家康などの強力な人間がたくさん集まっている。さあ。この危機を乗り越えられるかな。」

そういうとワイリーは消えた。

そして、熱斗やペナルティたちが呼び出された。そして祐一郎はこう言った。

「今、ワイリーはどこかへ行ってしまった。そして、地球の環境も変わってしまった。多分、今、地球は空想世界になっているだろう。」

祐一郎の言ったことに熱斗が聞いた。

「空想世界とは一体どんな？」

祐一郎は答えた。

「それは不思議な動物や物にあふれているということだ。そして、ワイリーを探すたびに君たちを派遣する。」

いきなり言われびつくりした。しかし、これを解決できるのはワイリーしかないなかった。

そして、熱斗とマオ。それに、メイリイ、ペナルティ、シロウ、炎山、ティンゴ、の七名は秋原町を出た。

一体これから何が待っているのだろうか。

Ⅱ 第107話 794 (鳴くよ) ウグイス平安京? Ⅱ

熱斗たちが森を出るとそこにはきれいな町が現れた。それは区画整理されていて碁盤の目のように大きな道が通っていた。

正面には門があり、そこではなにやら怪しい二人がいた。

「これは、まさか平安京ではないのか。」

ペナルティが言った。そうこれは地球革命が起こした産物の一つだったのだ。

ところで平安京とは七九四年に長岡京（造成途中にあることがらがあり、造成中止）から移した事実上最後の都である。覚え方としては題名のような覚え方がある。

そんなことよりワイリーを探さなければいけない。

町の入ると怪しい目で見られた。さらに京都の検非違使（今の警察と同様なもの。）に捕まってしまった。

そして、天皇の前へ出された。

「陛下。城内で不振な者を発見いたしましたで候。」

そして陛下はこう聞いてきた。

「そちたちの持っているそのものを申す箱は一体なんで候。（訳

あなたたちが持っている機械はいつたいなんだ）」

いきなりの質問に戸惑ったが炎山がこう説明した。

「これは、未来の機械でとても便利な道具でございます。」

炎山の言葉に陛下はモノ欲しそうな顔をしていた。

そして、こう話した。

「私たちが住んでいた日本にあることが発生し、あなたたちはここに居座っているのです。」

しかし、側近は“そんなバカな”と言った。それに炎山はこう答えた。

「でしたら少し高い所の上って確かめてください。」

そして、側近は高い所へ行った。その側近は高い塔から見た景色に驚いて陛下の所へ戻ってきた。

「大変です。周りの村が消えてしまっています。」

それを聞いた陛下もさらに驚いていた。そして炎山が言った。

「それもこれもみんなある一人に人間のおかげなのです。」

天皇は誰かと聞いた。

「それは、ワイリーという男です。私たちはその男を捜しにここへ来てしまったのです。」

天皇は熱斗たちを開放した。  
そして、次のところへ旅立った。

Ⅱ 第108話 手紙売りの男Ⅱ

平安京を出ると砂漠に出た。本当ならば平安京の裏にはあのもみじで有名な嵐山・嵯峨野があるのだが、今は砂漠がただ横たわっているだけだった。

そして、砂漠を進むと二人の人がなにやら話していた。その二人に八人は近づいていった。

「コンニチハ。ワタシタチハテガミウリノオトコタチデス。」

いきなりこんなことを言われてみんな驚いた。大体何故砂漠のど真ん中で手紙など売っているのか。マオは聞いた。

「何の手紙を売っているのですか。」

そうすると男たちは横にどいた。

「マズハパチンコガツコウヘノガンシヨ。ソレカラネズミトヘンタイオトコノデスマツチノエハガキ。ソレカラ・・・」

どれもくだらないものだった。しかし、一つだけましなものが売っていた。それは、旅行用の手紙だった。ナビを使って手紙を書くらしい。

そして、配送は二人がやってくれるそうだ。

八人はともかく手紙を送ろうとしていた。

しかし、中には手紙を送ろうとしようとしなかった奴もいたものの、ほとんどのものは手紙を出そうとしていた。そして、プラグインしようとした時、炎山は不思議に思った。

なぜこんな所で手紙を売っているのだろうか。商売にはならない。そして、その手を止めた瞬間。熱斗たちは引っかかってしまった。それはわなだったのだ。

「ロックマンたちを帰せ。」

熱斗が言った。しかし、二人の男はこう言った。

「お前らは変装も見破れんようだな。」

そういうと変装を脱いだ。その二人は湯田中と小岩だった。

「何故小岩がここにいるんだ。」

マオは言った。その小岩は言った。

「私は元から死んでいないわ。田中たちもね。しかし、田中はその後消えたわ。ある男になったの。」

マオは気づいた。湯田中は言った。

「そうだ。俺が田中だ。」

熱斗たちは驚いた。

Ⅱ 第109話 脅威の科学力Ⅱ

湯田中は話を続けた。

「私の中に眠っていた 人の力をワイリーは復活させたんだ。科学というもので。」

今の科学力を甘く見てはいけない。私の一族の中にはあることをするよう仕組まれていたんだ。それは、人間が環境を破壊することを止めるようにとね。そして、それをワイリーは知っていたんだ。

そして、それを利用してしようとした。わたしもそれに賛成した。そんな時にある人が訪れた。その男は 人で私の親戚だった。つして、親戚は言った。

「 国であなたが今、参考人として必要なんだ。来てくれ。」

そして、 の国に行った。そこで地球のことをわざと悪く言った。

地球環境を悪くしたのは人間だと。それを私たち一族ではどうして止められなかった。とね。まだ私は熱斗たちが悪いということを信じていた。まあ、今でも思っているが……。そして、たこ焼きは地球を襲うことになった。そういうことだ。そして、今でもワイリーが正しいと思っている。そう。小岩なんかもな。」

湯田中は皮肉っぽく言った。

それには熱斗たちの腹の虫が収まらなかった。

「もしも返して欲しいのならば、ネットバトルという方法があるではないか。」

しかし、こちらには炎山のナビしかない。

果たして勝ち目はあるのだろうか。

しかし、ネットバトルを行うしかなかった。

そして始まった。

試合は炎山が勝った。

そして、ロックマンたちを帰すことになってしまった。

湯田中は悔しそうな顔をしながら消えた。

「よかった。このままでは何もできなかったよ。」

そんなところに男が走ってきた。しかもスーツを着てだ。

「おい。マオ。」

それは、梅園先生だった。

「何でこんな所に。しかも、なぜ片手にゲームソフトを。」

マオは思わず聞いてしまった。

「ん。いやいや。祐一郎という男にマオたちの世話をしてくれって

言われて。」

熱斗は驚いた。

祐一郎にはそれだけ心配なことがあった。しかし、このことはまだ

誰も知らなかった。

## ＝ 第110話 ワイリーの秘策 ＝

ワイリーは部下の湯田中にこう言った。

「結局、マオはこの時代に戻ってきてしまったではないか。お前がマオは時期に消えるからってロボットを使ってまでしたのに。一体どうしてくれるんだ。」

湯田中はこう言った。

「私にチャンスをください。もしもこれで失敗したら私はあなたの

前から姿を消しましょう。」

それにワイリーは賛成した。そして、すぐさま準備に取り掛かった。梅園先生も加わったことで八人となった熱斗たちは森に入った。

そこに一軒の店が現れた。少なくとも砂漠のご真ん中からここまで一日は掛かっている。その間食べ物を食わず、さらには最後には水もつきたくたになっっていた。

「ここに店があるから入ろうぜ。」

熱斗は勝手に入っていった。しかし、こんな所にお店があるなんておかしかった。

しかし、他の者も仕方なく入っていった。

しかし、店の玄関前で熱斗が立ち止まっていた。そこにはこう書かれていたからだ。

「服や靴をお脱ぎください。」

さすがにこれには参った。なぜこんなことを書いたかというと実は湯田中がワイリーに言った計画のせいだった。

湯田中はある小説を思い出していた。それは一ヶ月前からはまっていた宮澤賢治の短編小説からだった。

しかし、それにしてもずいぶんとひどい。湯田中はこのほかの効果を狙っていたのだ。

「本当に食べたいのならこれくらいのことやっつてのける。地球人というのはそういうものです。ある島では牧師を島の人が殺して食べたという伝説があるらしい。そのくらいあのバカな少年たちはやっつてのけるでしょう。」

湯田中はワイリーにこう言ったのだ。

「えい、脱いでやる。」

熱斗はついにわなに引っかかってしまった。

人間というものはそういうものだというのがまんまと現れてしまった。

湯田中はその姿に顔がにこやかになっていた。

この文章は<http://fai.tateuji.web.fc2.com>で公開されたものです。

ペナルティ2 - 2 (第111話〜第120話)

「第111話 わなに引つかかった八人？」

熱斗が入って行ってしまい凄く困っていた残りの五人は恥ずかしがりながらも入っていった。しかし、なぜか梅園先生だけいなかった。梅園先生は店の前にあるテレビにもってきたゲームソフトをつないで遊んでいた。梅園先生は砂漠の途中でみんなとははぐれて自分が持ってきた乾パンをひそひそと食べたのだった。

熱斗たちはついに店内にたどり着いた。しかし、注文が多い店だ。しかし、そんなことなどは食べ物食べられればいいのだ。

そして、店主が来た。そして、言った。

「この店にはメニューはありません。私が自信を持った料理しか出しませんのでご了承ください。」  
なかなかこっぺている店だと熱斗は思った。しかし、これは店主が仕掛けた罠だった。

店主は実は湯田中だったのだ。  
湯田中は料理に白い粉を入れた。それは時空病を再発させる薬だった。人によって効果はかわるものの、たいてい一種間もすれば効果が出る。

しかもそれはマオの舌では到底判断出来ないようになっていた。  
それを次々と運んでいった。ほとんどは冷凍食品をおいしくしたもののだが、誰もそれには気づかなかった。

そして、八人は歩き始めた。その姿に湯田中にはこやかな顔になった。

こんなにうまくいくとは思っていなかった。

そして、8人は森を抜けた。そこには町が広がっていた。田んぼがそこらじゅうにあり、いかにも田舎という感じだった。

しかし、さっきからマオとペナルティ。それに梅園先生の体調が思

わしくなかった。

「どうしたんけん」

町の人が声をかけてきた。町の人に熱斗が言った。

「さつきから体調が悪いんです。この五人が。」

しかし、その町には医者はいないという。

8人は困った。

〓 第112話 謎の世界に飛ばされた五人 〓

八人が困っていると前から老人が現れた。

その老人はこう言った。

「あなたたちはなんて馬鹿なんでしょう。」

それに熱斗が反論する。

「まだあなたたちは気づいていないようですね。」

そういうと老人は変装をぬいだ。

「ワイリー」

熱斗たちはおどろいた。

「一体、どういうことだ。」

熱斗の質問にワイリーは答えた。

「何故森の中に料理屋があったのかな。」

そのことに八人は驚いた。何故そんなことを知っているのだと。

「それは我々が仕組んだわなだったからだ。」

それに八人は改めて自分を振り返った。あの時は変だとは思っていなかった。

「あの料理にはある薬を盛っておいた。」

いきなり湯田中が言った。

「それは時空病を再発させる薬だ。」

湯田中の発言にマオたちはしばらく話せなくなっていた。

「さあ。もうどうすることも出来ない。」

ワイリーと湯田中は高笑いをした。

もうどうしようもなかった。だんだん効き目が現れてきた。

そして、ペナルティとマオ。それにメイリイ、シロウ。ついでになぜか梅園先生までが消えた。

「これからどうするか」

炎山が言った。しかし、何も出来ない。そして、ワイリーが行った。

「もう戻ってはこない。」

そして、ワイリーと湯田中は消えた。

その頃、五人は今までに見たことのない世界だった。

そこらじゅうに数字や記号が落ちていた。

「ここは一体。」

ペナルティがナビに問いかけようとした時、PETの中にはもうナビはいなかった。

「箱だけになってしまった。」

そして、その数字だらけの世界を五人は歩いていた。

「町がある。」

そして、五人は町に着いた。

「ここは一体どこですか。」

その問いに町の人はこう言った。

Ⅱ 第113話 数字だらけの世界の正体Ⅱ

「ここは、 $Y = Ax^2 + Bx + C$ だ。」

それはペナルティには分からなかったが、梅園先生には分かった。

「つまりこれは二次関数だ。」

「しかし、何故こんな所で出てくるんだ。」

ペナルティの質問に梅園先生は答えられなかった。

「ともかくさっきの所へ戻らなければならぬ。」

マオの言った事に賛成した。

「ならばこの町には鉄道が走っております。それを使ってください。」

「

町の人は駅に案内した。しかし、人は誰もいなかった。さらに電車も来なかった。

待っているとき町の人が来てこう言った。

「最近になって電車が来なくなったそうさ。別に廃止になってもいいのにどうしてか。」

そして、マオたち五人は歩いて町を出た。町を出た途端、数字や記号が見受けられなくなった。

「一体あの町は。」

ペナルティがぽつんと言った。

それに梅園先生がこう答えた。

「もしかするとあれはプログラムの一部だったのではないか！もしもあれを解析できればその時には元いた場所に戻るのではないだろうか。」

それをきいたマオは言った。

「だったらあの町をもう一度検証してみたらいいのではないのですか。」

それに梅園先生とペナルティは賛成した。

町には数字や文字が転がっていた。

「これが解ければ帰れるかもしれないですね。」

ペナルティは梅園にそう言った。

その時、湯田中が現れた。

「何だ。」

マオが言った。

「お前らには到底解けないだろう。解いたとしてもあいつらには会えないだろうが。」

マオは怒った。しかし、湯田中はそれを言うとすぐさま消えた。

「一体何が目的なんだろう。」

ペナルティたちはいやな予感を感じた。

ペナルティたちはその後もプログラムの解析を続けた。

「そういえば、なぜ僕らのナビが突然消えたのだろうか。前、2003年に行ったときは消えなかったよな。」

ペナルティがもらした一言に梅園先生は気になった。

「もしかするとこれはP E T用のプログラムなのではないだろうか。それならばナビたちが消えた原因にも説明がつく。これ以上いじればまずいかもしれない。」

梅園先生はこう言った。

「じゃあ一体どうすればいいのですか。」

マオが言った。

「この空間は実は熱斗たちがいる空間と一緒になのではないだろうか。」

梅園先生は一つの仮説を立てた。その時また湯田中が現れた。

「ナビもないのによくがんばった。しかし、君たちの苦労も水の泡となるだろう。」

「一体どうということだ。」

マオが言った。

「それは、これを読んでからにしろ。」

そこには一つの手紙があった。

『お前たちの親友を引き捕らえた。もしも私の挑戦を受けないのなら、その者を釜茹でし、そして、巨大生物に食される運命をたどることになるだろう。小岩』

マオは湯田中に怒った。しかし、湯田中はこう言った。

「じゃあ。もう一回料理勝負していただけないでしょうか。もしも私たちが負けたら親友を解放してあげましょう。しかし、もしもあなた方が負けたらその時にはあなたたちも一緒に釜の中に入ってもらいます。」

「ちよつと待った。」

梅園先生が言ったものの無視された。

マオはうなずいた。

「じゃあ。会場にご案内します。」

そういうと目隠しが渡された。

そして、マオたちは会場に案内された。一面田んぼと山だった。そこに舞台が用意され、その横には釜が用意され、さらにその横に引き捉えられた熱斗たちがいた。

「まだやりたいことがあるのに・・・。」

梅園先生はまだ自分の中で葛藤していた。なんだかペナルティたちのほうが大人のように見える。

そして、小岩が現れた。一体これからどうなるのであるのか・・・。

Ⅱ 第115話 命を懸けた料理勝負! Ⅱ

小岩が言った。

「じゃあこれから料理勝負をしてもらいましょう。こちらには凄い方がいらっしやっています。」

そして、霧の中から男が出てきた。

「Mr. 福田。」

それはワイリーが呼んだ人だった。

知り合ったのはほんの数日前だった。福田のほうから訪ねてきた。

福田はある企業の社員である。その会社はロボットを製造していた。しかし、人に危害を加え、さらには人を殺してしまうという現象が起きていた。

そのことは世の中にすぐに広まった。そして、どんどんとシェアは低くなった。今までは安さを武器にしていたものの、それも効かなくなった。

その時、ある話を聞いたのだ。

「最近、凄いナビがいるらしい。そのナビは少年と協力してほとんど事件を解決しているらしい。その少年はネットサーバーになっ  
たらしい。」

このうわさを聞いたとき、福田ははたと思いついた。

「そのナビのプログラムを組み込んで売り出せば、きっといい口ボツトにナルに違いない。」

そして、そのことを上司に言った。そうしたら上司が言った。そのナビを確保してこいと。それから秘密のチームが結成され、その後、ワイリーに会ったということだった。

いまその少年とナビがあんな悲惨な状況となっている。一刻でも早くそのナビをゲットしたかった。そのためには何でもやると心に誓った。

「課題は、友情だ。」

小岩の言ったことに福田とマオは焦った。

「なぜ友情かというと、君たちに友情というものは何だ。そして、お前らがなぜそんなに強いのかを問いたいからだ。これが分からなということとは言わせないぞ。制限時間は2時間。それではスタート。」

福田は思った。今まで会社に勤めてきたが、そんなこと考えてこなかった。自分と会社にも友情はある。それをただ表せばいいのだと。

そして、福田はうどんを打ち始めた。

マオは、友情というものをなにであらわすのだろうか。

Ⅱ 第116話 命の掛かった判定Ⅱ

後三十分となった。二人とも麺で行くようだ。

時間は刻々と過ぎ去っていった。そして、いよいよ終了の時が来た。「じゃあ料理を出してもらいましょう。審査員は日本マツタケサンバ協会 山梨ブドウ。大日本赤羽学校を建てる会会長 ダサイ玉国男。日本浦安同好会会長 千葉じゃない都民。の3名で行います。」梅園先生はそれを聞いて不思議がった。今までにその名前を聞いたことがなかった。

「審査開始。」

それとともにどこからかおならの音が……。会場にもものすごい北風が吹いた。（多分、おならのせいもあるかもしれない。）

マオが作ったのはラーメンに似た料理。しかし、実は麺に秘密があった。ある審査員が言った。

「なんだ、この麺は」

その驚きに梅園先生もびっくりしていた。梅園先生はマオにこの麺のことを聞いた。それにマオは答えた。

「この麺は切れにくいようにイカにするめを切ったものを入れてあるんです。それによって切れないようにしてある。そして、スープは後味が残るようにしたのです。」

梅園先生はマオの答えにひらめいた。

「そうか。麺が切れにくいのは友情というものはどんな時でも切れない。そして、後味が残るは友情があればいつでも思い出すということか。」

シロウは自分のせりふを取られて悔しがっていた。福田は力の差を見せ付けられていた。子供相手だからと戦いに参戦したもののこんなことになるとは思ってもいなかった。

梅園先生はマオにこう言った。

「これで福田をVANISH（「読み方」バニッシュ「意味」消える）出来るな。」

これは梅園先生の口癖の一つである。

福田は言った。

「おれが甘かった。俺の負けは見えている。又今度やつつけてやる。その時まで待っている。」

そして、福田は立ち去った。さすがに小岩もこれに悔しがっていた。「えい。元いた場所に返してやる。お前らとは又違った場所に飛ばしてやる。」

小岩が言った。その後、熱斗たちはどこかへ消えた。

「一体どこにやった。」  
マオが言った。しかし、小岩は言った。  
「お前らが探せ。」  
マオたちのたびが又始まることになった。

Ⅱ 第117話 捕まった理由 Ⅱ

「ああ助かった。」  
熱斗がのんきなことを言い始めた。

「そんなこと言っているのか。さっきの所にはマオたちがいたではないか。」

炎山は怒った。

「じゃあ。もう一回捕まるか。」

熱斗も馬鹿なことを言い続けている。このままでは炎山が火を付いてしまう。

「大体、熱斗のせいだ。熱斗があんな所で急ぐから落とし穴にはまってしまったのではないか。」

そう。熱斗たちが捕まったのは、熱斗が急いだためだったのだ。

熱斗たちは森の中で一本の大きな道を見つけた。

「もしかしたら人がいるかもしれない。」

なぜかその時おながとてもすいていたのだった。

そして、無性に走りたくなったのだ。なぜかだ。これは未だに原因は分かっていない。

そして、落とし穴に引っかかったのだ。

「それよりも早くマオたちを探さなければ。」

炎山が言った。

熱斗たちは道をまっすぐ進み始めた。

マオたちは、同じく砂漠を歩いていた。

2つのグルーブの目の前に町が現れた。二グルーブとも町に入った。そこでマオたちと熱斗たちは再会する事になった。

「おう大丈夫か。」

熱斗が声をかけてきた。

「大丈夫だ。まさかこんな所で再会できるとは。」

マオも返事を返した。その時だった。マオの体にかすかな異変が起きた。

「なんだか体が・・・。」

マオはそこに倒れてしまった。

「一体どうしたんだ。マオ。」

熱斗はすぐにPETを出した。

「秋原町に通じるかロックマン。」

ロックマンが通じているということを聞いてすぐに祐一郎に連絡を取った。

「これは、たぶん時空病と同時におこる症状ではないだろうか。何度でも時空を行き来すると体力を消耗する。多分それがこのような形で現れたんだろう。」

しかし、祐一郎にも分からなかった。ここで八人の使命はピリオドを打たれてしまうのだろうか。その様子を、町の少年たちがいたのだった。

## Ⅱ 第118話 カレーキングの登場Ⅱ

マオの体調は思わしくなかった。ついには熱を出し始めた。

「ああ。このままでは先には進めないな。」

炎山が言った。

みんな黙ってしまった。

「僕が悪いんだ。一番上なのにこんなことばかり巻き込んで。」

マオが言った。しかし、みんな反論した。

その時だった。町の人が叫んだ。

「タラコングが現れたぞ。」

みんなが外に出るとそこにはタラコの体に身を包んだ巨人が町を襲っていた。

「ロツクマン。クロスフュージョンだ。」

熱斗が言った。しかし、ここでは役に立たなかった。

「どうすればいいんだ。」

熱斗が悩んでいると祐一郎から通信が入った。

「熱斗。そこに今、タラコングという怪獣が現れただろう。」

祐一郎の言ったことに熱斗は驚いた。さらに祐一郎は続けた。

「この世界では今、電子怪獣が現れているんだ。この世界では、デイメンシヨナルエリアがなくてもクロスフュージョンできる。」

そういうと祐一郎は通信を切った。実は怪獣は秋原町でも現れていたのだ。

「やってみるか。ロツクマン。」

熱斗が言った。その時だった。

「タラコング。どうしたんだ。」

そこにはカレーキングがいたのだ。

「何でこんな所にカレーキングがいるんだ。」

熱斗が言った。しかし、まだカレーキングは幼そうに見えた。

「僕の言葉が聞こえないのか。」

カレーキングは攻撃を開始した。

タラコングはだんだんと小さくなっていった。

そして、元の姿を見たペナルティとメイリイは驚いた。それは山地ではないか。

しかし、シロウはなかなか思い出せずにはいた。

山地はカレーキングに言った。

「何かにのろわれていたようだ。本当にありがとう。カレーキング。」

しかし、なぜこんなことがおきたのであろうか。それにはある事情があったのだ。

「第119話 世界を襲う生物たち」

マオはそれを見て思った。「僕さえこうならなければ」と。

その秋原町に現れていた怪獣も、鎮圧されていた。しかし、このような現象が各地で起きていることが科学省の調べで分かった。

「一体、この生物たちは何なのでしょう。そして、何が目的なのでしょうか。」

名人が祐一郎に聞いた。しかし、祐一郎にも分からなかった。

その頃、熱斗たちはカレーキングから話を聞こうとした。

カレーキングも元の姿に戻っていた。

「カレーキング？」

思わず熱斗が聞いてしまった。しかし、カレーキングはこう言った。

「いや。僕は普段は普通の人間と同じなんだ。僕の名前は哲史。」

そして、熱斗は哲史に聞いた

「こんな現象がいつもおきているのか。」

それに哲史は答えた。

「こんな事件は初めてだ。大体、親友の山地が何故こんなことに。」

そういうと黙ってしまった。

その時、また町に危機が来ようとしていた。

その頃消滅したネット世界に卵がたくさん産み落とされていた。

しかし、まだ誰もそれに気がついていなかった。

マオの症状は悪化していた。熱斗も哲史と話し終わると飛んで帰っていった。

マオは言った。

「本当にごめん。頼りなくて。」

そういうとマオは消えた。

「マオ！」

熱斗たちは叫んだ。しかし、もうそこにはいなかった。

そんな時だった。

「また怪獣が現れたぞ。」

そこにはタラコングとは違った怪獣がいた。哲史と山地はすぐに変身して、怪獣に向かった。しかし、ぜんぜん歯がたたなかつた。

そして、やつつけられてしまった。

「俺たちの出番だ。ロックマン。」

熱斗とロックマンはクロスフュージョンした。

そして、攻撃を始めた。攻撃のあたりもよかつた。そして消えていった。

「君たちはそんな機械でそんなことが出来るとは驚きだ。」  
哲史とカレーキングは驚いていた。

「第120話 老人との出会い」

梅園先生がこう言った。

「もうここにいるいる必要はないだろう。もうそろそろ旅立とう。」

ここにいてもしょうがない。」

確かに合っている。しかし、なぜかここを離れるわけには行かないような気がしていたのだ。

その時、哲史と山地ともに一人のおじいさんが来た。

「こちらは、恩人の遁爺さんだ。」

遁は言った。

「ようこそ。この町へ。実はこの町にはある伝説があるんです。この町に大きな災いが起きた時、ある少年たちが助けてくれると。そして、わしは発見してしまった。この子達の力を。」

遁は山地と哲史を見た。その後、話しを続けた。

「この子達の力には驚かされるばかりです。そして、この子達にこの町に伝わるあるものを授けたのです。それは、少年たちが覚醒し、そして、持っている自分の力を最大限発揮させる超変身のための道具を。しかし、この子たちには絶対に使わないようにとしましたが、

もしかしたら使うことになるかも知れません。」

遁は熱斗達にあることを頼んだ。

「お前たちに見守って欲しいのだ。お前たちはしっかりしている。

絶対、力が100パーセント出せる。この事件を解決させるために一緒に旅をしてきてくれ。」

そして、ついに旅立つことになった。

そのころ湯田中は、福田を追い出した。そして、福田は熱斗たちを襲撃するために一人で旅に出た。

しかし、福田は一体どうやってロックマンを盗むのだろうか。

そんなことも知らず、新たな仲間を迎えた9人はそれぞれの目的に向かって突き進むのであった。

この文章は<http://faiataetujj.web.fc2.com/sabufail/010>で公開されたものです。

ペナルティ2 - 3 (第121話〜第130話)

|| 第121話 / 第4話 廃墟の町で ||

熱斗たちはまた砂漠の中を歩いていていた。

「何でこんなに砂漠が多いのでしょうか。」

熱斗が言った。しかし、そこにはいつも答えてくれるマオはいなかった。

「いつまでこんな生活が続くのだろうか。」

ペナルティが次に言い始めた。仲間の中から大きな柱がなくなったような気がしていた。

太陽は容赦なく照りつける。

そんな生活が二日続いた。そして、ようやく次の町が見えてきた。

「町だ。」

熱斗たちはもうへとへとだった。

しかし、町に着くとそこには誰もいなかった。

「一体どうして。」

まわりを見渡していたペナルティは血糊を見つけた。震えが止まらなかった。

「この町は、多分あの怪獣たちに攻撃されたのだろう。」

炎山は言った。

「こんな被害を抑えられなかったとは。」

哲史は地団駄を踏んだ。

「まだこの近くにいないのか。」

そう言ったのは、山地だった。

その時だった。砂漠の中から怪獣が姿を現した。

「行くぞ。」

哲史が言った。それに山地が着いていった。

怪獣がいきなりしゃべり始めた。

「お前たちがあの・・・」  
怪獣はびっくりしていたが、それよりも熱斗たちのほうがびっくりしていた。

しかし、哲史たちにはひるむ隙などはなかった。もしかしたらこの間にも襲われているかもしれない。そういうことだった。

しかし、強かった。哲史たちではどうにもならなかった。

それを見ていた熱斗とロックマンはクロスフュージョンした。

しかし、それでもだめだった。いくら攻撃をしても効果はなかった。「そんな攻撃が効くと思っっているのか。お前らがその気なら。お前らをやっつけてやる。」

そして、怪獣の方から攻撃を始めた。

もうだめかと思った時、熱斗が預かっていた謎のペンダントが光り始めた。

「この光はいつたいなんだ。」

熱斗たちも驚いている。

「見てみる。」

炎山が指差した方向を見て驚いた。それは、遁が言っていたグレイド変身だった。

「これがグレイド変身か。」

炎山と熱斗はさらに驚いた。力は半端じゃなかった。

そして、怪獣は倒された。

熱斗は怪獣に聞いた。

「さっき言いかけたことは何だ。」

それに怪獣は答えた。

「その力はある種族に伝わる凄い力だ。それと七つのしるしが合わさったとき、地球最大の力が地球最大のある生物を倒すことになるだろう。」

それを言い終わると怪獣は目を閉じた。

町を出たらそこには海が広がっていた。久しぶりに海を見た熱斗たち。

そんな時にPETに一通のメールが届いた。

「何でこんな所にいるのに届くんのだ。」

熱斗は不思議に思った。さっきまで電波がなかったのだ。

メールにはこう書かれていた。

『この海を渡ったところにある島に來い。』

海を見渡すと島がぼつんとあった。熱斗は食べ物にありつけると思い船を一生懸命捜した。

「あの島に來いということか。」

ペナルティはなんとなくいやな雰囲気が出た。

「あそこに船がある。」

山地が言った。

そして、9人は船に乗って島に向かった。しかし、いくらモーターボートだからとはいえ、9人はさすがにきつい。

島に着くとそこにはメイド姿の少年が立っていた。

熱斗は驚いていたが、メイリイには見覚えがあった。しかし、名前が出てこない。

「こちらへどうぞ。」

メイド姿の少年は暗い廊下を案内した。熱斗は食べ物にありつけると思い楽しみにしていた。

「ここでお待ちです。」

メイド姿の少年が案内したのは廊下の突き当たりだった。

「どこにもドアなんてないじゃないか。」

熱斗が言ったとき、床が突如消えた。

「一体俺たちをどうするつもりだ。」

熱斗は怒っていた。それに横から男が答えた。

「君のナビ。ロククマンをいただくのさ。」

その声は、湯田中から離れた福田だった。福田はさらにこう言った。

「もしも渡さないのならば、この牢屋からは一生出られないでしょう。」

そのやり方に熱斗は怒りを感じていた。

「そんなのずるいぞ。やるならネットバトルをしろ。」

しかし、福田はそれに応じなかった。

そのとき、熱斗はあることを思い出した。そして言った。

「ロツクマン。クロスフュージョンだ。」

そして、クロスフュージョンした。

「そんなバカな。」

福田はただただ驚いていた。

そして、牢屋を破壊しようとしたとき、いきなりゆれが襲った。

「何だ、このゆれは。」

梅園先生が言った。そのゆれは実は地球にあることが起きようとしていたのだ。

## Ⅱ 第123話 / 第6話 時限爆弾Ⅱ

突如のゆれでロツクマンとのクロスフュージョンは解かれた。そして、そこにまたメールが届いた。それは祐一郎からのものだった。

しかし、通信状況が悪い。祐一郎はこう言った。

「もうまもなく地球は滅びる。今までの出来事に耐えきれなくなっ  
たみたいだ…。」

その時、熱斗たちは思い出した。

何故ここにいるのか。それは、地球を元の状態に戻すため。しかし、  
このままでは自分たちが見知らぬ土地で死んでいくことになる。

熱斗は焦って福田に聞いた。

「ワイリーが言っていた時空制御盤はどこにある。」

しかし、福田には分からなかった。福田はこんなことを話した。

「この建物はワイリーが別荘として使っていたものだ。この建物の  
どこかにあるのではないか。」

福田は一度だけこの島に来たことがあった。あの町で惨敗して引き上げる途中に寄った島だった。

しかも、その中を案内されて、この島のことを分かっていた。

そして、この島にある地下倉庫に案内した。福田は湯田中とは喧嘩していたものの、ワイリーとはまだまだ友好関係であった。

そんなことを気にしているよりも熱斗たちは血眼になって探した。

「あった。」

梅園先生が声を上げる。

そこには巨大な装置があった。

「ロックマン頼む。」

熱斗はプラグインした。

中には大きな球があった。

「これが、今の世の中を動かしているプログラムか。」

その球はだんだん速くなっていった。

「慎重に。」

少しでもはずせば、どうなるかわからない。熱斗は珍しく慎重だった。

しかし、現実では、次々と謎の天変地異が起きていた。空は一面灰色に包まれた。

ロックマンは、プログラムにあるものを打った。その瞬間、プログラムはストップした。

「やったか。」

熱斗はそう思った。

空にまた青空が戻ろうとしていた。しかし、まだまだこれだけではすまなかった。

「第124話 / 第7話 ピンチにたたされた十人」

熱斗たちは旅立とうとしていた。その時だった。玄関にある男が乗り込んできた。

「あの小僧め、一体どこに行った。」

それはワイリーだった。十人はワイリーにすぐに見つかってしまった。

「こんなところにいたか。確かに地球を救ってくれたことには感謝してやる。しかし、敵であることには変わりない。」

ワイリーは熱斗たちが救っていたことを知っていた。そして、こんなことを言った。

「お前らは、どうやら元に戻したいらしいな。しかし、君たちには無理だ。あの大きな力がなければ。」

話入りの言いかけた言葉に熱斗たちは疑問に思った。

「あのちからとは、もしかや七つのしるし。」

熱斗が聞いてしまった。しかし、なぜか答えた。

「ああ。今となってはあの少年の行方は分からずじまいだ。」

ワイリーは悔しそうに言ったものの、心の中ではうれしがっている。そして、十人は旅立った。

「ああ。何であんなややこしい連中を連れてきたんだ。」

ワイリーの問いに福田はこう答えた。

「私は、いいロボットを作るためにあなたと組んだのです。だから、一刻も早く手に入れたいのです。」

ワイリーは怒りたかった。しかし、このままでは、支配のための作戦を失敗に終わらせるだけだった。ワイリーはあることをさらに目論んでいた。

そのころ熱斗たちは近くの海辺の町にいた。その町は、どうやら温泉町らしくいたるところに旗が立っていた。

「久しぶりにお風呂だ。」

実はあの町をたつてから一度もお風呂に入っていないのだ。しかも、砂漠で汚れ、さらには日光に照らされ汗をかいていたのにも関わらず……。

ある一軒の温泉に入った。しかし、なぜか浴室の様子がおかしい。

「なんかおかしい。」

ペナルティはまたいやな雰囲気を感じた。ただし、いつもの感じとは違った。

「第125話 / 第8話 脅威！組長の秘密」

浴室のドアを開けたペナルティが言った。

「まずい人たちがいるんですけれども…。」

そこには背中に刺青を入れた人がぞろぞろといた。ペナルティはこんなことを考えていた。

刺青した人が温泉なんて入っていいのだっけ。

そんなことを考えてると一人に気づかれた。

「なにやってんだそこで。」

怒鳴られただけでも怖い。しかし、スツポンポンの状態では立ち去ることができなかった。

仕方なく男たち総勢7人？が入っていった。

そのころまたまた変なことを考えているシロウはこそそ女湯に入ってしまった。しかし、女たちに捕まるはめに。やれやれ困った奴である。

湯の中には組長らしき人物が部下に囲まれて入っていた。

「風呂に入るか。」

熱斗が言った。しかし、このままでは冷や汗をたらすばかりでちっとも風呂に入った感じがしない。しかし、ここで逃れれば怪しまれる。まったくいやなものである。

仕方なく入った。しかし、せいぜいは入れるのは二、三人。

その時、組長が言った。

「ああ。お前らは、俺が探していた子供たちじゃないか。」

いきなり組長に言われ、7人はびっくりした。それよりも子分のほうがびっくりした。

子分は言った。

「こんな子供を捜して何になるんですか。組長。」

組長は言った。

「私には秘密があるんだよ。子供時代、変な力があつたんだ。それを今まではアツシは隠していた。この子供たちが持つている力と同じものを。そして、ある人からこの前頼まれたんだ。その子供たちを捜し、今おかれている地球の状態を改善して欲しいと。」

子分の一人は思いだした。それは、組長を訪ねる一人の老人を。

その老人に子分も不思議がったが、組長が出てきて、そして、部屋で話し始めたのだ。

それがこれだったのだ。

「第126話 / 第9話 今解決しなければいけないんだ！」

組長はさすがの長湯だったので、もう風呂を出るといった。そして、後で話の続きをします。

ようやく緊張から開放された8人（シロウはまだ緊張が解けていないが…）は風呂に入った。

「一体、何故組長はそんなことまでして探していたんだろう。」

ペナルティは疑問に思った。しかし、こんな所で話していて相手を待たせては悪い。みんな早くお風呂から引き上げてきた。そして、入り口で老人と話している組長を発見した。組長と話している老人を見るとその人は、遁ではないか。

「遁さん。」

山地が言った。それに遁は答えた。

「こんな所にいたか。会えててよかった。心配していたんだ。なんか地球が乱れそうになったんだ。しかし、本当によかった。」

なぜか遁は言った。その言葉に気になった。

その頃科学省では熱斗たちを必死で探していた。

「いました。」

名人が地図に示された赤い点を祐一郎に説明した。

「ここにいるのだな。」

それが終わるとへりを出してきた。そして、言った。

「これから熱斗のところに行ってくる。」

祐一郎はへりで飛んでいった。

そんなことは知らずに熱斗たちは遁からあることを聞いた。

「実は、今起きていることはいずれか治さなければならぬ。そうしなければ、多分、地球はじきに消滅する。しかも、この前のように行かない。」

遁は知っていた。熱斗たちが地球を救ったことを。

しかし、そんなことに驚いている暇なんてなかった。

解決できなるといふ言葉に熱斗たちは深刻そうな顔をしていた。

「だから、君たちは、すぐに七つのしるしを探さなければならぬ。」

「

遁にペナルティは言った。

「実は、マオがすべて持っていたのです。七つのしるしを。」

遁は驚いた。ペナルティは言い続けた。

「マオは、あの町で死んだ。ということは、もうこの世の中から七つのしるしは消えてしまった。」

しかし、遁は反論した。

「必ず帰ってくる。あの少年には、ここに残したものがあつた。それは、友情だ。」

その言葉を聞いた瞬間、ペナルティや熱斗たちの頭の中を何かが走つた。

Ⅱ 第127話 / 第10話 マオとの友情Ⅱ

マオとの思い出がペナルティや熱斗たちの頭を走っていた。

それは、あることだった。マオはみんなのために犠牲になりかけた。

その時の言葉が頭を駆け巡っていた。

「メイリイが好きだといっていたよな。」

確かに、マオはとても大事なものを残していった。

そこに、遁が言った。

「そう。きつと戻ってくる。」

豚の言葉に励まされたような気がした。今までの雰囲気が一気に消えたような気がした。

そんな所に、一台のヘリが到着した。熱斗は驚いた。なぜなら祐一郎が降りてきたからだ。

そして、いきなり祐一郎は言った。

「大丈夫か。」

その言葉に、哲史が言った。

「始めまして。」

祐一郎のことは熱斗から聞いていた。

しかし、祐一郎はなんて答えていいのか分からなかった。

熱斗たちは、今までのことを話した。マオが消えたこと。哲史と山地に出会ったこと。哲史と山地に特殊な能力があること。そして、地球を今の状態に何とかしたということ。

それを聞いた祐一郎は言った。

「そんなことがあったのか。そして、君たちにはそんな力があるのか。ビツクリだ。地球にはまだまだ謎が隠されているな。」

「そんなことよりも、何故ここへ。」

熱斗に止められてしまった祐一郎は言った。

「ただ止めるだけではだめだ。システムを戻さなければ、今まで以上のことが起こる。」

それは、遁が言ったことを同じだった。

遁は言った。

「私と同じことを唱えるとは。一緒に協力してください。」  
何か変な雰囲気だった。

このとき、新たな動きが地球を襲うことになるとはまだまだここにいる人たちには分からなかった。そして、究極のことが行われるとは思わなかった。

熱斗たち十人は、援護のヘリと二機で秋原町に戻ってきた。理由は山地と哲史の力の原因を調べるためだった。しかし、十人が二機のヘリに乗るととてもきつい。(そして暑苦しい。)

祐一郎は早速検査を始めた。体の構造には何も異常はなかった。しかし、身に着けているあるものに祐一郎は関心を示した。それは、ペンダントだった。

普通のペンダントのように見えるが、形がよく似ていった。そして、それを今度は調べ始めた。その時だった。ペンダントに立体映像が現れた。

「これは。」

祐一郎はものすごい勢いで調べた。

「このペンダントには、七つのしるしとくつつくと、獣化ロックマンと熱斗がクロスフュージョンしたときのような効果が現れるのだ。ただ今の力でも、熱斗とロックマンがクロスフュージョンしたときと同じ力が発揮されている。しかし、これからどんな状況になるかは我々にもまったく想像できない。七つのしるしを早く手に入れておいたがよい。」

しかし、マオはここにいない。遁が言っていたように戻ってくるのだろうか。

マオは一体どうなってしまうのだろうか。

その頃、マオはある空間をさまよっていた。そこにはマオ一人しかいなかった。

マオの目の前に突然霧のようにあるものが現れた。それは、見たことのない動物だった。その動物は直接マオに話しかけてきた。

「あなたの人生は凄く面白い。私でも見たことがあります。」

マオは名前を聞いた。それに、その動物はこう言った。

「私は、人を管理しているものです。あなたは、元の場所に戻りたいと思っていますよね。」

それにマオはうなずいた。

「あなたはきつと元の世界に戻れます。あなたを今、地球の人間は必要としています。もしあなたが戻らなければ、あなたたちのお友達をはじめ、地球の生物は消滅するでしょう。」

それを聞いてマオは驚いた。そんなことにはなつて欲しくない。

「一体どうすれば元の場所に戻れるのですか。」

マオは必死に言った。これからまた新たな奇跡が起きようとしていた。

「第129話 / 第12話 地球を救うために」

「私には分かりません。だいたい人間が一度消えたら、そう簡単には戻れないですよ。」

その動物にも分からなかった。

「一体、誰ならわかるんだ。」

「それは、大妙人様に聞かないと。」

その時だった。そこに大妙人が現れた。

「大妙人様。」

動物は丁寧にお辞儀をした。

「君がマオだね。君は今までいろいろな危機を救ってくれた。そして、君も知っているとおおり、地球が消滅するかもしれないのだ。それを君に解決してほしい。仲間たちは、マオを待っている。これは特例だ。君は、地球に必要な人間だ。最後に、今までのことは地球の人間には話してはいけない。話したら、君はまたこの天の葦原に戻ってこなければならぬ。」

「よろしい。がんばってくれ、私も応援しているぞ。」

そう言った途端、秋原町に戻っていた。

そこにたまたま熱斗たちが通りかかった。

「マオだ。」

熱斗たちは喜んだ。しかし、もつと喜んだのはそれを聞いた祐一郎の方だった。これから、人類の将来をかけた戦いが始まることになる。

そんなときある一人の男が秋原町を訪れていた。一体何をたくらんでいるのだろうか。

男は、熱斗の家の前に立った。そして、不気味な笑みを浮かべた。

そして、飛び込んでいった。

「大日本帝国万歳。」

その声を聞いたとき、ペナルティたちはぞつとした。

それは、林だったからだ。しかし、何故ここに？

ペナルティたちは不思議がった。

「お前たちは、松ヶ丘からの逃げ出したやつらだ。」

そこに、山地と哲史が来た。そして、変身をし始めた。変身した二人にかなう相手ではなかった。

林は逃げていった。10人はそれぞれ日常生活？に戻っているのがある。

「第130話 / 第13話 デジモン出現！」

新たなことが分かうとしていた。それはこんな所から始まった。

熱斗たち10人が旅をしていた頃、インターネット上で新たなデジタマが孵化した。

そのデジモンはすくすくと成長していた。

そして、ついに秋原町に現れた。しかし、誰もまだデジモンだということは分かっていない。単なる怪獣だと思っていた。

「行くぞ。」

熱斗や哲史たちは戦い始めた。まだデジモンだということを分からずに。

デジモンにやられながらも何とか倒した。そこに6人の中学生が来た。どうやら、新一年生らしい。

「君たち危ないよ。」

それに中学生はこたえた

「僕は八神太一。実は、このデジモンという動物と戦ってきたんだ。」

子供たちを見たらみんな今までに見たことのない動物が横にいた。

熱斗たちは驚いた。そして、科学省へ連れて行った。

祐一郎は困った顔をした。一体どうやって調べればいいか。

そして、祐一郎は聞いた。

「君たちは、どこから来たんだい。」

それに八神が答えた。

「デジタルワールドにいたらここに人間がいたんだ。びっくりしたよ。まさかこんな所で人間に会うとは。」

祐一郎はますます混乱してきた。そこで、また子供たちの一人が言った。

「僕は泉 光子郎といいます。僕が研究していて分かったことがあります。それは、地球と似た世界で、何でもデジタル化されているということです。」

それを聞いた祐一郎は分かった。地球とデジタルワールドがくっついたことを。

「一体これからどうなってしまふのだろうか。」

熱斗たちは新たなことが分かり不安になった。

そして、祐一郎はこんな仮説を立てた。

「最近出現している怪獣たちはみんな実はデジモンだったんだ。これからもデジモンは出現するだろう。」と。

この文章は <http://fai.tate.tuji.web.fc2.com/sabufail/010> で公開されたものです。

ペナルティ2 - 4 (第131話〜第140話)

「第131話 デジモンを食い止める！」

祐一郎はあることを決めた。それは、熱斗たちにこのネット空間。そして、時空を元に戻す仕事をさせることを。七つのしるしはそろった。後はどうやって山地たちの力を引き出すかが勝負の決め手だ。それを考えるのに徹夜した。一体どうすればいいのか。悩み続けた。そして、早朝。ある人がたずねてきた。遁だった。

「わざわざ遠くからお越しなつてありがとうございます。ところで何故この場所にお越しになったのですか。」

祐一郎の問いに遁は言った。

「いや。なんとなくここにたどり着いたのです。しかし、この町は凄いですね。高い建物ばかりで。ところで、すべてが分かってきましたか。」

それに祐一郎はこう答えた。

「確かに、七つのしるしを持ったマオという少年は戻ってきました。しかし、どうやって組み合わせたらいいのか分からないのです。」

それを聞いた遁はこう言った。

「それは、自然に現れます。あの子達が必要だと思ったときに発動するのです。」

祐一郎は遁名行動に疑問を持った。そして聞いてみた。それに遁はこう答えた。

「実は、私には町である事を託されているのです。それは、七つのしるしとあの子達の変身の力を管理することです。それをしなければ大変なことになる。しかし、今は町に伝わる伝説どおりに行動しなければならぬ。これは 人が予想していたことなんです。人間がこんなことを起こすと。」

祐一郎はびっくりした。人はこんなことをしてくれたことを。

そして、熱斗たちを呼んだ。

「みんなでまたいろいろな所をまわり、デジモンたちを消去していく。そして、最後にワイリーの別荘に行って、地球と時空を元にもどしてほしい。」

熱斗たちは了解した。そんなことは分かっていた。

新たなメンバーを加え、16人となった。こんな状態では動きが取りづらいが、最後のワイリーの館ではこのくらいは必要になると祐一郎は計算した。

そして、旅は始まった。

〓 第132話 小江戸にデジモン。 〓

「今度はどちらの方向から行くか。」

総勢16人は悩んだ。先頭に炎山とマオにした。この二人は頼りがある。

「じゃあ。この前行った方向ではない方向にしよう。」

秋原町は南に海がある。この前は北の方向へ行った。残りは西と東だ。

「じゃあ。西にしよう。」

熱斗が言った。しかし、なんとなくの発言だった。しかし、みんなは賛成した。

秋原町を出た。そこにはあるはずのない光景ばかりがあった。山が横を通り、まるで房総のような雰囲気だった。

そして、お昼を過ぎた頃、町が見えてきた。

ロックマンに祐一郎はあるものを渡していた。それは、地図だった。

「ここは、どうやら小江戸町というらしい。」

町には蔵がきれいにあった。八神はこう言った。

「ここは川越か。」

川越といえば蔵造りの街というイメージが強い。八神は一回だけ川越を訪れたことがあった。

ペナルティは川越と聞いてぴんとこなかった。東京ではこんな話がある。城南地域に住んでいる人が東京の城北の地名を聞いてもわからないという現象があるのである。

「そんなことよりも飯が先だ。」

熱斗とシロウはさつさとある一軒の店に入った。

「そう言えば、川越って芋が有名だったよな。」

八神は川越で芋せんべいやらともかく芋がつくものが多かったことを思い出した。

熱斗たちの前に出てきた料理はすべて芋料理だった。芋ご飯・芋のおひたしなど…。

そんな時だった。

「巨大モグラが出たぞ。」

それを聞いた八神は思った。まさかドリモゲモンじゃないか。

しかし、そんなことを考えている暇はない。

「やっつけるぞ。」

七人の選ばれし子供たちはデジモンとともに攻撃を加えた。それに観念したのかドリモゲモンは逃げていった。

「待て。」

八神は言った。しかし、追いかけてなかった。地下はドリモゲモンの得意な場所だ。

こんな状態の総勢16人だった。

〓 第133話 穴から出たところは・・・〓

熱斗たちは、あとを追いかけることに決めた。しかし、七人の選ばれし子供たちだけが行くことになった。

そのほかの九人は元の場所にいることになった。

七人は罨がないかを確かめながら慎重に進んで行った。

熱斗たちも地上を歩いていった。

穴の中で先頭にいた八神が言った。

「出口だ。」

その声に七人は少しほっとした。

しかし、出てみると見覚えのある町並みだった。川越の町並みよりも近未来的な町。新交通システムが走り、人々がいろいろなことをやっている。そうその町は八神たちが住んでいる場所。お台場だ。

「これは夢だよな。」

八神が言った。こんなところにお台場があるわけがない。

しかし、確かにお台場だ。これは、読者なら分かるだろう。そう。時空が変化して現れたものだ。

しかし、一体ドリモゲモンはどこへ行ったのだろうか。

しかし、久しぶりのことに、皆うれしかった。

そのころ、地上を歩いていた八人はなかなか穴からの出入り口が見つからないことに戸惑っていた。

「捕まってしまったのかな、八神たち。」

シロウはろくなことを言わない。しかし、熱斗や炎山たちも心配なのだ。

ちようど山にぶつかった。このまままっすぐにはいけない。しかし、八神たちはこの下をずっと進んでいったのである。一様、二手にわかれることに決まった。

「マオとペナルティたちは右へ。俺と熱斗、それに桜井はこっちに行こう。」

そして、それにみんな賛成した。

それぞれ二手に別れ、それぞれが八神たちを探しに行くこと。そして、最終的には地球を元に戻すことを目指してひたすら進んでいった。

## Ⅱ 第134話 企む料理屋の男Ⅱ

マオたちが少し進んだところで夕日が山に沈んだ。

そんな中を歩いていると一つの村が現れた。

「あそこのどこかに泊めさせてもらおう。」

マオが言った。そして、村に着いた。その中央にはお店があった。お店にはまだ人がいるらしい。

「ごめんください。」

マオがたずねた。そこは小さな料理屋だった。中から男の人の声がする。

「今日、ここに泊めさせてもらいたいのですが。」

いきなりのことに男は戸惑ったが、やむなく泊めることにした。

「夕食はまだなのかい。」

男が尋ねてきた。

「いいえ。心配には及びません。自分たちで作りますから。」

マオの言葉に男は少し心にひっかかった。

「君は料理が得意なのかい。」

男はマオが中華なべやら包丁やらを持っている姿を見てそう思った。

「はい。」

マオが答える。

「ちょっとだけ後で味見させてくれないか。」

男の問いにマオはあっさりとオーケーを出した。

マオが料理を作り始めた。隣にはおなじみ、アシスタントのシロウとメイリイがいる。

シロウとマオのコンビは何かとって調子がいい。(お笑いについても…)。

作った料理が完成した。それを泊めてくれた男が食べた。

「これは、おいしい。」

その時男の中にある発想が浮かんだ。男はマオたちを料理人として使おうとしていたのだ。

その頃、熱斗たちは人っ子一人も見当たらない。

「何でこんな所に来てしまったんだ。」

桜井が言った。しかし、そんなことは言ってられない。

そんな所に一つの小屋が現れた。

「こんな所に小屋があるなんて幸いだ。今日はここに泊まるう。」  
しかし、その小屋は立て付けが悪かった。だが、ここしか泊まるこ  
とが出来なかった。  
我慢しながらもぐつつりと眠った。

Ⅱ 第135話 友断ち Ⅱ

そんな熱斗たちとマオたちとは対照的に、家でくつろいでいた七人  
はある心が芽生え始めていた。それは、このままでいたいという願  
望だ。

しかし、七人の子供たちそれぞれの心の中で葛藤していた。  
そして、次の日みんなが集まった。

「どうしようか。このまま戻らなくていいのだろうか。」

八神が言った。八神も本当は心配だった。

「ここは、行った方がいいですよ。」

泉は言った。

しかし、太刀川は反対した。

そんなことをしている頃、マオたちは朝から泊めてもらったお礼に  
店の手伝いをしていた。

しかし、店にはお客というお客が来ない。マオは男に聞いた。それ  
に男はこう答えた。

「実は、僕に料理がまずいというんですよ。」

男にマオは料理を教え始めた。これなら、少しでも長居してもらえ  
る。そう思った。

そんな頃、東京のお台場にいる七人の子供たちのところに一人の男  
が訪ねようとしていた。

それはワイリーだった。そして、ちょうど集まっている七人の子供  
たちに声をかけた。

「私は、時の旅の者です。あなたたちは悩んでいるようですね。私  
が解決してあげましょう。」

それを聞いた七人の子供たちは今悩んでいたことを話した。それは、ワイリーが予想していた回答だった。そう。その内容は熱斗たちを探し、この事態を解決するべきなのかだった。

「ある町で聞いた話だが、少年達が水を求めていたそうである。しかし、もう遅かった。体は水を受け付けなかったそうだ。そして、死んでしまった。」

ワイリーはうそでだませると思っていた。しかし、実体は違った。七人の子供たちは言った。

「大変だ。今すぐ旅をたなければ。」

それはワイリーにとっては不都合だった。もっと他の理由がよかった。しかし、今さら撤回できない。そして、ワイリーはある手段を使うことにした。

「第136話　ワイリーの考えとは」

ワイリーは七人の子供たちの回答にある手段に出ることになった。

それは、自らが子供たちを操ることだった。しかし、ワイリーもあまりやりたくはなかった。

しかし、ワイリーはこの方法しか思いつかなかった。

「じゃあ。これ食料だから。」

そして、睡眠薬が入ったカップ麺を渡した。

そして、七人の子供たちはお台場を後にした。

そのころ、マオたちは大変なことになっていた。それは、ある部屋に閉じ込められたのだ。

そして、男が言った。

「おまえたちは一生この店で働いてもらう。それに同意しなければ、ここからは出られない。」

マオは男に向かっていった。

「お前はそれでも料理人なのか、そんな料理人が作った料理がおいしいわけがないよ！だからここのお店には誰もお客さんが入らない

んだ。」

男は悔しくなった。続けてマオはこう言った。

「もしも料理人なら正々堂々料理勝負をしないか。」  
それについて男は受け入れた。

「じゃあ。自由に料理を作ること。そして、ここにいるメイリイとシロウに判断してもらおう。」

いきなりマオにいわれてシロウとメイリイは驚いた。珍しいことを言ったからだ。

「ただし、メイリイとシロウがどちらか分からないように器などは同じものを使う。そして、器を出す時は一緒に出す。」

それなら男にも勝ち目はある。

そして、料理勝負の火蓋はきっておとされた。

マオと男は何を作るかを考えていた。

そして、男は思いついたらしく、もう料理に取り掛かっている。しかし、マオの方はまだまだ考えていた。男が冷やかして言った。

「お前は料理を作らない気が。」

しかし、マオはそれに応じなかった。

一体これからどうなってしまうのだろうか。

Ⅱ 第137話 マーボチャーハン vs .きのこチャーハンⅡ

マオはやっと思いついたみたいだが、もう男はほとんど作ったみたいだ。しかし、なぜか普通の中華料理の麻婆豆腐とチャーハンを作っていると思えない。一体男は何を考えているのだろうか。

そんなことを言っているとマオはきのこを出してきた。メイリイたちは雑炊を作るのかと思っていた。しかし、それは違った。土鍋ではなく中華なべで炒め始めたのだ。

そんな頃、八神たちはお台場を出た。そしたらすぐに近未来的な都市は遠くに消え去り、また山並みが戻ってきた。

また町が見えてきた。もうお昼だ。しかし、お昼は町で食べられそ

うだ。地方の中堅都市という感じだった。

そこにはもちろん食べ物屋があった。そして、持っていた少しのお金で料理を食べた。

それを後ろから付いて来たワイリーは悔しかった。

別の場所にいた熱斗たちもほかの町についていた。

しかし、熱斗たちにはワイリーがこんなことをしていることなどは知る由がない。

八神たちは町にずっといたい。しかし、熱斗たちがどうなってしまったのかを早く知りたい。

そんなわけでお昼を食べると町を去った。どうやらここら辺は山が多い。次の町に行くのにも上がり下がりがきつい。

そんな頃、マオたちは判定時間となった。メイリイとシロウはどちらか分からない様に皿が出された。

後は、メイリイとシロウの判定に任せるだけだった。

二人の料理はそれぞれ題名に書いてあったマーボチャーハンときのかチャーハンだ。

どちらがマオの作った物かは後にして、シロウとメイリイの判定が決まったようだ。

「じゃあ。判定してもらおう。」

男は子供に負けられない。しかし、判定はきっぱりしていた。それはマオが作ったきのこチャーハンだった。

「何故だ。」

と男は言った。それにシロウが答える。

「味がぜんぜん違うんだよ。」

それを聴き男はあることを思い出した。マオが言っていたことを。

「参りました。」

男は深く頭を下げた。

これでまた旅が出来る。早く八神たちを探さなければという心がまた燃え盛り始めた。

Ⅱ 第138話 操られた七人の子供たち Ⅱ

マオたちは何とか男の手から脱出できた。この時、まさか次の町で八神たち七人の選ばれし子供たちと遭遇し、そして、戦うことになるとは誰も予想がつかなかった。

そのころ一つの山脈を越えたところにいた八神たちはへとへとになっていった。もうそろそろ夕方になるうとしていた。この状態はマオたちも同じだった。

次の町はまだまだ見えてこない。そして、ついに運命の夕食となってしまうた。

八神たちはカップ麺の中にある薬物が入っているなどとは知る由などなかった。

そして、ついに食べてしまった。これの作り方は実はワイリーが小岩に作らせたものだった。

それは聞き目があった。

そして、赤い目をしながらも次の町へ侵攻していった。

そんなこともしらずにマオたちは暗闇の中を進んでいった。

「ちよつと疲れた。休もうぜ。」

シロウが頼りないことを発した。しかし、町へ行かなければならない。こんな所ではとてもじゃないが寝られないし、食べ物もない。

そんなことを言っていたとき、光がかすかに見えてきた。町だ。マオたちは走っていった。

「すいません。今日一泊だけ泊めてくれませんか。」

こんなことはもう慣れてしまった。そして、泊まる所を見つけた。

「一体いつになったらこんな生活からはなれられるのか。」

メイリイは言った。

「僕たちはまず八神たちを探さなければならぬ。それから・・・」

「そんなこと分かっている。」

メイリイは少し切れていた。何かいやな雰囲気だ。

マオたちが寝ているときに八神たちは町に到着した。

「町の人間を殺してしまえ。」  
八神らしくない言葉を発した。そして、デジモンたちが町に攻撃し始めた。

「大変だ。怪獣が現れた。」

それを聞いてマオは外に出た。

「八神たちだ。」

しかし、いつもと様子が違う。

「やめるんだ。八神。」

それに八神が気づいた。

「来たか。この正義もの。」

「何を言うんだ。君だってそうじゃないか。」

「いや俺たちは生まれ変わったのだ。」

それを後ろで眺め、楽しんでいた奴がいた。ワイリーだ。

Ⅱ 第139話 追い詰められた町 Ⅱ

「俺は、人間に恐怖と戦慄を与えてやるんだ。」

その言葉にマオは耳を疑った。どこかで聞いたことがある。

そうか。誰に操られているのが分かった。

「ワイリー出て来い。」

マオが言った。それにメイリィたちが驚いた。何故なら木陰からワイリーが現れたからだ。

「何故そんなことが分かった。」

ワイリーは言った。

「あなたの言葉と同じことを言ったじゃないか。一体八神たちに何をした。」

それにワイリーは言った。

「それを聞いてどうする。お前たちには今、山地や哲史は付いていないだろう。お前たちがとめることは出来ない。しかし、教えてやる。秘薬で操ったことを。そして、お前さんが飲んだ薬よりも効

き目が強いことを。」

「何だと。」

マオは驚いた。そう。それは、小岩が作った薬だったからだ。マオにはどうすることは出来ない。

どんな料理でもこれは治すことは出来ない。

そんな時、マオのもう一つの力が動き始めようとしていた。

そう。その力とは七つのしるしだった。

その力が科学省で祐一郎と遁によってデータを取っていた山地と哲史を呼び出した。

「何かが俺たちを呼んでいる。」

祐一郎は聞き逃さなかった。そして、山地と哲史は科学省を後にした。

「一体、何が起きたのだろうか。」

祐一郎はその時の研究データに驚かされた。力が十倍になっている。山地と哲史はものすごい速さでマオのところに向かった。

「一体どうすれば。」

マオたちは次々と破壊される町を見ながら悩んでいた。しかし、自分にはどうしようも出来ない。

その時だった。

「あそこに今度は何かがいるぞ。」

町の人の声にマオは思わず見た。そこには変身した山地と哲史が立っていた。

「マオ。大丈夫か。」

山地が聞いた。

そして、デジモンと哲史たちの戦いが始まった。しかし、哲史のほうが強かった。デジモンは超進化したくても出来なかった。

それは、八神たちの心をすべて支配していなかったからである。そして、デジモンたちは次々と倒れていった。

「アゲモン。」

八神の発したその一言が薬の効き目を台無しにした。そう。元の八

神に戻ったのだ。

「また会えてよかった。さっきはごめん。」  
八神のその言葉にマオはやさしく声をかけた。

Ⅱ 第140話 再会。そして真実Ⅱ

「よし。後は熱斗たちと再会して、ワイリーと戦うのみだ。」

マオは張り切った。しかし、この後張り切れないようなことを知らされるとは誰も知らなかった。

実はもう熱斗たちの近くにいたのだ。熱斗たちとマオたちはそれぞれ同じ町を目指して進んでいった。

「町が見えた。」

シロウが言った。その町は、大きな大都市だった。熱斗たちにも町は見えた。しかし、まだマオたちは見えない。太陽がギンギンに輝いていた。もうお昼だ。

「どこかでお昼は食べよう。」

マオたちは一軒のお店に入っていた。そして、熱斗たちもそのお店に偶然に入っていた。

「おう。」

熱斗たちはマオたちを見てびっくりした。

「八神たちはいたのか。よかった。いままで俺たちとマオたちは必死で探していたんだ。」

熱斗たちにもようやく落ち着きが戻った。その頃、祐一郎はある装置を頼りにマオたちのところへ向かった。

そして、ちょうどお店を出たマオと熱斗たちの前に一機のヘリが降りてきた。

「みんな無事か。」

いきなり祐一郎が降りてきたのでマオと熱斗たちは驚いた。

そして、そんなことはお構いなく祐一郎が言った。

「七つのしるしと山地、哲史の持っている変身の力の関係が分かっ

「ただ。」

「そうとうと祐一郎はデータを持ち出した。」

「七つのしるしと変身の力が合体するのはマオ。つまり、七つのしるしの所有者が危機にたった時に発動するんだ。」

「それにマオが言った。」

「確かにあの時は危機的だった。八神たちがワイリーからある薬をもったラーメンを食べさせられて、町を破壊しようとしていたんだ。」

「熱斗は驚きとワイリーに対する憤りを感じた。そして、熱斗がその薬の名前を尋ねた。」

「僕が一回飲まされた薬だよ。そう。それは、幻の秘薬とまで言われていた操るための薬だ。」

「それを聞いたとき熱斗は思い出した。」

この文章は <http://fai.tate.tuji.web.fc2.com/sabufail/010> で公開されたものです。

ペナルティ2・5（第141話〜第150話）

「第141話 消える？七つのしるし」

マオたちや熱斗たち、それに八神たちに起きたことを話している時に祐一郎がマオにあることを聞いた。

「最近、何か変わっていないか。」

それに最初マオは驚いた。そんなはずはない。

「いやそうならいいのだが・・・」

祐一郎の言葉にマオは引つ掛かった。マオはそれを聞いた理由を祐一郎に聞いた。

「いや。あの湯田中とか言う奴が前、マオに七つのしるしが揃うと聞いたことがあっただろ。その時、しるしは居心地のいい人を選ぶと言っていた。ということは、マオの考え方や行動が少しでも変わればしるしは逃げてしまいかもしれないということだ。今、マオは思春期に入っている。考え方が変わりやすい時期だ。くれぐれも気をつけてくれ。もし、七つのしるしが消えてしまえば、山地と哲史に超変身が出来なくなってしまうかもしれない。そうなったら一生この状態になってしまうんだ。」

その言葉にマオは気になった。自分は本当に七つのしるしにとって居心地のいいところだろうか。と。

そんなことを考えていると祐一郎は新たなことを言い出した。

「そんなことよりももうそろそろワイリーの館に出発しなければならぬ。多分、今度の計画の失敗はワイリーたちにも痛かっただろう。」

そのことをスカッリ忘れていた。

「よし。ワイリーの館へ。」

そして、熱斗が地図を調べだした。

ロックマンが言った。

「ここから近いよ。熱斗君。」  
それを聞きいざ館に出発した熱斗たち。しかし、今までよりも想像をはるかに超えた戦いが待っていた。  
それは、ワイリーが仕掛けたものだった。  
しかし、そんなことも知らず。進み続けた熱斗たちの運命はいかに。

Ⅱ 第142話 ネットとデジタルワールドⅡ

この世界では時空とそして、インターネットが併合した世界である。実は、デジタルワールドはネットに存在していたのだ。それをしているのは選ばれし子供たちだけだろう。  
そうと走らずに旅を続ける熱斗たちの前にあるものが現れた。

「デジモンが現れた。」

八神が言った。そして、戦いが始まった。

戦いが終わったと、光子郎は言った。

「なぜ僕たちは未来の地球にいるのでしょうか。確か、デジモンを追いかけて、デジタルワールドに来て、そして、また進んでいたら未来の地球に現れた。」

それに疑問を持った。哲史たちの持っている変身の力は研究されていたが、1999年（この文章は2006年春から夏に書かれたもの。つまり、そこから比べても7年の差）からデジタルワールドを経由してここに現れたのは不思議なことだと思えない。

それは、みんなの心の中を蝕んでいた。

「よう。」

後ろから聞いたことのある声が出た。しかし、人間というのは聞いたことがあっても驚くものである。

それは、梅園先生だった。

「ゲームオタクの俺に説明させてくれ。」

よく分からない理由だった。しかし、そんなことはお構いなしに梅園先生が説明し始めた。

「デジタルワールドちゅうのは、つまりインターネット上のバクや  
らウイルスやらが作っているワールドなんだろ。そこでここからあ  
る定理が成り立つ。」

相変わらず声大きい。そうマオは思った。授業中も先生は廊下に  
びんびんに響かせて、他の先生を圧倒したそうだ。

「そう。そこでの共通点はインターネットという点だ。これがこの  
問題を解く鍵となる。たぶんデジタルワールドは時間を越えた存在  
なのではないだろうか？」

これらからより証明された。(終)

そう。その定理が正しかった。それを何よりも早く分かっていた人  
物がいた。ワイリーだ。そのための対策を採るためにあるデジモン  
と手を組もうとしていた。

「第143話 ついに乗り込んだワイリーの館」

何日も小さな町に立ち寄りながらついにワイリーの別荘まであと少  
しのところまで来た。

「これで、元の生活に戻るのか。」

みんなすこし寂しい気がしていた。しかし、このままでは地球が滅  
んでしまう。46億年という歴史が消えてしまうのである。その  
鍵をまだ大人にもなりきっていない少年、少女たちに預けられてい  
るのである。

その時だった。またもやデジモンが現れた。しかし、今までの敵と  
は違った。それは、完全体にデジモンだったのだ。

「おれに勝つなど1000000000年(一億年)地球の年齢分  
の46年)早いわ。」

そのデジモンの上にワイリーがいた。

「何でそんな所にいるんだ。」

「この方が目立つだろう。それに、このまま放っておくわけにはい  
かない。人間に戦慄と恐怖を。」

「まだそんなことを言っているのか。」

炎山はワイリーに激怒した。

「えい。やってしまえ。」

ワイリーは下に飛び降りた。

「あのおっちゃん大丈夫か？」

梅園先生が言った。それを言うが早いかのときにワイリーは下に落ちていた。デジモンが哀れそうな顔で見ている。

「えい。わしは大丈夫だ。早く子供たちをやっつける。」

そして、デジモンが動き始めた。

「行くぞ。アグモン。」

八神が叫んだ。アグモンが超進化した。完全体と完全体同士で戦いはじめた。

しかし、敵のデジモンのほうが強かった。八神のデジモンはたちまちやられてしまった。

「くそ。」

八神はよっぽど悔しかったらしい。

「次は僕が行きます。」

名乗り上げたのは光子朗だった。

光子朗のパートナーデジモンが進化した。しかし、やはりやられてしまった。

「くそ。このままで立ち去るわけには行かない。」

その気持ち皆の心の中を覆った時、マオの七つのしるしと山地たちの変身の力が合体しようとしていた。

「第144話 超変身！デジモンを倒せ！」

マオと山地たちを光が包んだ。

「何だ。一体。」

熱斗たちが驚いて見ている。

「超変身。」

山地と哲史に新たな力が備わった。そして、ものすごい速さでデジモンに攻撃を仕掛けた。

「がんばれ。山地。哲史。」

熱斗たちが応援している。それが力となった。

マオも驚いていた。自分の力がデジモンを倒していくことに。たまにマオが感じるものがあつた。それは、自分が本当に役に立っていたのだろうかということだった。

その答えが今ここに現れていた。

そして、ついにデジモンを倒した。

「やった。」

みんな喜んだ。

「くそ。次は覚えている。」

ワイリーは立ち去っていた。

「屋敷に突入だ。」

一斉に屋敷に向かつていった。

その頃ワイリーは次の作戦に出た。それは、屋敷に仕掛けられたからくりだった。そんなことを知らずに子供たちは入って行った。

「場所は分かっている。そして、祐一郎から八神やマオたちのための特別なチップをもらった。」

そのチップは熱斗たちだけでは無理だと思った祐一郎が熱斗に渡したものだ。

そして、長い廊下を通って行く。その時だった。先頭を歩いていた炎山が立ち止まった。そこには大きな穴があつた。

「からくりだ。」

炎山が言った。端の方の一本橋のような細さの部分を一入ずつ慎重に歩いていった。

「これからもからくりがあるかもしれない。」

炎山は気をつけた。ナビたちもどこにからくりがあるかを調べるために別荘を管理しているコンピュータに進入した。

その時だった。ロックマンが攻撃されたのだ。

「大丈夫かロツクマン。」

熱斗が心配した。そして、敵が現れた。敵のナビが言った。

「ここを通すわけには行かない。」

ナビは攻撃を始めた。当然ロツクマンたちも反撃を始めた。そのナビは弱かった。すぐさま倒されてしまった。

「先を急ぐぞ。」

炎山はナビが案内したとおりに進んだ。一体これからどうなるのであろうか。

|| 第145話 インターネット上へ ||

そして、ついに子供たちは部屋に着いた。しかし、もしかしたらワイリーがいるかもしれない。それを確認するためにナビに確かめてもらった。部屋には鍵がかかっていないという。

「じゃあ。慎重に突入するぞ。」

そして、ついに突入することになった。突入だ。

一気に入った。しかし、ここにはワイリーの姿は見えない。実は、ワイリーは他の部屋から監視していた。

「よくまあこの部屋まで来れたね。しかし、ここがお前らの墓場だ。お前らはもうこの部屋から逃げられないのだ。」

部屋には鍵がかけられていた。

「さあ。どうする。確かにそれは、この今の地球を管理してくれているコンピュータだ。」

ワイリーの問いの熱斗はこう答えた。

「それならそれを正常な地球にも戻すのみだ。」

そして、熱斗たちはプラグインした。

「さて、君たちに直せるかな。」

ワイリーは余裕そうだった。それには訳があった。

ロツクマンたちはまず、ある球体のものを見つけた。

「これが、今の地球のデータみたいだ。」

しかし、周りを見渡すとそれが何個も重なっていて、どうやって切り離せばいいのか分からなかった。

「くそ。一体どうすれば。」

熱斗たちは悩んだ。その時、八神が言った。

「じゃあ。俺たちが実際に行って判断してくる。」

「そんな無茶な。」

熱斗たちはそう思った。実際に無理なことだった。すこしでも間違えれば大変なことが起きる。

そんな時だった。またナビが一体現れた。それはいかにも強そうなナビだった。

「これは、わしが開発した全自動ナビだ。しかも、今までのナビとは100倍も違う。たとえロックマンでも倒せまい。」

熱斗は言った。

「ナビが現れた。今は子のナビを倒さなければ。」

そして、攻撃をした。しかし、相手にはその攻撃は聞かなかった。逆に相手の方が強かった。ロックマンたちはどんどんやられていった。

〓 第146話 デジモンとともに 〓

熱斗たちはあえなくロックマンたちをプラグアウトしなければならなくなった。

「何でこうなるんだ。」

熱斗は地団駄踏んだ。こんなところで止まってしまうとは。

「俺たちに行かせてくれ。絶対に戻ってくる。」

八神が強く言った。

「でも。」

「そんなことを言つてられない。さあ早く。」

「みんなの命が大事なんだ。」

熱斗の言った言葉に八神は心を打たれた。そんなに俺のことを思っ

ていたのかと。

しかし、熱斗を口説いた。みんなもこれを承諾してくれた。そして言った。

「みんな仲間だ。みんなで行こう。そして、みんなの力をあわせて戦おう。」

そして、熱斗がそのチップを入れた。皆は光に包まれた。気がつくところには敵のナビがいた。

「ロックマン。クロスフュージョンだ。」

ロックマンには少ししか力が残っていない。これしか方法がなかった。炎山や桜井も続いた。それにデジモンたちも進化した。

「みんなでやるぞ。」

それに驚いたのはワイリーだった。こんな軍団で攻撃されれば、こちらの負けだ。しかし、ここで引き下がれなかった。

「えい。みんなやつつけてしまえ。」

ナビにそう指令を出した。しかし、熱斗たちのチームワークのよさには負けていた。なんといつても20人近くの子供たちのチームワークだ。

そして、そのナビはやられていった。

「くそ。もう後がない。準備だ。」

ワイリーは何かの準備をした。それは、私にも分からない。

「あとは、これを解除するだけか。」

しかし、それは、まだ分からなかった。

そして、一旦戻ることにした。まずは出入り口を確保しなければならぬ。しかもここで考えるのもなんかいやだった。

そして、部屋に戻ってきた。今までとは変わらなかった。しかし、さっきの場所ではある人物が熱斗たちを探していた。

## Ⅱ 第147話 源内との再会 Ⅱ

源内は選ばれし子供たちを捜していた。なぜならあることを知っ

てしまったからである。地球に異変が起きたことを分かったちようにその時だった。

それは、黒い物体だった。それが浮遊していた。そして、それがやがてデジモンにぶつかった時だった。いきなりおとなしかったはずのデジモンが暴れ始めたのだ。

それには源内は驚いた。暴れがおさまったとき、源内はそのデジモンを家にもって帰った。

そして、黒い物体の正体が分かったのだ。それは、時空のひずみから現れたものだということ。

そして、選ばれし子供を捜した。そして、ここにたどり着いたのだ。

「さて、もう一回あつちに行つて、地球を救わなければならない。熱斗たちは元に戻ってきた。そこには源内がいた。」

「源内さん。何故ここに。」

光子朗が言った。それに源内が答えた。

「大変だ。デジタルワールドに黒いわけの分からない物体が浮遊し始めた。これはデジタルワールドだけの問題ではない。地球やネット上の問題だ。」

それを聞いて光子朗が熱斗に言った。

「今、地球を元に戻せばいろいろな所で問題が発生する。まずはそれを退治することが大事です。」

そして、急いでワイリーの別荘に戻ってきた。そして、外に飛び出した。

「ともかくこの近くから探してみよう。」

皆は近くを探していた。しかし、一向にいない。

「ここにはいないのかもしれない。みんなで他にところを探してみよう。」

そしてまた、旅立つことになった熱斗たち。それを知っているかのように黒い悪魔は熱斗たちのあとを追いかけていた。

悪魔は追いかける途中言った。

「あの子供たちからのろってやるう。子供というのは所詮大人の手下だ。簡単に乗っ取れるだろう。」  
それが、後に失敗する原因の一つだとはまだ悪魔は知らなかった。そして、悪魔たちは仲間を呼び寄せながら次の村を目指した。

|| 第148話 呪われた村 - 1 (二進法) ||

二進法を知っている人はいるだろうか。そう。パソコンは電源の入切で計算を行っている。それが二進法だ。いまや人々は二進法を知らなければならぬようなものだ。

私は、日本語は得意だ。しかし、記号のような(数学者、英語圏の人々にはすいませんが…)英語や数字は苦手だ。(その証拠に私は英語と数学だけはものすごく点数が悪かった。まあ他のもいとはいえないが…)そして、それを悪魔は武器にしようとしていた。この透明な悪魔は人間たちを次々にのろっていった。

そんなことも知らずに旅をしていた熱斗たち。村に着いていきなり驚いた。言葉ではなく数字でしゃべっている。しかもまだ言葉ならロククマンたちが翻訳できるが二進法で五十音順に並べ替えるなど到底無理である。(ちなみに五十音順に二進法で並べたところ5桁になってしまった。)

これが二進法だと最初に気づいたのは光子朗だった。パソコンが得意な光子朗はすぐに計算した。しかし、人々に、何が起きたのだろうか。

光子朗はこう考えた。

「もしかして、この村は呪われてしまったのではないのでしょうか。あの黒い物体に。」

しかし、そんな証拠もない。困り果ててる姿を悪魔は笑いながら見ていた。

八神が言った。

「その悪魔が現れるかもしれない。ともかくこの町に少しばかり滞

在しよう。そうすればなにか分かるだろう。」

それにみんなうなずいた。

そして、その夜。

悪魔たちはある作戦を考えていた。それは子供たちに取り付くことだった。

「私たちは、時空というお母さんから生まれた。そして、おいらには体がない。だから、子供だって生めないし、魔術だって使えない。いまこそ体をもらう時がきた。」

そして、夜中。光子朗は何か眠れなかった。パートナーのデジモン。テントモンと話していた。

その時だった。黒い物体がこっちに向かってくるではないか。テントモンは進化した。そして、その気味がわるい物を倒した。

朝、光子朗はみんなに言った。

「そうか。ここにはそれがいたのか。しかし、どうやって人々を戻せばいいのだろうか。」

八神は困った顔をした。その時、熱斗のPETにメールが届いた。

「誰からだろう。」

ロックマンは不思議がった。それは源内からだった。

「第149話 解決せよ！」

源内は言った。

「おまえさんたちは困っているようだが。それは解決方法ではないじやろうか。それをわしは発見した。あることをすればよいのじや。それは、七つの力を使うのじや。マオとかいう少年が持っていたじやろ。その力にはお前さんたちを助けるためにいろいろな機能が ついているのじや。」

そこで通信は切れた。その後も反応しなかった。

「どうやって僕の出すんだらうか。」

マオは困り果ててしまった。しかし、それは、突如として現れるも

のなのである。

それは、悪魔がもう一回現れたということが始まりだった。熱斗たちはメールを聞き終わるともう一回町を歩いていった。大きな道を歩いていった時だった。そこでまた悪魔が現れたのだ。その光子朗は反応した。

「太一さん。熱斗さん。」

その声にみんな反応した。そして、今度はアグモンが戦った。その時、マオの中にまた新たな力が起きた。

「何か、悪魔を実体化できるようなしてきた。」

八神が戦い終わったあと、そのようなことをマオは話した。

「じゃあ。次々と悪魔を倒していこう。」

そして、次々と悪魔をマオの力で実体化していった。そして、交代しながら戦っていった。

悪魔たちはたちどころにやられていった。

「これでみんなの中から悪魔は消え去ったのか。」

熱斗たちには満足していた。しかし、まだまだ続くことを熱斗たちは知らなかった。

その後町を出ようとしたとき人影が見えた。近寄ってみるが、それは人ではなかった。

「お前たちはまだ私たちの力を疑っているな。まあいい。これから人間どもに裏を見せてやる。」

その悪魔の言葉になぜか震えた。

その悪魔はそれをいい終わると消え去った。

「まだまだ悪魔と戦わなければならないようですね。」

光子朗が言った。みんなはうなずいた。

〓 第150話 呪われた村 - 2 (工 な村) 〓

熱斗たちは次の村へ向かっていった。

そして、半日で次の村に着いた。しかし、またもや様子がおかしい。

今度は村に人がいないのだ。

「村人たちはどこへ行ってしまったんだ。」

シロウは久しぶりに言った。今までシロウの出る幕が完全に他の人にとられていたということはあった。しかし、このあとさらにシロウを活躍させるようなことが起こるとは私も想像がつかない。(想像するとまるで深夜アニメの見すぎのように見える。ついでに私は見ていません！すいませんこんなつまらない話を持ってきて・・・)その頃、村人は近くの森に囲まれた神社の境内で村長の前であることをやらされていた。

熱斗たちは手分けをして町中を探していた。

そして、ついにマオは見えてしまった。

心臓はもうドクンドクンだ。

もうアーンと言いたくなっていた。他の人から見ても凄くエロイ少年にしか思えない。

そんなマオ以外の全員は町の中心部に戻ってきた。

メイリイはマオがいないことに気づいた。さすがである。

そして、マオが探しにマオが進んでいった方向に向かった。

そして、マオを見つけた。マオはもう興奮していた。その視線のほうを見たメイリイはマオの背中を思いつきりはたいた。

それにマオが気づいた。

「なにやっている!」

ついに村人の見つかってしまった。

その村長の顔を見て驚いた。それは、健太郎だったからだ。

「とつとと捕まえるんだ。」

村人が襲ってきた。しかし、マオの興奮のおかげで悪魔を凄い速さで実体化していった。

その悪魔はどんどんやつつけられた。

村人たちは気づいた時にはびっくりしていた。まさかこんなことをやっていたとは。

それに逆に悔しがっていたのは健太郎ぐらいであろう。

「何でお前がこんなところにいるんだ。」

マオたちは追及した。

しかし、それにも応じずに逃げて行ってしまった。

「所詮、健太郎は悪魔に呪われてもエロイんだな。」

シロウは感心していた。しかし、こんなことで感心してもらっては困るものである。

村の人々は感謝してくれた。もう夕日が落ちようとしていた。

「今夜はこの村に泊めて貰えませんか。」

それに村人は大喜びしていた。

この文章は<http://faitateuji.web.fc2.com/sabufail/010>で公開されたものです。

ペナルティ2 - 6 (第151話〜第160話)

第151話 呪われた都市(最先端な町) 〃

次の日。村の人に別れを告げ、次の町に向かっていた熱斗たち。それに悪魔たちはおびえていた。

「あの少年たちは俺たちの邪魔をしてくる。」

「どうしたらいいんだ。こんなに子供が難しいとは思わなかった。」

「次はどこへ向かうのでしょうか。あの子供たちは。」

「さあ。」

その時、悪魔たちは驚いた。なぜならそれは、悪魔のボスのいる町を子供たちは目指していたからだ。

「よっしゃ。これで子供たちも我が手に収まる。あんなに邪魔をされては困るからな。」

悪魔たちは急いでボスの所へ先回りした。そして、悪魔たちはボスを見つけてこう言った。

「私たちは、厄介な者を見つけてしまいました。どうかお力をお貸しください。」

しかし、ボスの反応はひどいものだった。

「お前らは人っ子一人も取り付けないのか。」

「そうではなく。」

悪魔たちは動揺していた。

「もういい。そんなこと。後は俺がどうにかしてやる。」

それに悪魔たちは喜んだ。

悪魔たちがこんなことになっていることはまだ誰も知らなかった。当然、熱斗たちも。

「あつ。大きな都市が見えてきた。」

シロウが言ったが誰も取り合わなかった。今度は何が待ち構えているのか心配だった。

町の中に入った。町の人は普通に生活していた。

「何だ。まだここは襲われていないのか。悪魔に……。」  
シロウがまた話した。シロウにはこれしかやることがなかった。しかし、何かマオにはおかしいと思えた。

「やはり、この町はおかしい。」

マオは近くの商店に入った。そして、驚いた。そこには食材はなく、代わりにサプリがおかれていた。

店の店員に食材を売っているか聞いた。そして、店員の口から衝撃的なことをマオは聞いてしまった。

「いや。もうそんな時代じゃないですよ。どこにも食材などおいていませんよ。」

そう。この町はサプリに汚染されていた。そして、それを仕掛けたのは悪魔だった。

「第152話 料理勝負を申し込まれたマオ」

マオはすぐに店を出ると熱斗たちを連れて町を離れた。熱斗が聞いた。

「何でサプリだけではだめなんだ。」

それにマオは答えた。

「それは、確かに栄養になる。しかし、サプリだけの生活を続けると歯が退化してなくなったり、逆に栄養を取りすぎて病気になったりするんだ。」

「じゃあどうする。」

熱斗の問いのマオはこんなことを言った。

「食料がいかにおいしいものかを知ってもらえばいいんだ。サプリには味などない。料理には味がある。味があるからこそ、食事は楽しいんだ。そして、料理を作った人の愛情を受けられるんだ。サプリなど、料理の情熱なんてこもっていない。それは、機械の情熱だ。」

マオの心の中は燃え盛っていた。そして、それを聞いた悪魔のボスはこう思った。

「もしも、あいつらに何かされたら困る。今こそあいつらの一身を殺すときだ。料理勝負を仕掛けよう。操った人間達を使って。」

悪魔たちはすぐに準備をし始めた。

そして、ボスはマオたちに矢を討った。それにメイリイは驚いた。誰だつて矢が討たれたら驚く。それに手紙が着いていることに気づくのも少し遅かった。

マオは読んだ。そこにはこうかかれてあった。

「料理勝負を申し込む！お前の力を確かめたい。」

その手紙に何か変なものを感じた。

「マオ、この勝負を受けるの。」

メイリイが聞いた。それにマオはこんなことを言った。

「何かあるに違いない。多分これも悪魔の仕業だろう。だいたいこの町には料理を作れる人が今いるとは思わない。多分、悪魔は俺たちを処分したいのだろう。そうはさせない。絶対に。」

さらに心の中が燃え上がってきた。

そして、場所へ行った。そこには観客がたくさんいた。しかし、悪魔はいなかった。いやマオ以外の人物には見えなかった。

そして、司会者が言った。

「え、これから料理勝負を始めたいと思います。もしも、この料理勝負に負けたら、その時はある特別な条件を結んでもらいます。」

一体、特別な条件とはなんだろうか。それを言わずに始まってしまった。

Ⅱ 第153話 町の人を救うために・・・Ⅱ

そして、料理勝負が始まった。しかし、相手はすぐさま手を上げた。もう料理ができたというのだ。マオは最初、びっくりした。しかし、その答えはすぐに分かった。それは、サプリメントだった。

そして、それから一時間近く経った。観客はそろそろ飽きてきたみたいだ。しかし、熱斗たちはマオの姿をじっと見ていた。この町の人、サプリメントというすぐに出てくるものをただ飲んでいただけでマオのものすごい料理の技術など興味を持たないが、普通の人なら凄いと思うような技術だ。

そして、ついにマオの料理が完成した。始めてみた八神たちは驚いていた。確かに料理はほとんどマオが作った料理か食べ物やで食べるものだったが、こんな風に料理しているとは思わなかった。

出来て審査に入った。審査員は会場から適当に選ばれた。その中にはアグモンが含まれていた。それに八神は悔しがったが仕方がない。しかし、司会者は言った。

「この料理勝負では、まず相互採点してもらいます。そこで相手が降参すれば料理勝負は終わりとなります。」

そして、相互採点が行われた。マオはそのサプリに味がすることに驚いた。口の中にまるで料理を食べているような味がするのだ。しかし、自分の料理には自信があった。相手も降参しなかった。

「両方とも降参しないようなので、ここで皆さんの中から適当に選ばせてもらいました審査員に審査してもらいましょう。審査開始。」  
そして、まず審査員はアグモンを除き、味のするサプリを飲んだ。

そして、口の中に広がる味に感動していた。アグモンもマオの料理に感動していた。次にマオの料理を食べた審査員は顔が凍りついた。何か忘れていたものを取り戻したかのようにだった。

悪魔は予想外の展開に驚いた。味のあるサプリがマオの料理に勝つと思っていたからだ。

そして、マオは悪魔に話しかけるように言った。

「皆さん、料理というのは、時間がないからといってサプリに代えていいものではありません。確かに、味のあるサプリは凄いものだと思います。しかし、どんなにサプリががんばっても出来ないことがあります。それは噛むということです。噛む事で脳は活性化されます。そして、あごの筋肉を養ってくれます。あごの筋肉が衰え

ればしゃべれなくなります。かむということはじゅうようなのです。

「そして、相手はひじをついた。」

「私の負けだ。」

ついにマオは、この町から料理というものを再びよみがえらせた。

悪魔のボスは頭を痛めた。このままではまずいと、そして、悪魔のボスはこの子供たちのあとをついて行くことにした。そして、いつかこの子供たちを操ってみせると心に誓ったのだった。

「第154話 時空大火事？」

熱斗たちは、悪魔が消え去ったことを確認し、次の町へ行くこうとしていた。しかし、町の様子がおかしい。町の人が騒いでいる。

「山火事だ。」

その方向を見てみると、確かに火事が起きていた。しかし、火事はそこだけではなかった。山中火事になっているのだ。

「大火事だ。」

シロウが言った。続いてどこからかこんな歌が流れてきた。

「怖いのは 地震 雷 火事 親父 それに はげ？」

しかもこれが繰り返し流れた。

「どこからこんな下手な曲が流れてきているんだ。八神よりひどい。」

「そんな俺がへたか。」

八神はけんかを始めてしまった。まあそんなことをやっている場合ではないことぐらいすぐに分かる。

そして、なぜ火事になってしまったのか。確かめに行った。現場について驚いた。森だけでなく土まで燃えているのだ。

「なんで土まで。大体、土なんて燃えないだろう。」

ペナルティは言った。

「ははは。」

周りから奇妙な声が聞こえた。

「誰だ。」

熱斗が叫ぶ。

「俺か。それは名乗れない。しかし、お前たちの恩人であることは事実だ。なんせ、元に戻したのだからな。まあ、敵だといっていいだろう。なぜなら、お前らの悪魔退治をさせられないようにしたのだからな。」

その声にも才たちは聞き覚えがあった。

「まさか、お前は川場か。」

才の問いに川場は少し焦った。しかし、無視した。

「まあ、せいぜい、元の世界に戻ってくることだな。」

その言葉で自分たちがどんな状況に立っているかがやっとわかった。

ここは、秋原町ではなく、他の時空に存在したべつの場所なのだ。

「くそ。」

みんな、地団駄踏んだ。

ここからでは、デジタルワールドにも秋原町にも程遠かった。

今から町に出ようとしても離れ小島の状態だ。一体何をすればよい

のだろうか？

## Ⅱ 第155話 時空漂流Ⅱ

火事は収まった。しかし、元の地球に戻ってしまったらしく、さっきの風景は永遠と続く道路と家々に変わってしまった。

「これから一体どうすれば。大体、ここが西暦何年なのかさえ分からない。」

熱斗がこんなことを言った。

「ここが西暦何年かなら人に聞けば分かります。ただし、ここから元の場所に戻るのには大変ですね。」

光子朗が言った。

「町の人に聞いてくる。」

そして八神は町の人の一人に聞いてみた。

「今は2004年だよ。ぼけているのか。」

そんなこと誰でも知っているような言い方をされたが、自分たちには分からないことだ。さぞかし、未来から来たなって言ったら、解剖されて、どうなるかというくらいだろう。

そんなことより、まずは元の場所に戻ることが先決だ。

「そういえば、2003年といえば、まだ2000年から3年しか経っていない。もしかすると、デジタルワールドの源内さんに連絡が取れるんじゃないか。」

八神の提案に光子朗が待ったをかけた。

「デジタルワールドが今存在しているかは分からない。」

そんな時だった。いきなり、熱斗のPETに祐一郎からかかってきた。

「大丈夫か。」

その声はちゃんと聞こえた。

「なんでここだと分かったの。」

「それは、時空を通して大丈夫なようになっていいるからだよ。前の反省を生かして、科学省が研究していたんだ。そんなことより、こつちに帰ってきてくれ。何かが起こりそうなんだ。」

「何かって。」

熱斗の問いに祐一郎は困ってしまった。実は、悪魔は秋原町でも増殖を開始していたのだ。

「ともかく、戻るには大変だから、李さんを派遣した。多分、もうそろそろ着くと思う。」

そして、通信が途絶えた。

「李さんが。」

何かうれしいような感じのペナルティだった。そして、何分か経ったころ、李さんは現れた。

李さんはすぐに秋原町へみんな連れ戻した。

秋原町に戻ってきた熱斗たち、しかし、そこにはいろいろと待ち構えていた。

「お帰り。」

祐一郎は自分の息子が無事に帰ってきたことがうれしかった。

しかし、熱斗たちはそんなことよりも知りたいことがあった。それは、誰が時空を元に戻したのかだった。祐一郎はあることを言い始めた。

「よかった。すぐに見つかって。」

その言葉は何を表すのだろうか。そんなことをマオが思った。しかし、祐一郎は続けて話した。

「時空を元に戻した人物はわからない。しかし、今、一番問題なのは時空全体に悪魔が飛び散ってしまってしまったことだ。実際、これは悪魔ではなくほかの物体であろうが、結果は同じことだ。人々を困らせるようなことをし始めたようだ。たとえば、2006年、ここでは悪魔が気候を操作し、さらには戦争を人々の間に起こそうとしている。2006年だけではない。悪魔が潜んでいる時代はたくさんある。そして、この時代にもいるみたいだ。」

そう。それが困るのである。しかし、悪魔退治ができないようにそのころある場所で悪魔たちによる集会が開かれていた。

「われわれは、地球の人類を恐怖におとしめ、さらにはその人間の体を奪い取り、仲良くみんなで暮らそうと努力してきた。前は、高性能なロボットをこの時代の首相とかいうお偉いさんに、どうか子供を預かってくださいといって、そのロボットに悪いことをさせた。しかし、所詮、脳みそを出すことしかできなかった。しかし、今では強力な助っ人がたくさんいる。いろいろな時代に助っ人がいて、その人たちの助けを受けながら、いろいろな場所でひそかに働いたり、もう実行したりしている。しかし、人間にも怖いものが現れた。それがあの子供たちだ。」

悪魔たちは急にざわざわし始めた。

「お静かに！その子供たちを倒すのに一番いい方法が現れた。それは、助っ人から教わったものだ。子供たちを私たちのものにしてしまえばいいということ。そうすればわれわれの明るい未来が待っているのだ。」

一斉に騒がしくなった。そして、作戦が始められることとなった。

## ＝ 第157話 忍び寄る影 ＝

そして、その夜。

みんなが寝静まったころ、悪魔は熱斗の家に忍び寄った。

そして、その悪魔はマオを見つけた。

悪魔はマオをすこし動かし、マオの中に入った。

次の日の朝、熱斗たちはどうしても悪魔を退治しなかった。科学省では祐一郎がこのことについてみんなを集めていた。

「ともかく悪魔たちを倒していかなければならない。」

祐一郎が言った。そのときにマオが答えた。

「悪魔たちがここにいるとは限らない。まだ事件がおきていないんだから。」

何かがおかしいとみんな気づいた。いったい、マオに何がおきたのだろうか。

その話が終わった後、熱斗はマオ以外の全員をマオに見つからないように集めた。

「何かマオにあったのだろうか。様子がおかしい。」

それに光子朗が言った。

「まさか悪魔が取り付いたとかということはないですよ。寝ているときとかに。」

それは考えられた。悪魔は俺たちには見えない。マオの持っている七つのしるしがないければ。

悪魔たちはそれも考えの中にあっただのだ。

「ところで、もしも悪魔がマオに取り付いているとしたらどうすればいいんだ。」

熱斗が言った。光子朗は考えた。しかし、なかなか考えが浮かばなかった。

そして、一度解散した。

その日中、マオの様子は少し変なものだった。変といっても秋葉系だとかそういう変ではない。

そのころ、ある男はその話を聞いて、急いで熱斗の家に向かった。

「こんにちは。」

熱斗の母は驚いた。まるで暴力団のお兄さんのような、赤のYシャツを身に着けていた。それは、梅園先生だ。そんなことを聞きつけた熱斗たちも最初は驚いた。そして、梅園先生が熱斗にひそひそ言った。

「なんかマオの様子がおかしいらしいじゃないか。」

そこまでおかしい訳ではない。しかし、様子を見せたほうが早い。そんな状態だった。しかし、悪魔たちの作戦はまだまだ続くことを熱斗たちは知らなかった。

＝第158話 消えてゆく記憶＝

今、地球からある希望の火が消えようとしていた。熱斗たちがすきを与えてしまった。それがために悪魔が侵略を始めてきた。梅園先生が尋ねてきた次の日には熱斗と八神がという感じにどんどんと心をとられていってしまった。もう、熱斗と八神がやられれば、舵の利かない船といっても同然の状態だ。そして、ついに最後の二人、メイリイとシロウがやられてしまった。しかし、誰も気づいていない。悪魔は自分たちを退治させないように記憶を少しずつ消していったのである。

ある日、みんなが集まった。それは、あるものが崩壊しようとしていたのだ。

「地球は平和になった。もう俺たちがいなくてもだいじょうぶだろう。」

八神たちが言った。それにみんなうなずいた。このままここにいるも時代がただすぎていくだけだった。そして、悪魔に取り付かれた祐一郎はみんなを返すことにしたのだ。

この状況をひそかに見ていた李には悪魔は見えないものの、悪魔が取り付いていることを悟っていた。

しかし、自分にはできなかった。まだあの子供たちに話していないことがあった。

でも、今はそんなことができなくなってしまったのである。

「じゃあ。」

そして、八神とマオたちはそれぞれの時代に戻っていった。

そこには、泣きというものがなかった。まるで無理矢理操っているようにみえたのだった。

ペナルティは元の今では2004年に戻ってきた。ペナルティも後もう少しで中学二年生だ。

ペナルティはあることをすでに忘れていた。それは、川場によって父母が殺されたことだ。しかし、今ここには父母がいて、まるで外から帰ってきたかのようにだった。

もうそろそろ4時だった。

今日は宿題などない。ゲームで遊べる。そして、以前のような生活に戻っていった。

しかし、これは空虚のものだった。父母は悪魔たちが未来から連れてきたのだ。未来といっても遺伝子技術がすぐく発展しており、簡単にコピーが作れた。それを悪魔たちは利用したのだった。

「第159話 元の生活に戻ったマオたち」

そのころ、マオたちはどうしていたのだろうか？

マオのあとを追いかけるかのようにある一人の少年と暴力団の子分

らしき人が時空を超えて過去に行った。それは、健太郎と梅園先生だった。二人の目的はそれぞれ違う。先に梅園先生のほうだが（健太郎の理由などたかが知れている。だいたい、なぜあんなにエロイのかがわからない。）それは、家庭訪問？らしいが、実際のところは、マオがどんなところに住んでいるのかが知りたかったらしい。（パンダじゃないんだから？）次に健太郎の理由だが、もうここまですればろくでもないことだということがお分かりであろう。その先は各自の妄想で…。（ひどい作者だな。確かに青少年教育上「小泉政権は逆にエロ人間を作り出したのではないか？たとえば秋葉系とか…」あまりよろしくないが、答えを書かないのもひどい。）そして、二人はマオたちを見つめる。

「何でここに二人が。」  
マオが問いかけた。

「いや。マオがどんなところにすんでいるのかなんて。」  
「そんな変なところに住んでいないよ。だいたい、なんでその格好なんだ。さすがにそれはまずいだらう…。」

まだ時を越えるなどということができるのは、人工的に作られたあのルートか、伝説なんかにある時越えの出来る特殊な力を持った人しか出来ないのである。だから珍しいのである。

そして、無理矢理店に連れ込んだ。まさか外で見つかったらどんなことが起こるやら。町中大騒ぎどころではすまない。

すぐに二人を着替えさせた。時空を超えるのにはこんな苦労があるのである。

もう夜、マオたちは早速店の手伝いだ。梅園先生と健太郎はおいしい料理を食べて感動していた。特に梅園先生は今までにマオの料理を以外に食べたことがなく、さらに自分の教え子だということも重なり、感動の量は半端ではなかった。

その夜、ついに健太郎は作戦を実行するときがきたようだ。（まったくしょうもない。だいたい、これは歴史の授業で学んだものから応用らしい。「その儀式はだいたい紀元前から紀元後ぐらいにあっ

たらしい。しかも中国で？」昔の人はどうやらあの物体に興味をそそられたらしい。(はさみを持ち出した健太郎は危険な顔をしながら廊下を突き進んでいく。いかにも危険だ。さらにはさみをもっているからおさらだ。そして、マオのいる部屋に入っていた。その先はどうなっていたかは知らない。ただ、最初のヒントからわかるように男の大事なところをどうかしようとしていたらしい。それを見かけたメイリイもさぞかし驚いただろう。どうやら気絶寸前まで行ったらしい。その夜、マオの怒りは収まらなかった。

(長くてすみません。そして、変な話ですいません。しかし、梅園先生はなにか隠し事をしているらしいです。それは、のちに明らかになっていくらしい。あとよい子は答えがわかってても絶対にしないでね。)

〓第160話/第42話 お台場に帰ってきた七人の子供たち〓

お台場に帰ってきた七人はそれぞれ学校の準備をし始めた。もう中学一年、これから、やら (3・1415...) などできて、さらにはDishやらI'm a boy やら中学一年の過程が終了すれば、it's a pen that brought pen (これは早かったかな?) なんか出てくるのである。とくに城は大変だろう。私立というのは6カ年で身につく量が半端じゃない。特に日能研平均60以上なんかとてもじゃないと思う。そんなことを知っているやつと知らないやつで態度は変わるだろうが、所詮スタートラインはおんなじである。

そんなことよりもここでも悪魔の存在は忘れ去られていた。日本は不景気の影響で自殺する人が増えた。(今では、忙しくて過労死するパターンが多いのではないだろうか。)それは、人々は悪魔の存在を知っていないから悪魔と戦おうなどという言葉が出てこないの  
である。

しかし、これに危機を感じている人がいた。それは、デジタルワー

ルドの源内だ。

それにしても、夏だから暑い。

そんな夏なのに（2005年から2006年は梅雨がなかなか明けず、梅雨明けが7月ごろになってしまった。）八神たちは早速次の日からサツカーだ。炎天下というのは非常に危険だ。しかし、球を追いかける少年たちにはそんなことは頭の片隅にも置いていないだろう。

そんな八神たちであった。しかし、これからもデジモンに振り回される人生を送ることになるとはさらさら思っていなかった。しかし、文化部である光子郎なんかは関係がない。文化部というのは人が少なくて大変だ。

光子郎はいまではパソコン部で自分のはまったパソコンに熱心だ。

その頭が、後で役に立つのである。

そんなこんなで生活が元に戻った八神たちをどうやって連れ戻すか。それを話し合う会議がひそか行われた。

この文章は<http://faiata.tetuji.web.fc2.com/sabufail/010>で公開されたものです。

ペナルティ2 - 7 (第161話〜第170話)

「第161話 新たなストーリーの始まり」

ある会議がひそかに行われた。それに参加したのは3人の男たちだった。李さんを筆頭に源内、遁だった。

「今、全員悪魔に取り付かれて、もう悪魔と戦うことを忘れてしまっている。それをいいことに悪魔たちはたくさんの人間に取り付いていつている。」

「つまり、熱斗たちに悪魔の存在を再確認させればいいのだな。」

「しかし、悪魔が取り付いている状況ではそれをやっても無駄だ。」

「じゃあどうすればいいのだ。」

白熱した議論が炸裂した。

頭を抱えた二人に李は言った。

「なにもかも最初に戻せばいいんじゃないのか。」

それは、李にもうすすす七つのしるしが逃げ、友情が崩れようとしていたのを察知していたからだ。

李は最初の出会いを語った。それは、未来が時空を巡って事件が奮発した。そこで、李は優秀な人材を探しに過去へと旅立ったのだ。

そこでマオという少年に出会った。そのときの強い信念に李はほれたのだ。それを生み出していたのは、今から考えればそれは、メイリイ、シロウのおかげかもしれない。

そして、さらに2003年に行つてペナルティを見つけたのだ。この時代では珍しく、正義感というのだろうか。そういうものがあつた。そして、李が作成したゲーム内で彼らは次第に友情を広げ、さらには、次々と相手を倒した。あるときは、デジモンのアグモンを倒し、またあるときは陰謀を倒した。

そして、その力はどんどん大きくなっていた。

それは、今、風前の灯になろうとしている。もう一回、初心に戻ら

なければこの事態は改善されない。  
そして、ある作戦を立てた。しかし、これには、時間がかかるものだった。でも、これこそが、後で役に立つのは三人もわかっていたからこそ立てたのだった。

## Ⅱ 第162話 爆破事件？Ⅱ

ある東京の郊外を一本の電車が走っていた。夕方の六時に走っているとこの間に、車内はから空きだ。車内には、始発の駅を通る新幹線に乗ってきた人と後は、どつかしらから沸いて出てきた人たちだ。そんな電車を標的にしようとしているデジモンがいた。  
しかし、何のためにデジモンが現れたのだろうか。

それは、李が用意したものだ。そして、八神たちと哲史たちを呼んだ。

そして、ペナルティにあわせようとした。

李は哲司と八神にこう言った。

「今、ペナルティが大変なことになっている。もしかすると、八神たちの未来が消えるかもしれない。」

そして、それを聞いた八神たちと哲史たちは、2003年に向かった。

李はほっとした。もしかすると、悪魔によってこれを拒否するかと思っただけだ。しかし、悪魔たちは許可した。

そして、2003年。ペナルティは朝、ある事件を耳にした。それは、謎の巨大生物が大宮上空を飛んでいたというのだ。しかも、画面に映し出されていたのは、デジモンでないか。

そして、ペナルティはなぜか家を飛び出した。

そこに、八神たちと哲史たちがいた。

「何でこんなところに。」

ペナルティは驚いた。

「李さんからこの世界が今、危険な状態だと聞いたんだ。」

ペナルティはさっきのニュースを思い出した。

「そうなんだ。デジモンが大宮に現れたって。」

「なんだと。」

八神たちは驚いた。一番最初に八神たちがデジモンを見たのは、光が丘。そこからわずか20キロぐらいしか離れていないところだ。

どうやら、デジモンは、西部地区が好きらしい。

そして、大宮へ旅立った。

しかし、デジモンはすでに大宮を離れていた。そして、向かったところは、所沢方面だった。

そこらじゅうで子供たちはみかけた。

八神たちは、大宮に着いた。しかし、デジモンはもういなかった。

街頭で流れていたニュースを聞いて、びっくりした。大宮から所沢方面にかけて目撃情報が多数見られたそうだ。

「所沢のほうに行こう。」

そして、八神たちは、所沢方面に向かった。

「第163話 梅園？」

デジモンは所沢市松郷に現れていた。（実際にある地名です。）

そこにデジモンが現れたそうだ。所沢に着いた八神たちを待っていたのは、街を走るパトカーだった。ついには、自衛隊（多分、人間基地からでしょう）までもが出勤している。

「こんなに大騒ぎしているのか。」

これは、光が丘のときもそうだった。

町の人々は、こんなことを言っていた。

「どうやら、松郷の町が消えたらしいわ。」

それはいったいどういう意味なのだろうか。そして、松郷へ行くことにした。

町の人々が、バスで東所沢駅へ出れば、そこから歩いていけるといわれた。

そして、バスで向かった。

東所沢駅前もものすごい状態だった。どうやら、武蔵野線がとまっているらしい。人々のいらいらも頂点に来ていた。

そして、坂から、松郷の町が見えた。そこには一面の焼け野原が広がっていた。

「こんなことに。」

そのときだった。光子朗がいった。

「あそこに、デジモンが。」

そこにはデジモンがそれを飛んでいた。

「あれは、グレイモンじゃないか。」

それは、八神のパートナーデジモン、グレイモンと同じデジモンがいた。

ペナルティはそれを見て、驚いた。背中に傷がある。それは、李の仕組んだゲームの中にいた恐竜と同じだったのだ。

「何でこんなところに。」

ペナルティは啞然とした。

しかしそんなことをいってはいらなかった。

デジモンは東京のほうへ向かっていく。早く追いかねければ、逃げられてしまう。

そして、デジモンたちは進化して、八神たちを乗せながら東京のほうへ向かった。

グレイモンは川を越えたところでもっていた。

「攻撃だ。グレイモン。」

しかし、グレイモンは2体いる。少しおかしかった。しかし、そんなことをいってられない。

そして、デジモンは戦い始めた。

そのころ、マオと梅園先生たちにも李からデジモンが現れたことが知らされた。

そして、マオと梅園先生たちは2003年に向かった。

梅園先生とマオは、ペナルティたちを探しにいった。街頭のニュースでは、所沢に出現し、東京方面に行ったというニュースばかり流れていた。

それに、梅園先生はいやな予感がした。しかし、今は進まなくてはならなかった。

池袋から西武線で多摩のほうへ北上して行った。練馬区を過ぎれば、もうそこは、東京のベットタウン。といった風景があった。

建物の背丈は低くなり、空が見えるようになってきた。しかし、もう夕方、どんどん日が傾いてゆく。そして、ある駅に来たとき、マオはあるものを空に見た。それは、グレイモンだ。

「ここで降りよう。」

その駅は、梅園先生にはとてもつらい駅だった。

しかし、マオはどんどん先へ行った。

そのころ、八神たちもグレイモンを追いかけていた。

そして、ついにマオたちと八神たちは再会を果たした。しかし、そんなことで喜んでいる暇などなかった。

そして、攻撃を始めた。それに、マオの力によって、哲史たちも超変身をとげ、戦った。ここで戦わなければ、もう後がなかった。後ろには、大きな町がある。今までのようにはすまなくなる。

「ここでとどめだ。グレイモン。」

八神は言った。四対一だ。これなら勝てる。

そして、実際、グレイモンは倒された。

八神たちは喜んだ。そこに、李が現れた。ペナルティはあることを聞いた。それはこんなものだった。

「李さん。あなたがこれを仕組んだでしょ。」

それに李は素直に答えた。

「そうだ。マオ、ペナルティ。お前たちが一回たおしたことがある

だろう。そのデジモンだ。」

ペナルティはさらに聞いた。

「なぜ、こんなことを。」

そして、李は言った。

「もうそろそろ気づいたらどうか。悪魔たち。」

それに反応するかのようにとどこからか声がした。

「くそ。なんでこうなるんだ。」

そう。ペナルティたちから悪魔は去っていった。ペナルティたちを操れなくなっていたのだ。

「君たちは、今まで悪魔にひそかにのろわれていたんだ。それより、悪魔たちを。」

そして、悪魔たちも倒した。それから、李はあることを梅園先生に聞いた。

「あなたはここに見覚えがあるでしょう。なぜなら、ここは、あなたが生まれた場所だからです。」

その言葉に梅園先生は動揺した。

## Ⅱ 第165話 記憶の奥底Ⅱ

梅園先生は話し始めた。

「確かに、ここが俺の生まれた町だ。ここに来るときひそかにいやだった。それは、あのときの家出が原因だった。」

俺は、教師なんていう資格を持つてはいけない人間なんだ。しかし、今まで支えてくれた人たちのおかげでここまで成長できた。

ここまではいろいろとあった。

家出の原因は、親との対立だ。マオたちにはわからないだろうが、おれは、成績が悪かった。それで、俺は親に散々注意された。そして、マオとおなじぐらいのころに家を出たんだ。

しかし、現実は厳しかった。友達の家を転々としていった。そのとき、ある友達の親からいい加減やめたらどうかといわれた。しかし、

おれはやめなかった。当然、高校などろくなところには入れなかった。そして、成績はダントツでビリ。大学さえいけないくらいの成績だった。そして、アルバイトを始めた。最初は深夜工事の現場で。そのときの同僚に言われたんだ。

『こんなところで働いて、一生を無駄にするつもりか。俺だって、最初は大学に行き、そして、会社に入った。だが、不況で会社がつぶれてこのじょうたいだ。しかし、お前は会社にも大学にも入らずにここで働いている。お前はチャンスを無駄にしている。』その言葉に俺はじんと来た。そして、俺は、一生懸命勉強をした。アルバイトを転々としながら。

そして、今の自分があるんだ。もしも、そのときに声をかけられていなかったら、今頃、飢え死にしているところだった。」「ペナルティたちはシーンと静まり返った。それに梅園先生は付け加えた。

「お前たちを見ているとなんだか自分が恥ずかしいと思うよ。人のためにこんなつらい仕事をしているのだから。」「しかし、マオは言った。

「いや。先生のほうが偉い。そんな苦痛から脱出するほうが戦うよりもずっとたいへんです。」「

その言葉に梅園先生は心が熱くなった。

## || 第166話 新たな決意と友情 ||

後は、悪魔を倒すこと。そして、自分たちの存在を確認した八神やマオたちは急いで熱斗のところへ向かった。

そのころ、悪魔たちは、急いで準備をした。それは、八神たちを倒すという準備だった。

もう悪魔たちにはこれしか残されていないなかった。また頑丈になった友情と熱意はもう誰にも壊すことは出来なかった。

「熱斗、目を覚ましてくれ。」「

八神たちは熱斗の家で熱斗にこういった。

「いや。目は覚めているけど。」

「そうじゃない。悪魔退治に行くんだ。」

やはり、熱斗の中にも悪魔はいた。

「悪魔つて。あの悪魔かよ。」

最後の最後で苦勞したマオたちだった。しかし、この状況はすぐに一変することになる。

悪魔たちは、最強のデジモンをある男から得ていた。その男は、熱斗たちの前から姿を消していたあのワイリーだったのだ。

「これで光熱斗に敵を討てる。」

これは、両方に共通する点だった。そのデジモンはワイリーの科学力によつて完全体よりも強い電子完全体と言われる強いものになっていた。

そして、デジモンを出勤する日が来た。

「よし、この電子完全体。スパレクトモンで光熱斗を倒すぞ。」

そして、スパレクトモンは秋原町に放たれた。

秋原町は大変なことになった。

「恐竜が現れたぞ。」

町がうるさくなり、さらには熱斗に名人から指令を受けた。

「たぶんデジモンだ。」

八神やマオたちは急いで現場に向かった。そして、その光景を見たとき、熱斗の頭を記憶が横切った。それと同時に悪魔も逃げて行った。

「今まで何をやっていったんだ。」

熱斗葉こんなことを言い始めた。しかし、全部がわからなかったわけではない。なぜ悪魔退治をしてこなかったのかということに対していったのだ。

しかし、そんなことをやっている暇などない。炎山たちも応援にきていた。

「熱斗。あれは、デジモンか。」

それにうなずいた。そして、八神たちのデジモンも進化した。

「戦うぞ。」

いつせいに攻撃をした。しかし、攻撃は効かなかった。逆に熱斗たちが攻撃された。だんだんと力がなくなっていくた。

そこに李と遁、それに源内が現れた。

しかし、そのときにはデジモンたちは、もう遅かった。進化が解かれ、へとへとになっていた。

「第167話 命を懸けたクロスフュージョン」

遁は熱斗たちにあるものを見せてこういった。

「私たちには、この三つの力をうまく組み合わせるといふ先祖代々の教えがあった。これは、あるとき、一人の偉い学者が作って、私の先祖に渡したものだ。どうやら、これには、熱斗たちのクロスフュージョンの力と変身の力を組み合わせることができるようになってるらしい。しかし、これには欠点があった。それは、その偉い学者さんも十分わかっていたらしいが、それを解決することが出来なかつたらしい。」

熱斗はその欠点を聞いた。

「それは、君の体に与える影響があまりにも大きすぎて、最悪の場合、命を落とすかもしれないということだ。まあ、そうでなくとも君に子孫が出来なるなるなっていくことさえ考えられる。」

これは、とても重いことだった。自分の命が消えるかもしれないということだ。遁は熱斗に聞いた。

「君は、この力を使うかね。」

それに熱斗はうなずいた。桜井は叫んだ。

「そんなことをやらないで。」

それは、桜井がある意味幼馴染だったということ。そして、熱斗を愛していたことからでた言葉だった。

しかし、熱斗は言った。

「マオだつて命を懸けてがんばつて俺たちを守ってくれた。今度は俺が行くばんだ。」

そして、そのチップらしきものをPETに挿入した。

そのとき、熱斗とロックマンの姿にみなは驚きを隠せなかった。今までよりも確実に強かった。これは、友情に左右されるものなのだ。しかし、それと同時に熱斗の体に負担をかけているのだ。

熱斗はそれに耐えた。そして、そのスパダレクトモンを倒した。そして、熱斗とロックマンも倒れた。

「大丈夫か。熱斗。」

マオはすごく悲しかった。自分のことを評価してくれたからだ。李はマオに言った。

「よかった。息はある。多分疲れたのだろう。」

そして、熱斗はその日じゅう目を覚まさなかった。

Ⅱ第168話 勝利の後・・・Ⅱ

熱斗は目を覚ました。

「やったぞ。熱斗。」

祐一郎はこう言った。李も言った。

「これで悪魔たちは失意のうちに消えていった。ありがとう。」

そういえば、さっきから八神たちの姿が見当たらない。

「八神たちは。」

「帰った。学校がもうすぐ始まるだろ。」

そういえば、夏休みの宿題まだ少ししか手がついていなかった。

「まずい。宿題やらなきゃ。」

熱斗の体調は回復したようだ。

そして、一日中、宿題というつらいものをこなした。もう8月もあと三日。最後の夏をすごさなければならぬ。

みんなで近くのプールに遊びに行った。プールは猛暑だからであるうか、人で埋め尽くされていた。

そんな風にして二学期が始まった。しかし、二学期にも大変な騒動が起きようとしていた。

二学期といえば重要なイベントがある。それは、文化祭だ。今年も何か江古田は考えているらしい。去年の文化祭は江古田の企画によって大成功したのだ。

しかも、今年もマオはよりによって江古田とおんなじクラス。天とこののはひどいものだ。

江古田はクラスでの打ち合わせのとき、こんな提案をしたのだ。

「今年は、メイド vs .ねこ耳というのはどうでしょうか。」

さすがにこんな提案では集まるのは所詮、秋葉系しかない。

あっさり却下されてしまった。

その代わり、誰かがこんなことを言った。

「何か劇をつくりませんか。一樣、中学はここまでなんだし、中学卒業の思い出として。」

そして、それは女子を中心に支持を受けた。たぶん、ドラマのような話なのだろうか。劇を文化祭でやるということは……。

そして、役割分担をした。そこでこんな意見が出た。

「脚本はマオがやったらきつと面白いものになるじゃないでしょうか。ネットサーバーだし。」

それを言ったのは、及川だった。及川はマオに対していつも絡んでくる。去年だって、江古田と騒ぎ立てた人物だ。しかも、なぜマオがネットサーバーだということを知っているのかわからなかった。実際には、熱斗の付き人という感覚だ。

しかし、みんなはマオを選んだ。そして、それを家で考えることにした。

「第169話 脚本家マオ？」

そして、マオは話を考え始めた。ペナルティの力も借りた。

どんな話が喜ばれるのだろうか。ペナルティは言った。

「どうせなら、青春街道まっしぐらというような話にしたら、たとえは恋とか。マオなら恋ならかけるよ。」  
ペナルティはニヤニヤしながら言った。確かに、あんな大声でメイリイに告白するとはよっほどの度胸がある。これでも一話作れてしまうが、さすがにマオにも恥ずかしい内容だった。  
しかし、恋という言葉に何か引つかかった。これで内容を考えることにした。

マオにも恋に振り回された？経験はある。江古田の考えた去年の文化祭みたいなものから、シロウに色々といわれたあんな件まで…。しかし、なかなかいい案が出ない。そこで次の日、町の図書館である本を借りてきた。

それは、いわゆる恋愛小説というものだった。  
ここから何かいいアイデアがないか必死で探した。

その話は、幼馴染の二人があるとき別れてしまふというよくある内容だった。そして、マオの頭の中にひとつの話が思い出された。それは、熱斗と桜井の関係だった。

マオは思った。桜井は熱斗のことが好きなのではないかと。  
そして、すぐに熱斗に聞きに行った。

熱斗はマオが文化祭で劇の脚本を任されたのは知っていたが、なんと桜井との話を今聞きたがるのかが不思議だったらしい。

「ロックマンと出会ったのは、小学校5年生のときだった。まあ。それまでは、ネットナビなんて持っていなかったし、あまり強くなかったからだよ。」

その一言でマオの頭の中を文章の波が押し寄せてきた。  
そして、それを文章化するべく、徹夜で書き上げた。

「これ。」  
それをクラスの文化祭担当の奴に渡した。そして、OKが出た。すぐさま、放課後練習が始まった。さて、劇はうまく成功するのだろうか。カードは二つ…。続く…。（なんかのカードゲームになってきたぞ？。これも続く？。）

Ⅱ 第170話 秋だ。文化祭だ。涙の感動物語だ？Ⅱ

そして、文化祭当日になった。

体育館は熱気に満ちながらも開演を待っている。

「それではお待ちかね。舞台の始まりです。」

そして、幕が上がった。

「あなたは、恋というものを知っていますか。これは、その恋というもので結ばれたお話です。」

ある町に一人の少年が住んでいました。その子はいつもいじめられていました。名前は光。しかし、光を守ってくれる女の子がいました。女の子は名前を奈那子といいました。次第に二人は仲がよくなって行きました。しかし、あるときでした。その町に貿易商の人が来ました。その貿易商は光のお父さんの古くからの知り合いでした。光のお父さんは光にもっといい勉強をさせるために、海に向こう側の大きな港町に行くことになりました。

しかし、まだ奈那子は何も知りませんでした。それは突然のことだったからです。

光は急いで奈那子のところへ行こうとしましたが、時間が迫っていたのでいくことが出来ませんでした。

そして、夕方の船で旅立つことになりました。

光は思いました。

「ああ。一度でもいいから奈那子に会いたい。」と

船着場に着いたとき、光は啞然としました。なぜならそこに奈那子がいたからです。

奈那子は言いました。

「また。遊べるといいね。」

それだけでした。しかし、そのこと以外にも奈那子には言いたいことがありました。

しかし、それは、なぜか口に出てこなかったのです。たとえば、寂

しいとか好きだとかという言葉が…。

ついに船が発車しようとなりました。

光には、奈那子がかんな心情だったとは思ってもいませんでした。しかし、奈那子ちゃんと別れるのにとてもさびしく思えました。

そして、ついに船は動き始めました。

そのときでした。人ごみを走つてくる少女がいるではないですか。

そう。それは、奈那子ちゃんでした。

やっと奈那子ちゃんは自分の心情を話せるようになったのです。

そして、奈那子ちゃんはいろいろと言ってきました。

それは、今までのような内容ではありません。

しかし、やはり話せないような内容はありました。そして、船が行ったあと奈那子ちゃんは泣き始めました。ずっと光といたかったのです。しかし、その心は伝えられませんでした。…

この文章は <http://faitate.tuji.web.fc2.com/sabufail/010> で公開されたものです。

ペナルティ2・8（第171話〜第180話）

「第171話 文化祭成功？」

「…でも、心の中に詰まっていると息苦しいのです。そして、光のお父さんに会って、こういいました。

「私の中で今、光君のことが詰まっていて、何も出来ないんです。あの時は恥ずかしかった。でも、手紙なら話せるのです。どうか。光君に手紙を渡してくれないでしょうか。」

それに光君の父は言った。

「そうか。君は光に恋しているのか。」

その言葉に奈那子は赤らめた。

そして、手紙は海の向こうの町に届けられた。それを讀んだ光は一晩中泣いていたという。

そして、1年たったころ、光は戻ってきた。そして、港には、奈那子がいた。その後、どうなったかは知らない。ただ、よい関係になったそうだ。（あらずじであり、実際とは異なります。）

お客さんは、なかなかうまい脚本に最後拍手が途絶えなかった。

「今年も成功だったな。」

江古田がいった。

マオもうれしかった。もう脚本はやりたくないと思ったが、人がこんなに喜んでくれることがうれしかった。

そのころ、他の所でもペナルティや熱斗はうれしかった。なぜなら人にもものを見てもらえるからだ。

そんな熱斗やペナルティの様子を見ていた一人の男がいた。

男は文化祭を見終わったあと、こんなことを言った。

「少年たち、今青春を燃やせ。そして、俺に殺される。」

不気味なことを言いながらその男はとこかへ行ってしまった。

そんなことも知らずに、文化祭は成功で終わった。

家に帰ると、みんな疲れているようで、すぐに寝てしまった。そのころ、男は、どこかへ電報を打っていた。その電報にはこんなことが書かれていた。

「悪魔たちを復活させるために再度時空を併合し、そして、一揆に例001の少年たちを倒す。その計画を明日始める。」  
一体、男の目的は何なのであろうか。

＝ 第172話 悪魔集団再び ＝

次の日、朝だった。それは、科学省で見つかった現象だった。

「また時空とネット空間が融合している。このままでは、またあのようなことが起こる。」

祐一郎に緊張が走った。

そして、すぐにネットサーバーを出勤させた。

熱斗にも来た。

「また時空と併合しそうになっている。」

マオたちは驚いた。そのときだった。家を出ようとしたとき、玄関に一人の男が立っているではないか。

「何者だ。」

熱斗は言った。

「決して怪しいものではありません。私は、あなた方のやりたかった時空を元に戻すということをやりました。そして、マオくんや君がひそかに思っていたこと、つまり、時空をくつつけるといいう作業を実行しただけです。」

「なんだと。」

熱斗は怒った。確かに、八神たちが元の世界に戻ったときはまた、会いたいと思っていた。しかし、こんなことまでして会いたいとは思っていないかった。

「まあまあ、そんな怒らずに。また再会できるようにしておきましたから。」

「そういう問題じゃない。」  
熱斗が言った。

このやり取りをしている間も時空とネット空間の併合、そして、地球の姿を変え始めたのだった。

「じゃあ、またどこかで。」

男は立ち去った。

その頃、お台場にいた八神たちにも何かが起こっていることぐらいわかった。

お台場は、光を探しにデジモンたちが結界を張ったときと同じように濃い霧が出ていた。

「一体、どうしたというんだ。」

最初はただの雲かと思っていた。しかし、やはり様子がおかしかった。

そのころ、熱斗たちはどうしようもなく、ただ見ているだけしか出来なかった。

そして、ついにまた時空が合併した。

お台場にいた八神たちは驚いた。いつもなら大手町などの会社のビルがある辺りにさらに高い建物が建っていた。あれは間違いなく秋原町だった。

### Ⅱ 第173話 獄再会Ⅱ

八神たちは公園に集合した。

「あの高い建物があるところは紛れもなく秋原町だ。」

八神は高いビルのある方向を指した。

そして、言った。

「熱斗たちに何かあったのかもしれない。」

八神たちは、秋原町の方へ急いで走った。

熱斗たちは悔しかった。

「何であいつがあんなことをするんだ。」

自分を責めるように言った。

しかし、男の目的は熱斗たちのためではなく、悪魔たちによって熱斗たちを殺すことが目的だった。

そして、あるところで男は集会を開いた。

「皆さんもお分かりのように、時空を併合し、そして、あの作戦を決行することになったわけです。この中には力強いものもたくさんおられます。ぜひ、倒して、私たちの楽しい生活を作りましょう。」

男は、こう言って終わった。悪魔の中にはもうすでに体を手に入れたものもいた。

そして、男は伝説の術を使うことにしていた。

それは、悪魔の中に伝わっている術があった。それを使おうとしたのだ。

しかし、そんなことを知らなかった熱斗たち。しかし、時は刻々と過ぎていった。

そのころ、お台場は混乱していた。

そんな時についてに現れた。伝説の技を使い、一回倒したはずのスパデレクトモンはさらに強力になっていた。さすがにこのデジモンは熱斗たちには倒せなかった。この前は、ぎりぎり倒せたが…。

どうしようもできなくなっていた。ただ見ているだけしかいられなかった。何か解決方法はないのだろうか。

「よっしゃ。これで光熱斗たちを倒せる。」  
悪魔たちは喜んだ。

## 「第174話 悪魔を操る少年」

その頃、男は、倉庫街で人形になっていた。一体どうしたのであるうか。

そこには一人の少年が立っていた。少年はつぶやいた。

「悪魔の手伝いをしたが、これでは負けてしまう。一番いいのは、僕の魔法である子達の過去に戻らせることが一番効果的だ。どうや

ら、いろいろな経験をつんできらみたいだからね。」  
少年は黒いマントを被ると姿を消した。

悪魔たちに太刀打ちできない熱斗たちのところに、李がまた現れた。  
「最近は何戦続きだな。しかし、それを解決させる方法なんかはあるのだ。それがこれだ。」

そこにはカードがあった。それぞれにデジモンが書かれていた。

「いったいこれは。」

熱斗が聞いた。それに李が答える。

「これは、デジモンカードとか言うものだ。」

李はあやふやな回答をした。

「このカードがなにか役に立つのですか。」

李は答えた。

「これにはデジモンのデータが入っているらしい。そして、これがソフトだ。」

李は手から一枚のチップを取り出した。

「これは、源内さんから届いたもので、チップの中にプログラムが入っているようだ。」

そして、そのチップをPETに挿入した。

「これで準備万端だ。あとは、このカードリーダーをPETと八神たちの持っているデジバイスに取り付ければすぐに効果が現れる。

これを祐一郎につけてもらおう。」

そして、それをPETにつけた。しかし、李にもどんな効果が現れるかわからなかった。

それは、カードを通してはじめてわかった。

まず、アグモンのカードを通した。そうすると、アグモンがロックマンと合体しているではないか。

熱斗はびっくりした。

「どうだ。」

源内が現れた。

「このまま、クロスフュージョンしても、アグモンの力とロックマ

ンの力の双方が使える。」  
そして、スパデレクトモンと戦い始めた。少年が言ったようにスパデレクトモンはすぐに倒されてしまった。悪魔たちは笑顔を失った。「やっぱり、こうなったか。」  
空から声が聞こえてきた。それは少年の声だった。

|| 第175話 最終変身! ||

そして、少年は現れた。

「お前は一体何者だ。」

それに少年は答えた。

「そんなこちらの聞き方を僕にするとはさぞかしとても身分が高いのだろうな。ふつう、僕のことを淳様と呼ぶのにね。」

少年にいらいらしてきた。しかし、そんなことお構いなしに続けていった。

「お前らの力を十分に見せてもらった。しかし、僕の力などにかなうわけがない。」

少年はさらに挑発的なことを言ったので熱斗は怒りがたまっていた。「そんなに僕がにくいのならやつつけてしまえばいいじゃない。」

そして、熱斗の堪忍袋の緒が切れた。

「そうそう。そうやって。」

少年の動きにマオはやな気がした。

「ジュプダースタブライザー!」

何か呪文を唱え始めた。そして、しだいに周りは赤紫色に変色した。「さて、ここまでは順調だ。これなら高い報酬がワイリーからもらえるな。」

「ワイリーだつて。」

熱斗が言った。それに淳は言った。

「あつ。口が滑ってしまったな。でもいい。もうここから逃げだすことなどできないのだから。」

そして、哲史たちは変身した。ここでは変身しかできなかった。

「ほう。僕にはむかおうというのか。それならその力を取ってしまえばいいのだな。」

少年は一体の巨人を送り込んだ。巨人は強そうだった。しかし、戦うしかなかった。

そして、巨人と戦い始めた。しかし、巨人のほうが強く、哲史たちは飛ばされてしまう。

哲史たちの変身は解かれた。

「あの巨人は強い。」

そして、淳は言った。

「こんなに弱いのか。僕をがっかりさせないでくれ。」

そして、淳は変身の力を取る呪文を唱えた。変身の力は一つの玉になった。

その時、マオの体が光った。一体これから何が起こるのであるうか。

Ⅱ 第176話 新たなる力Ⅱ

「これは、」

淳は思わず驚いた。淳も七つの力と変身の力が巨人になっていくところは初めてだった。

淳はにわかに恐怖心に刈られた。その力は、淳の想像をはるかに超えた力があると思っただからだ。このままでは、巨人が負けてしまう。がんばれば阪神？。淳は何かに気をおかしくされたようになった。それと同時に巨人は倒されていった。

「こんなの想定外中の想定外だ。」

淳は気がおかしくなったように言った。

「くそ。お前らなど過去に戻ってしまえ。」

その少年の目は恐怖に襲われ、呪文を唱える声はとてつもなく怖かった。

そして、みんなばらばらになった。

マオとメイリイたちは、あるところにいた。

「…もしもお前が、俺に負けたら右の毒を含んでもらう…。」  
マオは思い出した。

これは…。

しかし、その光景は消えていった。その代わり、そのときの仮面料理人が火の海に飛び込んだ光景が目の前に現れた。

そのころ、熱斗や八神たちも同じ状態だった。

そしてついに、太刀川の感情が爆発した。太刀川は、戦うことに疑問も持っていた。デジタルワールドで戦ったときもそうだった。

そして、そこにあるおじいさんが現れた。

そのおじいさんが言った。

「戦わせているのは、実は自分たちなのです。自分たちから戦いをやめ、そして、仲間たちにも戦いをやめさせるのだ。」

男は太刀川に言った。

「そんなのにだまされるな。」

八神が言った。しかし、太刀川が反論した。

「私だって悪魔から解放されたいと思っている。しかし、いつになったらこんな生活をやめられるの。いつになったらこんなくらしい思いから解放されるの。」

太刀川の言っていることに反論した。

「これが使命なんだよ。多分これからも。しかし、自分たちの生活を失いたくない。」

八神は言った。

淳はこの光景に嫌気が指してきた。そして、ある作戦に出ようとしていた。

「第177話 熱斗はお坊さん？」

そのことを真摯に危険だと受け止めたあるおじさんは八神たちのほかの熱斗やマオたちを探していた。一体、二人のおじいさんは何者

なのであるうか。

そして、ついに熱斗を探し当てた。

「そのこのへなちよこさん。」

いきなりおじいさんに言われ、熱斗は怒った。

「なんですか。おじいさん。」

おじさんはそれを察知したのかしていないのか続けてこんなことを言った。

「あなたは救われたへなちよこさんだ。今、淳が大変なことを仕掛けようとしている。」

「おじいさんは淳を知っているのですか。」

「ああ。淳の正体もな。」

“ 淳の正体？”

熱斗はその言葉に引っかかった。

「一体、淳の正体とはなんですか。」

「まあまあ落ち着け。それはこれから言うことに耐えられたらの話じゃ。」

おじいさんは続けて言った。

「お前さんには修行をしてもらおう。それは、後で役に立つことじゃ。わしが教えるからついて来い。」

その言い方に熱斗はいらいらしているらしい。しかし、最近の若い人は困ったものである。丁寧な謝っているのに、っち。とか言うのである。それに比べればまじだが、老人の言うことに耳を傾けなければならぬ。今、核家族化が進行し、年寄り二人が助け合っているなんて言う家庭がある。そういう家族こそ、危険にはらんでいる。ポケが進行し、さらには病気で二人同時に倒れているなどということが現実に起きている。

そんなことをいって言っている間に熱斗はおじいさんのお寺についてみたいだ。

熱斗は早速、あることをやらされた。その内容など皆さんはだいたいの予想がつくだろうが、言うておくと、お経の暗記・床掃除・座禅

といった感じである。甲子園でも有名な都内の某私立中学では、週に一時間、座禅を組むそうである。熱斗はそれに一日耐えた。

〓 第178話 おじいさんの真実 〓

2日目。熱斗はおじいさんに話を話し始めた。

「実は、お前さんたちには地球を救うための任務をさせることがある審議会によって決まっていたのじゃ。まあ、その審議会がどこにあるのかもさっぱりわからないが、ただいえることは、地球が危機に瀕していることだ。それは、この世界でも、そして、お前さんが行ったNO・2界もだ。」

「NO・2界？」

熱斗は首をかしげた。

「現界ではそんなふうには言われていないのか。」  
おじいさんは言った。

「それは、どういうことですか。現界やら通快とは（どうやら熱斗は2界のことをほかの言葉だと勘違いしているらしい。）（」

「それは、それぞれの世界のことだ。地球には宇宙人やら関西弁を話せる動物がいると思っっているやつがいるらしいがそれはほんまや。」

「  
おじいさんは急に関西弁になった。そして話が続いた。」

「それでやな、おまえさんがいる場所ちゅうのが現界というものや。しかし、現界だけじゃなくてな。ほかに1界やら2界やらというものが順々にあるねん。」

熱斗も調子にのって関西弁で話した。

「ちゅうことは、もしかして、ビヨンダードは2界ちゅうわけやな。おっさん。」

「そうなんか。現界ではそういつた呼び方してたんか。」  
関西ワールドはとどまることを知らない。

「でな、今、どこもかしこも大変なんや。」

「それはどういうことじゃ。」

「なにかに襲われているんやいろんな界がやな。」

「おおきに。」

「こら。またんか。というか。あんたたちがー解決しなきゃいけないシー。」

いきなりおじさんの口調が変わり今度はコギヤルちようなつた。

「そんなのわかってるシー」

熱斗までもがコギヤルちようになつていた。一体修行で何をやって  
いたのだから。

「わかりました。導師さま。」

熱斗がこんなことを言ったときにはもうめっちゃ調子乗っている  
しかおもえなかった。(だいたいこのせりふ、巨くんがいうものだ  
しー。)

そして、熱斗はマオたちや八神たちを探し始めたのだ。

|| 第179話 貿易の町カシズつてどこからパクってきたんだ?こ  
んな題名、まちがってる?(ここまで題名 全35字) ||

熱斗はさっきの続きの話し方でロックマンと話していた。ロックマ  
ンも楽しそうにしている。しかし、いくら筆者が今流行の映画の1  
シーンを熱斗言わせたかったからって、そんな勝手なことをしては  
いけない。だいたい、ネタがないからって、こんなお笑い基調にな  
つていつたらいつか笑点の前半15分で放映されるぞこの馬鹿ヤロ  
ー(某者より投稿)

そんな筆者が熱斗をいじくりまわしているころ、マオたちは確実に  
抜け出すことが出来ていた。

マオは言った。

「こんな引つ掛けに引つかかっている時間なんてない。それよりも  
熱斗や八神たちを探さなければ。」

マオは真剣に言った。熱斗とはぜんぜん違っている。さすが。

熱斗は思った。

「何でこの世界には建物がないんだろう。」

急になにかいやな予感がした。だまされているような気がした。何にだまされているかはわからないが…。

しかし、熱斗とマオの間は確実に近づいていた。それをのんびり見ている淳。淳にはもうこんなことも痛くも痒くもなかった。それは、八神たちを完全にのろうことが出来るようになったからだ。

八神たちは淳の用意した部屋に閉じ込められていた。

しかしそんなことは誰も知っていなかった。知っていたのは淳とあのおぢやらけおじさんぐらいだ。

そして、ついに熱斗とマオたちは再会した。それを草陰からあのおぢやらけおじさんが見ていた。

「熱斗。」

マオは喜んだ。しかし、そんなことをしている場合ではない。はやく八神たちをさがして、淳を倒さなければ。そのとき、あのおぢさんが出てきた。

「おっちゃん。」

熱斗が言った。しかし、おっちゃんは不思議なことを言い始めた。

「八神たちを探す必要はない。」

その言葉にマオたちは驚いた。

「一体どういうことですか。そして、あなたは何者ですか。」

マオの問いにおっちゃんは答えた。

「私はこの世界に住むリーダーと言うものだ。この世界も昔はほかの界と同じように平和だった。しかし、それは、時空、そして、ほかの界へつながる道を作ったことによって変わってしまった。…」

「第180話 淳の正体」

「…それは、他界から凶悪なものたちが流れてきてしまったことによつてだ。淳はそのうちの一人だ。」

おじいさんは言った。それに熱斗はきいた。

「淳に秘密があるといっていました。淳の秘密とはなんですか。」

おじいさんは答えた。

「それは淳が本当は女であることだ。今では淳だけしか魔術は使えないのじゃ。そのほかのものは、みな子供が授けられずに死んでいった。」

熱斗たちはびっくりした。しかし、なぜ子供が授からなかったのか。なんていうことがいっぱい出てきた。この界を知らないから出てくるのである。それをおじいさんは察知していた。

「それよりも、この世から出なければならぬ。それにはあるプールの排水口から逃げるとよい。排水口は一個だ。しかし、その排水溝は気まぐれに他界につながっている。お前さんたちが帰れることを願っているだけじゃ。あと、そこには当然、淳の手下となったものがいる。それは、お前さんが闘いたくない物が待ち受けているじやろ。せいぜい気をつけるのじゃ。」

おじいさんはどこかへ行ってしまった。

「おじいさんが言っていた戦いたくない相手とはだれだ。」

熱斗は首をかしげた。そのとき、熱斗のPETにあるものが送られてきた。

「これは、」

それは地図だった。そこには今いる地域が点で示され、さらにプールの位置が記されていた。

「よし、行こう。どこにたどり着こうか解決しなければならぬ」とはある。」

熱斗が言った。しかし、それは、“もしかすると”というような思いがあったからであった。

そして、マオと熱斗たちはプールを目指して旅立った。

そのころ、ペナルティと梅園先生はプールの前にいた。なぜだか知らない。しかし、それには深いわけがあった。哲史と山地は元の世

界に戻っていた。しかし、何事もなかったような感じだった。

この文章は <http://faitate.tuji.web.fc2.com/sabufail/010> で公開されたものです。

ペナルティ2・9 (第181話〜第190話) (前書き)

だんだんとネタがなくなってきた、こちらへん、少し暴走して  
います。すみません。

ペナルティ2 - 9 (第181話〜第190話)

|| 第181話 新 力の継承者 ||

ペナルティと梅園先生がなぜここにいたか自分たちはまだ気づかなかった。その原因は新たな力“芯力”の影響だということ。

芯力というのは7つのしるしと変身のしるしが合体して出来たものだ。無色透明の物体だ。言ってみれば幽霊みたいなものだ。

しかしこの世の中のひとは知らない。

そして、マオたちが来た。

「本当にここに来て正解だった。仲間に出会った。しかし、まだ足りない。八神たちを見かけなかったか。」

まおたちは何かいやな予感がずつとついていた。しかし、ペナルティたちにはわからなかった。

そして、おじいさんから聞いた話をした。

「そうか。じゃあこのプールの排水溝から逃げればいいわけか。ゲームで言うならば次のステップに行くということとおないだな。」

梅園先生の頭の中にはこれしかないらしい。プールには水がたっぶり入っていた。そしてだんだん暑くなってきた。なにかわざとこんなふうになっているようにみえた。

「俺たちはここだ。」

いきなりのことに熱斗たちはびっくりした。

プールの観客席には魔法戦隊マジレンジャー。ではなく八神たちがいた。

「よかった。」

熱斗が安堵についたとき、いきなり攻撃し始めた。

「何で攻撃するんだ。」

熱斗が言った。しかし、マオが言った。

「八神たちは操られている。淳に。」

「そうさ。」

反対側に淳が立っていた。しかし、女になっていた。

「あなたたちは互いに戦いあい。そして、死滅していく運命なの。」  
淳の言葉にマオは言った。

「いや。そんなことはできない。なんとしても八神たちを取り返してやる。」

「あら。よくまあそんなことがいえるわね。しかし、魔術をそんな甘く見ないでちょうだい。」

そして、さらに攻撃してきた。マオは熱斗に言った。

「使えるかわからないけど、ロックマンとクロスフュージョンしてアグモンたちとたたかっ。しかし、八神たちには当てないよいうに。」

「そんなことわかっているよ。」

熱斗がいった。その気持ちはおんなじだったのだ。

そして、熱斗はうまくクロスフュージョンした。

「第182話 厚い友情」

熱斗はともかくアグモンなどのデジモンを攻撃した。しかし、これでは水の掛け合いだった。

さらに自体を急変するようなことが起きた。

デジモンが進化し始めたのだった。

熱斗も負けられなかった。そして、獣化チップを入れた。しかし、どちらも平行線の状態。体力は両方とも尽きていた。

そして、進化はとかれた。チャンスだと思った熱斗もロックマンとのクロスフュージョンをとかれてしまった。

「面白くないわね。この根性なし。私は根性なしって嫌いだよ。」  
淳が言った。

そして、八神と殴りあいになった。これしかなかったのだ。操られた八神にはこれしか方法がなかった。

しかし、そんなことでは解決しなかった。

そんな泥沼状態のときだった。プールが光った。

「なんだ。」

プールサイドにいる全員は驚いた。

それは、八神の妹、光だった。

「何でこんなところに。」

八神は一瞬目を疑った。しかし、光はこういった。

「あなたたちはこんなことをやっている場合ではないのです。」

その一言を言い終わると消えた。

光が消えたあと、八神たちにかかっていた魔法が解けた。

「いままで何をやっていたんだ。」

八神たちはとぼけていた。

「いやいいんだ。」

マオは言った。

「じゃあ、淳をやっつけよう。」

八神は言った。しかし、淳は言った。

「私の負けだ。行くがよい。」

それが最後の魔法となった。プールから水がなくなっていくた。そのときだった。

「お前さんには失望した。」

その声はワイリーだった。そして、ワイリーはその場であることをした。その光景にプールサイドにいた全員はびっくりした。なんとワイリーが殺害したのだ。

「何をやっているんだ。」

マオが言った。それにワイリーは不気味な言葉を放った。

「ん。君たちの力を拝見してもらった。その代償だ。」

「そんなのが許されるものか。」

プールの危ない空気が包んだ。

＝ 第183話 悲しみとともに ＝

今までワイリーはそんなことはしなかった。しかし、今回こんなことになってしまった。

その原因は悪魔が乗り移っていたからだだった。しかし、こんな行為が許されては困る。マオたちは、ともかく先を急いだ。

排水溝に入っただけだった。何とか通り抜けられる大きさだった。普通のプールの5倍はあるだろう。

そして、そこからいきなり吸い込まれた。

「ここはどこだ？」

一面の砂地。ここはねじ狼のいる砂漠。ではなく、そう。ここはビヨンドだったのだ。

「ビヨンド？」

熱斗からこのことを聞いたマオや八神たちは不思議がった。

そして、熱斗がビヨンドでの思い出を語り始めた。

「一時期、ビヨンドから、ネットナビやウイルスが流れてきたことがあったんだ。それは、この世界にいるワイリーが犯したことだったんだ。そして、おれたちはあるナビによってここにつれてこさせられたんだ。そして、この世界を元に戻すためにいろんな人に出会った。いろんなナビに出会ったんだ。」

「トリルもその一人？」

マオが聞いた。それに熱斗はうなずいた。

そのときだった。なにか砂漠の向こう側から何かが来た。

「まさかねじ狼？」

シロウが言った。しかし、さすがにもうだれも反応しない。

「秩父が飯能する小手指？」

ついには訳のわからないことを言い始めた。

そんなシロウを放って置いて。その正体、それは、デジモンだった。しかもどこかで見ただけのある感じのデジモンだった。

それは、又メモンだった。しかし、なぜ又メモンがこんなところにいるのだろうか？砂漠から照り返される暑い太陽光にすぐにはばた

しまつはずである。  
それには深いわけがあった。

「第184話 ビヨンスタードにデジモン？」

太刀川が又メモンになぜここにいるのか聞いた。  
又メモンは言った。

「その後、デジモンワールドである広告がまかれたんだ。その広告に応募したらこんな状態になっちまった。」

「一体誰なんだ。」

又メモンは八神の問いにこう答えた。

「それは、今、この世界のどこかの町で暴れているらんだ。俺たちは物を運ぶためのここを通っていたんだ。」

八神たちは又メモンについていくことにした。

「しかし、暑いな。まるでマオと……。」  
シロウはそこまで言ったが、メイリィにぐりぐりとやられてしまった。

「マオまでしか言っていないのにな。姉御。」  
さらにぐりぐりが強くなることになってしまったシロウ。  
砂漠を過ぎると町というよりもテント村といったほうがいい町が現れた。

「荷物を持ってきたぞ。」

又メモンが言った。そして出てきたデジモンに八神たちは驚いた。

「ユキダルモン。」

そこにいたのは汗をいっばいかいたユキダルモンだった。

そして、ユキダルモンにデジモンの事を聞いた。

「ああ。確かに、ここにそのデジモンがきたことはあるよ。」

「ほんとか。」

八神たちはあせった。しかし、それ以上の話は聞けなかった。

「どうするか。」

夜、ひとつのテントで話し合った。

「一体これからどうするればいいんだ。」

今日一日何も進まなかった。そんな感じがした。

そして、その夜は過ぎていった。

次の日、ともかく、大きなテントがある町を聞いた。そこなら誰かわかるデジモンがいると思ったからだ。

「砂漠を北にいったところにくら辺を管理している大きなテントがある。そこへは途中から列車が出ているからわかるだろう。」  
ユキダルモンたちと別れ、次のテントへ向かった。

〓 第185話 かつての町 〓

日本では、駅前に活気をも取り戻すための法律が出来た。今、駅前がシャーター通りになっている駅が多い。

そんな町がビヨンドにもあった。

それは、鉄国男がいた町だった。しかし、熱斗は思った。それは、前より列車の本数が少ない。そんなことだった。(だって、JR東日本の只見線「新潟県小出」福島県会津若松」の間の列車本数は1日途中どまりの列車を含めて片道5本である。)

しかし、町は寂れてしまっていた。

「一体どうしてこんなことに…」

なんとなく熱斗には悲しかった。

そんな時、後ろからSLの音が…

<注意> ここからは鉄ちゃんの話になるかもしれませんがご注意ください。

熱斗は後ろを見た。しかし、そこにいたのは、鉄国男のSLではなかった。八神たちも今までに見たことがないデジモンだった。

光子朗がそのデジモン調べた。

「このデジモンはロコモンです。」

それはSLの形をしたデジモンだった。

「お前たちは何の用があつてこの町に来た。」  
それに八神はこう答えた。

「今、この世界に危機が迫っているというのを聞いてこの町に来た。」  
「  
ロコモンは言った。

「そうか。それがわしらだというのか。そういうやつは牢屋に収容しなければならぬ。しかし、おれは、今作業中だ。しかもこんな谷間じゃ、戦うことさえ出来ない。だから、知識で戦うとしよう。」  
八神が言った。

「知識の戦いとは？」

ロコモンは言った。

「それは、鉄道の問題だ。」

そして続けて言った。

「早速問題に入るとしよう。問題は全部で30問だ。もしも、20問以上あつていたらこの場がなかったことにしてある。しかし、それ以下だったら、俺たちの帝王に差し出す。いいな。」

そして、八神はうなずいた。  
「じゃあ一問目だ。……」

そして、ロコモンとの知識の戦いが今始まった。

＝ 第186話 知識の戦い（鉄道問題） ＝

ロコモンが言った

「…問1 日本には新宿線が二つある？」

それにペナルテイが答える。

「確か、都営新宿線と西武新宿線があるから。」

ロコモンは悔しがった。

「じゃあ問2、日本で一番長い普通列車は高崎・宇都宮・山手・東海道・横須賀線の列車？」

さすがにこれは、少し難しかった。日本で一番長い普通列車なんて

聞いたことがない。

そして、次々と下のような問題がされていった。

- 問1 東京メトロ線は埼玉県にはない？ ? バツ？
- 問2 東京の地下には秘密のトンネルがあり、車両が通る？
- 問3 武蔵野線は上りが府中本町方面で下りが南越谷方面？
- 問4 標準軌道とは何ミリのこと？
- 問5 有楽町線の最新型車両（10000系）の一両あたりの値段は約1億2000万円？
- 問6 マンションに突っ込み、100人以上の死者を出したのは、阪急宝塚線？
- 問7 20メートル車の長さは実際には19500ミリ？
- 問8 東北新幹線の最北端は盛岡？
- 問9 列車につけられている車号の最初につけられているモハとは、モーター車のこと？
- 問10 ポケモンスタンプラリーの実施駅の総数は300駅？（ついでにポケモンは300種 以上います。）
- 問11 水素で走る電車があるってほんと？
- 問12 電車のパンタグラフで最近取り付けられる台数が多くなつたパンタグラフの名前は？
- 問13 京成線上野〜日暮里間には昔、駅があった？
- 問14 東京都内で、信号機が踏切の代わりにしている踏切があるってほんと？
- 問15 信号機で路面電車専用の右折専用がついている信号がある。ほんと？
- 問16 普通と特別急行、快速特別急行しか走っていない路線がある？
- 問17 三鷹電車区で起きた事件は三鷹車庫事件？
- 問18 複々線事業全体には補助金が出る？
- 問19 日本で一番低い初乗りはいくら？
- 問20 パンタグラフってどういう意味？

- 問21 お台場に通っている路線は？
- 問22 発車メロディのなかで関東一長いのは何分？
- 問23 都営大江戸線は答申では12号線となっていた？
- 問24 最近の電車の重さは平均20トン台である？
- 問25 切符の後ろが黒いのは磁気が塗られているからである。
- 問26 電車の連結器にはいろいろ種類がある？
- 問27 液晶パネルが最初に張られたのは山手線？
- 問28 駅が川になったところがある？
- 模範解答と熱斗たちの解答は次の回でそれでは。

|| 第187話 (第186話の解答) ||

なにか、小説ではなく、ただのクイズの本となつているところですが、解答、そして、ペナルティたちの解答を書かなければならないという大変なことになっている。この先どうなってしまふのだろうか？

早速解答へいききたいと思う

問1 解答省略

問2 バツ 山手線は11両編成、そのほかは15両編成で、日本の普通列車の中では最大。

問3 有楽町線の成増〜和光市間で埼玉県に入る。

問4 有楽町線と千代田線、有楽町線と南北線、大江戸線と浅草線にそれぞれある。このうち二つは臨時で旅客列車が走る。

問5 バツ 実は、武蔵野線は、京葉線の東京を基点に上下を決めているため、逆転している。なお、東京を通過する京浜東北・山手線には上下線と言うのは存在しない。

問6 (答) 1064mm (日本標準規格と呼ばれている。世界では1435mmが標準。)

問7

問8 バツ JR福知山線、脱線原因は具体的にはわかっていない

が、遠心力によるものだとおもわれる。

問9 一部車両を除く。利便上、20m車といわれている。

問10 バツ 平成18年現在、八戸までであるが、今後、新青森まで延びる。

問11 モーターがついている車両のことをモ八車、モーターがない車両のことをサ八車と呼ぶ。

問12 バツ 平成18年度では99駅で実施。理由はこれ以上、広げられないからであると思われる

問13 実験として走らせている。将来的には運行されるかもしれない。

問14 (答) シングルアームパンタグラフ という。雪がつきにくい。そのため、どんどん交換されている。

問15 少なくとも2駅あったがどちらも昭和に廃止になった。

問16 東急世田谷線と環状7号線の若林踏切は、交通信号で制御されている

問17 広島などである。信号は色に注意& amp; #8252;

問18 京浜急行 京急蒲田より先はそれしかない。

問19 バツ 三鷹事件と呼ばれる。戦時中の事故、列車が暴走し、死者が出た。

問20 バツ 出るのは高架化した部分のみ

問21 かつて1円という鉄道があったものの、いまでは一番安いのは120円ではないかと思われる。

問22 四角と言う意味。

問23 臨海線。今回は鉄道のことなのでユリカモメは含めない。

問24 約1分。東武鉄道の発車メロディが長いと思われる。

問25 実際、一時12号線と読んでいた。

問26 福知山線の事故はこれもひとつ原因だったのでといわれている。

問27 地方の切符は裏側が白または茶色

問28 そのため、アダプターがあるほどである。

問29 バツ 東武鉄道が最初だと思われる。  
問30 武蔵野線新小平駅は、地下水によって水浸しになった。

＝第188話 (熱斗たちの解答)＝

まだまだ続きます。しかし、これは時間稼ぎではないかと思われる  
かもしれませんが、書いてるほうはとて大変なのです。

熱斗たちの解答は以下ようになった。

問1 省略 問2 (空白) 問3 問4 バツ 問5 バツ  
問6 (空白) 問7 (空白) 問8 (空白) 問9  
問10 バツ 問11 バツ 問12 問13 問14  
(空白) 問15 問16 問17 (空白) 問18  
問19 (空白) 問20 (空白) 問21 130円 問  
22 (空白) 問23 臨海線 問24 (空白) 問25  
問26 (空白) 問27 問28 バツ 問29 問  
30 バツ

という結果になっている。つまり、ロコモンが言った点数には遠く  
及ばなかったのである。

そして、ロコモンは言った。

「遠く及ばなかったな。もう反抗したって無駄だ。どうせこの谷が  
くずれるだけだぜ。」

そして、ロコモンは部下を呼んできた。

「おい、そこらの子供を牢屋に突っ込んで。」

そして、熱斗たちは牢屋に放り込まれた。

「これからどうするか。」

「そんなこと、考える必要ないだろ。お前たちはどうせさげられ  
るのだからな。」

牢屋の看守が言った。

「なんなら、教えてあげようか。お前たちが今後どうなるか。」  
しかし、牢屋の中の人たちは口を利かない。(それはそうだろうな。

看守は夕方になって変わった。しかも、なんと又メモンたちだったのだ。

「又メモン。ここからだしてくれ。」

八神たちが言った。そして、いい返事が返ってきた。

そして、牢屋から出られた。又メモンが言った。

「気をつけないといけないよ。ここに閉じ込められれば、帝王と呼ばれるデジモンにある儀式をやらされるらしい。」

「一体帝王とは誰なんだ。」

そんなことを考えながら町から離れた。

## ＝ 第189話 帝王の道 ＝

ローマには役人などのための道がある。そんな道がここにも引かれていたとは熱斗たちにも想像していなかった。

帝王はある子供たちが捕まったと聞き、この町に向かっていた。

帝王は聞いた。

「あの子供たちで間違いはないな。」

それに秘書が答えた。

それを聞き、帝王は薄気味笑いをした。

そして、町に入った。しかし、お目当ての子供たちが逃げたと言っただのだ。

その子供たち、つまり、熱斗たちだが、町の外部にいた。帝王が来るのが見えた。

「どうする？帝王を襲うか？」

八神が言った。

「様子を見に、偵察しに行きましょう。」

光子朗が言った。

そして、町のテントがあるところへ行った。

「子供たちめ。今度見つけたらただじゃおかない。」

帝王は言った。しかし、その言葉とは裏腹になぜか、ビキニの水着を着ている。まるで瞬時区などで報告される変質おじさんみたいだ。そして、ついに新しい部下の一人が噴出してしまった。

「だれだ、今噴出したやつは。」

帝王は怒った。そして、犯人が見つかり、帝王はこういった。

「お前は、サンバを10分踊って頭とあそこを冷やして来い。」

この言葉にさすがにマオとシロウは顔が真っ赤になった。毎度のことながら、なんでこんなことになるのだろうか。しかし、ぜんぜんそんなことに気づかないやつもいた。

帝王がまた言った。

「誰だ。そこにいるのは。」

ついに、見つかってしまった。

「あなたたちね。地獄に落ちるわよ。」

帝王の顔が渋谷の魔女へ変身していた。なにか悪い魔法をかけられ、おばあさんにされそうだ。

そして、帝王は急に落ち着いた口調でこういった。

「見つけたわよ。ただじゃおかないからね。第1回百人町の女王さま。そして、第51回、荒野の渋谷の魔女といわれた。この私をなめるんじゃないわよ。」

ペナルティはひそかに思った。お前は首都高新宿線か？

Ⅱ第190話 もうひとつの意味でのデンジャラスなデジモンⅡ

「八神太一・城戸丈・太刀川みみ・泉光子朗・武之内空・石田やまと。後の残りももう特定されているわ。光熱斗、劉鼠星、ペナルティ、シロウ、メイリイね。これじゃあークラスできるかしら。しかも、先生までついてるわ。」

帝王はまた牢屋に入れた。しかも、手錠をはめられ自由が利かない。「あらそんな悔しそうな顔をしないでいいのよ。ただ私のオママゴトに使うだけよ。私の時代のドラマはよかった。白い千歳船橋、帝

王の教室、井萩をプロデュース。梅が丘サンデーズ、それに、経堂の器なんかもよかったわ。」

帝王はどうやらドラマ好きらしい。しかし、帝王にはもうひとつ、好きなものがあった。

それは、深夜、マオによって分かったことだった。

それは、丑三つ時なんて言われる時間、つまり1時ごろだ。梅園先生などはすごく好きらしいが、世の中には、それが中止になったからといって骨を放送局に送ってくるほどの人気時間帯、それは、深夜アニメだ。

夜中、マオは目が覚めた。牢屋の監視室のテレビがつき、しかもテレビの向こうでは主人公と脇役が何かいちゃついている。(現在では規制が行われているそうだが、昼間のアニメしか見ない筆者にはどうしてもこういう感触がある。)

それを朝、熱斗たちに話した。

「へえ。そんなのに興味があるのか。」

熱斗たちはそんな感触だ。しかし、マオには恐怖に捉えられた。マオにはどうやらその方向のこともわかるらしい。

そして、ついに帝王からのお呼び出しがかかった。しかも梅園先生だけ別の部屋である。

「これからこのクラスを担当する。祖師谷一家といいます。」

これはまさしく帝王の教室だ。とマオは思った。マオは、本が読むのが少し好きだったらしい。それで図書館から借りて読んだことがあったのだ。

その話は教師が鬼になるという話だった。

その時間中、恐怖だった。帝王はそれに乗り移ったようにやるのだから…。

ペナルティ2・10（第191話〜第200話）

＝第191話 この帝王は急行「萌え・秋葉系」です。って何じゃそりや&amp;#8252;＝

“ 本日も秋葉原鉄道をご利用くださいましてありがとうございます。この電車は急行「萌え」行きです。途中の秋葉原で後ろ4両を切り離します。”

マオたちはこんな帝王の気持ちの列車に乗っていた。（だいたい、最近なんで鉄道ネタが多いんだ。鉄ちゃんも秋葉系だろ 違うと思う。）

そんなブログみたいにながーい筆者の意見はさておき）って、最近いかれまくってね。ていうか、夏休みだからっていいきになつてんじゃねよ）

お見苦しいものをお見せしてしまいました。さて、次に帝王が行ったことそれは、しんアニネタ（って、なんだ。）だった。

（この先はどうやら危険なおいがする。）

ところで、マオたちがやらされている間に（理由は書きたくないから。）なぜ、未だに帝王の正体が分からないかについて説明しよう。理由は、いつもお面をかぶっているからである。それにはどうやら彼女（帝王は自分でこう思っている。）の生涯を見なければ分からないだろう。

そんなのんきな話をしている間にマオたちの演劇は終わったみたいだ。しかし、マオはどろどろに溶けている。一体何をやらされたか想像がつかない。

そして、帝王は言った。

「もうそろそろ飽きてきたな。今度はあのネタで行くかな。名づけて小曲花火大会。なんてね。」

もう帝王の思想には誰もついていけなかった。これも悪魔のしわざ

なのだろうかとペナルティは思った。しかし、これが性格らしいのだ。

一体、これからどうなっていくのだろうか。(って、これで終わり?)

＝第192話 閉ざされた選ばれし子供たちの力＝

マオは言った。

「このまま打ち上げられていいのか。」

最近、なにか目的を無くしているような気がした。本当は悪魔を倒さなければならぬのに、自分が嫌なことを見せ付けられたりして、気がめいってしまっているのではないかと。

そして、実際、羽目はずすことが起きてしまったような気がしていた。それは、自分にも当てはまると思っていた。

みんなは確かに正解をだす。しかし、それが実行できるかはわからなかった。

そして、いつもどおりの答えが返ってきた。マオはこのことを言いたかった。しかし、今は我慢しようと思った。

そして、帝王に攻撃をする作戦を実行することになった。そんな中、デジバイスの変化に誰も気づいていなかった。

帝王が来た。八神たちは作戦を実行するためにデジモンたちを進化させようとした。

しかし、デジモンたちは進化しなかった。

「何をやるうとしたの。」

帝王が怒った。その時だった。

「ブルース、トランスミッション」

この声は、炎山だった。しかも、桜井もいる。

「よかった。」

安堵の表情が顔に出た。そして、ブルースたちのおかげでなんとか、帝王を降参させることが出来た。

「熱斗は何をやってるのか。ほんと、三流ネットバトラーだな。」  
「なんだよ。」

熱斗はふくれつつらになった。

「ところで、何でビヨンドードに。」  
熱斗は聞いた。

「それは、熱斗たちがなんかここで被害を……。」

それは、炎山にしては珍しく、言葉が詰まった。

帝王が言った。

「この、デジタルワールドの破壊者め。」

一体これはどういう意味なのだろうか。

それには深いわけがあった。

「第193話 変わっていく事情」

帝王は仮面をはずした。中から出てきたのは、バケモンだった。熱斗たちは少し、ロックマンは大きくびっくりしていた。

ロックマンについてはPETに中から姿をくらすぐらいだ。それほどロックマンはお化けが大の苦手なのである。

バケモンは言った。

「人間たちは、デジタルワールドを壊し、そこにネットナビを住まわせた。」

それに熱斗たちをはつとさせた。

そう。デジタルワールドは今、存在しないのだ。つまり、アグモンたちも。

熱斗は八神たちに話しかけられなかった。逆に八神たちも。

マオは思った。このままでは、仲間が分裂するということ。

「今まで戦ってきた仲間じゃないか。」

マオが言った。しかし、何も反応がなかった。

そして、ついにこんなことを八神たちが言い始めた。

「俺たちはここにいてはいけないのかも知れない。」

熱斗は何もいえなかった。

「そんなこと言っていていいのかよ。」  
マオが言った。

「今までやってきたんじゃないか。このまま悪魔に倒さなくていいのか。何のためにここに着たのか考えてみる。」  
マオの怒りにみんなびっくりした。

「確かに、アグモンはそのためにあつたんだつたよな。何かデジタルワールドがおかしいと。」

そして、八神は語り始めた。

「なんかデジタルワールドがおかしいと本宮大輔が言ったんだ。そして俺たちは旅立った。」

「そして、デジタルワールドからここに来たということか。」  
マオは言った。それにみんなの心は変わった。

しかし、デジタルワールドがなくなつたからと言ってこの世界で迷惑をかけてはいけない。デジタルワールドとネット社会の共存は出来ないのか。

そんな心が生まれた。

|| 第194話 共栄共存のために ||

どうすれば共存できるのだろうか。

ビヨンダードから戻ってきた熱斗たちに新たな課題を突きつけられた。

しかし、なぜ炎山は一瞬顔をこわばらせたのだろうか。そうペナルティは思った。

祐一郎もビヨンダードにデジモンが押しだされる形になってしまったことを心惜しく思った。熱斗の祖父にあたる光ただしがこの仕組みを開発したことにより、デジモンが今、ビヨンダードで人々を困らせていることを解決してあげたかった。

光子朗が言った。

「だったら、ネット空間上でナビと同じ場所に共存させるというのはどうでしょうか。」

光子朗が言ったことが一番正しかった。しかし、それが出来るかは祐一郎にも分からなかった。

「僕も手伝います。」

光子朗の言葉に祐一郎は言った。

「ありがたい。」

そして、そのシステム作りをし始めた。

祐一郎は光子朗にこんなことを言った。

「そう言えば、昔、正博士、つまり、僕の父が言っていたんだが、ネットナビ作るきっかけになったのがデジモンとあったことからだということを知っていたな。今までデジモンというのがどんな生物か分からなかったが、今になってよく分かったよ。」

そして、システム作りはどんどんと進んでいった。しかし、それは日にちが必要だ。

その間、太刀川はあることに興味を持ち始めた。それは、料理だ。

そして、料理といえばマオだ。太刀川はマオに料理を教えてもらおうとした。

しかし、太刀川の親の作る料理というのはキムチチャーハンにクリームとイチゴを載せたキムチチャーハンケーキだ。そんなもの見た目が悪い。さらに、味も保障が出来ない。

そんな家族に生まれた太刀川。まずそこから治さないといけないとマオも感じた。理由は、一番初めに何か太刀川に料理を作ってもらったとき、その料理が途轍ものないものだったからだ。

そんな感じでどんどんとは過ぎようとしていた。

## ＝ 第195話 太刀川料理修業の巻 ＝

さあ、やってまいりました。花嫁修業の巻。じゃなくて、料理入門か。それにしてもマオは弟子に恵まれていない。シロウと太刀川と

いう組み合わせ。どちらにしる大変だということは誰が見てもわかる。

広州で最年少の特級厨师になった凄い少年にはなぜだか変な弟子がついてくる。なんて不公平なんだろうなんておもっているのではないだろうかマオの中で・・・。

さて、一番弟子のシロウとマオは最初、おいしいものを作った。それは、ふつうのチャーハンを作って太刀川に食べさせた。そのチャーハンはなぜか横にいた熱斗が少し食べて絶叫するほどおいしいものらしいのだが、太刀川の反応は鈍い。

マオは、ともかく何を教えればいいのか困ってしまった。というよりも、マオは誰かに教わったのではなく自分が母さんの後姿を見て、そして、自分で思考錯誤しながら料理というのを学んだ。だから、どうやって教えればいいのかさっぱり見当がつかなかった。やっと今日の朝、思いついた作戦もまんまと打ち砕かれてしまったマオには何も出来なかった。

その時、八神が通りかかった。

「おお。マオが作ったのか。そういえばマオって、料理人だったんだよな。今日始めてマオの料理を食べられるぜ。」

そういうと、残っていたチャーハンを食べ始めた。

「そういえば、太刀川は今、マオに料理を教えてもらっていたんだよな。あつ。そうだ。俺たちも入っていいか、この料理教室。さっきのチャーハンすごくおいしかったぜ。」

そして、次の日、マオは熱斗の家に八神たち（光子朗はプログラム開発で忙しいからパス）が教わりにきた。マオは今日の朝考えた提案をみんなに話した。

「チームで料理を作るのか。いいな。」  
八神が言った。

そして、チームになってみんなのお昼を作ることとなったのである。

悪魔たちは熱斗たちが帰ってきたことを聞き、うれしかった。なぜだろうか。それは、悪魔たちが熱斗たちを殺すために準備がやっとおわって、後は作戦を実行するだけになったからだ。

しかし、そんなことは熱斗たちも知らなかった。

だから、炎山があの時、冷や汗をかく羽目になったのである。

そのころ、八神たちは起きてきたばかりの熱斗もくわえて料理を作った。

そして、出来た料理は豪華だった。

八神の得意なオムライス、そして、それに鳥のから揚げ、中華スープ、あとは、浅漬け。これを10人前というのは大変なものなのである。お昼、プログラムを作っていた光子朗や祐一郎を呼んだ。

みんな、味のおいしさをしみじみかみ締めていた。それと同時に、太刀川にも変化が現れた。それは、こんなにみんながおいしそうにしているということへの喜びだった。

しかし、その喜びも後もう少ししか見れないなんてみんなそんなことさえ思っていなかった。

そして、その日は、プログラムも後もう少しというところまで出来た。

次の日、ついにプログラムが完成した。あとは、ビョングードにいるデジモンたちを連れ戻すだけだった。

しかし、悪魔はひどかった。それは、戦いを仕掛けるための行動を起こしたからだ。

熱斗たちは、そんなことも知らずにビョングードに旅立った。

そして、秋原町が動き始めた。

熱斗たちは、何にもしていないのに、すでに可決されていた時空法によって処罰されることになってしまったのだ。

時空法とは、時空間の移動によって歴史が変わってしまうのを恐れた議会がこういほうを作ったのだった。あとは、それを操る人しだいの判断なのだ。

一体熱斗たちは、これからどうなってしまうのであろうか。

〓 第197話 最後の旅 〓

熱斗たちは、ビヨンダードに着いた。(なんか当たり前になっ  
てしまい、とてつもなくさびしいな。)

デジモンたちにプログラムが出来たことを伝えた。その話が終わっ  
たあと、デジモンのなかの一匹が言った。

「ちよつと待つてほしい。まだ、ビヨンダードにいるデジモンが集  
まっていないんだ。」

それに熱斗が言った。

「大丈夫だよ。時間はたつぷりある。」

そして、熱斗はあるナビに会うことになる。それは、トリルだった。

「ロックマン。熱斗。」

トリルは少し成長していた。トリルはロックマンと熱斗との再会を  
喜んだ。

そして、今までのことを話した。デジモンたちが集まるのにはまだ  
まだ時間が必要らしい。

だから、トリルは一刻でも長くロックマンと一緒にいることにした  
らしい。

デジモンたちは、昼夜問わずに集まってきた。デジモンたちが移動  
しているところを見るとまるで、砂漠のらくだ集団をおもいだす。

そして、2日後。デジモンたちが集まった。

「よし。いくぞ。」

八神が言った。

トリルは少し悲しそうだった。しかし、ここは別れなければならな  
かった。

「またくるよね。ロックマン。」

トリルはロックマンにこういった。ロックマンはこう答えた。

「きつとあえるさ。また。だって、あの時だって、また会えるよね

って言うって本当に合えたじゃないか。」

「そうだね。」

トリルはうなずいた。

そして、ついにあの時が来ることになってしまった。

デジモンたちと一緒に科学省に戻ってきた熱斗たち。祐一郎はデジモンたちをネットに入れた。そして、専用のスペースにそのデジモンたちを移した。これで仕事は終わった。

熱斗たちが科学省から出たとき、そこにはネット警察がいた。

「何で。ここに。」

熱斗たちは驚いた。しかし、ネット警察に連れて行かれてしまった。

## ＝ 第198話 時空罪 ＝

熱斗たちは約10人＋6匹いるのにひとつの牢屋に閉じ込められた。

(アグモンたちも)

そして、真部刑事が言った。

「あなたたちは、時空を超えてしまった。よって時空罪を適用するわ。」

「そんなのおかしいじゃないか。」

熱斗が言った。しかし、そんなことを聞いてくれなかった。

「一体これからどうなってしまっんだ。」

熱斗たちはそうつぶやいた。

「多分、焼き討ちよ。」

どこからか御釜(駄洒落?)声が聞こえた。

オカマ声はさらに続けた。

「私は、ある世界からきたの。その世界では、今地球が氾濫を起こしているの。私みたいにオカマになったり、女狂いをしたり、しまいは快樂殺人を起こす人たちが現れ始めているわ。このままでは世の中がとんでもないことになるわ。そこで、私にある力が宿ったの。それは、私の宿命なの。どうか一緒に手伝ってくれないかしら。」

そして、それに同意した。

「分かりました、ご主人様。」

どうやらまたまた変な人と出会ってしまったらしい。

そして、ついに看守が言った。

「また人の丸焼きがでるな。とくにがうまいんだよな　　が。」

ついでに、これからの話は、1997年ではなくて、2006年、つまり、トヨタのリコール率がついに現代（ヒュンダイ。韓国自動車メーカー）をぬく高さになってしまい、デフレを脱却したと言いながら、正社員の残業率がとてつもない数字になり、さらにレバノンではイスラエルと戦争をし、さらにさらに小泉総理が靖国神社に参拝し、中国・韓国から批判を受けたと思ったら、今度は首相の靖国神社参拝に反対していた某衆議院議員の自宅兼事務所に放火がされ、JR東日本では窓ガラスが割られたり、ドアが接着糊でくつつけられたりとすごく氾濫していた。某テレビ番組では、戦前に似たような状態になっていると言われた。戦後61年目に突入し、だんだん戦争というものを忘れていくこの世の中に旅立っていくのである。（つて、ニュースを並べるなよ。）

＝ 第199話 焼き討ち焼き討ち & a m p ; # 9 8 2 9 ; ( つて怖い ) ＝

なぜかここだけ斜めっているこの世の中。人々の心も斜めっていた。プレイブストーリーで一攫千金を狙っているフジテレビ。しかし、所詮、テレビ東京のアニメ、ナルトに広告・宣伝面で負けている。（つてこの斜字見にくい。しかも、これは、ニュースじゃないんだから。）

その間に焼き討ちをするための台が完成したようだ。

さつきからふざけていますが、熱斗たちは恐怖に見舞われていた。

そして、看守が外に出ると言った。

外に出た熱斗たちを待っていたのは、巨大な板、そして、そこにくつついている手錠。待ち構えている神主、松明を持ったお坊さんたち。

この光景は走れメロスに似ていた。

そして、司会者らしき人がこういった。

「さあこれから年末恒例の火に飛び込んでもらいますスペシャル始まりです。」

ペナルティは思い出した。年末といえば紅白歌合戦。それが午後1時45分に終わり、NHKが行く年来る年を流している時間に、日本テレビでは広大な土地に火だるまやら竜やらを組んでお笑い芸人がそれに立ち向かう某番組をおこなっている。まさか今年は僕たちが主役？そんな馬鹿な。しかも、まだ9月だぞ。まだ年は行かんぞ。

そんなことを思っているといつの間にかつるされていた。そして、待ち構えたとばかりにほら貝がなる。

「さあ、そして、ついに火がつけられました。」

だんだんと板の面積が消えていく。このままじゃ、本当に人焼きになつてしまう。そのときだった。空がひかり、板は消えた。

「一体何がおきたんだ。」

それは、例の男が行ったことだった。

そして、熱斗たちは2006年に連れて行かれた。

## 「第200話 残酷な世界」

熱斗たちは、2006年である男の人に会った。40代のサラリーマンという感じだがしゃべり方はオカマだった。

「ようこそ2006年へ。早速あるところに行ってもらおう。」

そして、男の人は魔法をかけ始めた。

「ちよつと。」

熱斗が言ったがすべてを出し尽くす前にどこかに来てしまった。

「何をやればいいのかわからないな。」

熱斗が言った。そのとき、目の前にある工場に夜なのにマイクロバスの着いた。しかも人がそこから降りてくる。

「密輸？」

シロウが言った。確かにそうも見える。しかし、代わりに工場からも人が流れてくる。一体、この現象は何なのであるうか。

そして、空から声が聞こえた。

「私が今から案内するからそれ通りに行動してよ。そうでないとんでもないことになるからね。」

そして、オカマは熱斗たちを工場の中に入らせた。

「この工場では液晶テレビを作ってるんだ。」

熱斗は言った。熱斗はこんな組み立て工場を見たことはなかった。だから驚くのも無理はない。

しかし、なぜ、夜なのに未だ組み立てているのだろうか。それが不思議だった。

「この工場は、24時間作り続けているのよ。しかし、この工場には、問題があるの。今では少し報道されるようにはなっているんだけど、未だに解決されていない。」

「その問題って。」

「給料が安くつて、しかもほとんどがアルバイトみたいなもの。しかし、それよりも過酷なの。」

まさかとペナルティは思った。しかし、誰も悪魔のことを知らないことを思い出すと口に出せなかった。

「どうにかして、この工場の人たちを助けるの。」

男は言った。しかし、どうやって助ければいいのかだろうか。

それが悪魔の仕業だということに気づいていない以上、この問題は解決できなかった。いや、その悪魔の退治方法が分からなければ何も出来ないのだ。

ペナルティ2・10(第191話)第200話(後書き)

もしもよろしければ、下のアンケートの方をお願いします。

ペナルティ2 - 11 (第201話〜第213話)

「第201話 新たな技」

熱斗たちが悩んでいるとP.E.Tにメールが届いた。それは、李さんからのものだった。

「大丈夫だったか熱斗。」

それだけだった。しかし、熱斗たちにはうれしかった。そう心配してくれることが。

そして、そこにあの男の声が聞こえてきた。

「悪魔を退治しなければ、あなたたちをさせてくれている人とは会えないでしょう。その気持ちをいつも持っていれば、悪魔を攻撃することが出来るでしょう。あなたたちの中にはある力が宿っています。その力はあなたたちの心の思いようで変わります。」

男はそういった。

マオが言った。

「もしかして、七つのしるしと変身の力がそれを解決してくれるのか。」

そんな感じだった。そして、また工場にもぐりこんだ。

人々は黙々と作業を続けていた。まるでロボットみたいだ。仕事とは楽しんでもいいものだ。マオはそう思っていた。自分だって、楽しいから料理を作り続けられる。もしも、シロウとかメイリイたちに会っていなければ、多分、今のような自分はいなかっただろう。その心が強くなったとき、悪魔たちが見えた。工場中をうろついていた。

そして、アグモンたちは攻撃を始めた。どうやら工場のラインは止まっていた。

そして、悪魔たちは消えていった。

「やった。」

それと同時にまた工場のラインが動き始めた。早くここから逃げなければ、見つかってしまう。そして、熱斗たちは工場を後にした。しかし、まだまだ悪魔はたくさん潜んでいた。なぜなら、2003年に悪魔たちが進入したからだ。熱斗たちには悪魔を退治するといふことが嫁せられていた。これからもこれをずっと続けることになるとは間違いなかった。

Ⅱ 第202話 悪少年との戦い Ⅱ

熱斗たちは、男にはじめてあった。その男は見た目はちゃんとしたサラリーマンだったが、言葉遣いだけは女だった。

「今度は、ある学校に向かってほしい。その学校では、いじめが奮発している。このままだともんでもないことになる。」

それをいうと、その男は呪文を唱えた。熱斗たちは、現場に向かった。そこは普通の小学校だった。

しかし、そこでは、いじめが流行っていた。それは、当然悪魔の仕業だった。

熱斗たちは、学校でいろいろな光景を見た。殴られ殺される寸前の少年。金を巻き上げる少年。その光景は壮絶だ。

ペナルティはぼつりと言った。

「なぜこれほど悪魔というのはひどいのだろうか。」

みんなそう思っていた。悪魔は残酷だ。弱きものをいじめる。強きものを操って楽しむ。これのどこがよいのだろうか。

熱斗たちは一刻も早く助けたかった。こんな光景を見たくなかった。そして、ついに悪魔たちが見えた。デジモンたちは、それを退治している。しかし、熱斗は自分が役に立たないことになにか嫌気を感じていた。

熱斗は思い出した。七つの力は自分で思っていることをかなえてくれる道具だと。

そして、いちかばちかの大勝負にでた。それは、ここでクロスフュ

ージョンすることだった。

しかし、ディメンショナルエリアがないのにクロスフュージョンができるはずがなかった。でも奇跡は起きた。

熱斗がロックマンとクロスフュージョンしたのだ。今まで考えられなかったことだ。

そして、熱斗も退治し始めた。どんどんと悪魔は消えていった。

そして、退治し終わったと同時にクロスフュージョンが解けた。

「熱斗。やったな。」

マオが言った。多分、七つの力のおかげだ。マオにお礼を言いたいくらいだ。

そのとき、またあの男が現れた。

## 「第203話 人の心」

ペナルティが言った。

「悪魔の正体は一体何なのですか。」

それに男は答えた。

「よくまあ悪魔をだということを知っていますね。じゃあしようがないかな。うー」

だんだん怖くなってきた。女からホモに変わった。（もしかするとこの後、襲われる？）

「悪魔は人の心によって生まれるだ。人の心に悪が増えれば増えるほどそれはあるところで作られるんだ。そして、あんたたちが地球をこんな状態にした。それが今の状態だ。」

そして、男は怖い人相で消えた。まるで怨まれているかのよう。この後とんでもないことが起こることは誰にも想像できなかった。じゃあ。矢玉さん。サンジャポファミリー風でお願いしますー。

「はい、今日はビキニで天気予報です。」

「はっ、なんかダサイ。」

「だれよそんなこと言ったのは。」

矢玉はおこり始めた。そして、スタジオを破壊していった。そんなこんなの関係か、熱斗たちは、ある場所へ連れてこられた。（絶対違う。）そこには地獄の池などがあった。

「ここはもしかすると地獄？」

ペナルテイが聞いた。そのとき、熱斗を残してほかのみんなは雲の管を通っていった。

「ずいぶんと迷惑がかかったでしょう。」

そこには天使がいた。そして、天使はゆっくりと言った。

「あの少年のおかげであなたたちは不幸になっています。あの少年は地獄にいなければならない存在なのです。」

天使はそういうとどこかへ消えていった。

雲の下は見えなかった。熱斗がどうなっているのか分からなかった。熱斗は逆に閻魔大王に会っていた。閻魔大王はこういった。

「お前は、生きてはいけな人物だ。今すぐ地獄に落としてやる。」

そして、熱斗は熱湯の中に2秒、そして、パック包装された。（つて、牛乳かよ。しかも熱斗は熱湯つて駄洒落かよ。親父。）

続く。

## Ⅱ 第204話 悪光あくこうⅡ

熱斗は、気を失っていた。悪魔はパック包装し、さらには鉄板でそれを巻いた。そして、悪魔はついに池に放りこもうとした。しかし、そのときだった。悪魔は驚いた。

「おまえ。そこに入っている少年を放しなさい。」

悪魔はたちどころに逃げた。それと同時に天と地獄がひとつになった。

「危なかった。」

それは、あの男だった。しかし、なぜここに。

「さっきのは偽物だ。」

男は言った。

「悪魔たちに何か情報を漏らさなかったか。」

男は少し焦っていた。ペナルティが言った。

「僕が疑問に思ったことしか話していません。」

「それは。」

男の心臓の鼓動が上がった。

「ただ、悪魔の正体を聞いただけです。」

男はようやく落ち着いた。そして、話した。

「どうやら、君たちの存在に気づかれてしまったようだ。君たちは、実は、悪魔たちの間では、最強の敵と思われるみたいだ。とくに、熱斗。お前がな。」

熱斗はやっと気がついたらしい。

「悪魔たちはなぜか最近、熱斗を警戒している。だから、永遠に封印しようとしていたのだ。悪魔にはいい心など少しもない。」

「悪魔は、人の心から生まれてきたからですか。」

男はペナルティに問に少し驚いた。まさか、悪魔がそんなことを言うとは思わなかった。そして、具体的に説明しなければならなかった。

「この世界のほかにもあることを君たちは知っているんだよね。」

「二界とかいうものですか。」

ペナルティの問にうなずいた。

「君たちは、ある意味凄い。ここまでそろっていれば、きっと悪魔など倒せるはずだ。しかし、悪魔は、何でもやる。たとえ一回撤退したからといって、もうそこにはこないわけではない。だからこそ、お前たちは、何回も殺されそうになっているのだ。悪魔はずるいという言葉はいいものだと思っている。そこを注意しなければならぬ。悪魔には心がない。そしてお前たちが知らないような力を持つた奴も中にはいる。お前らなど、所詮、遊ばれているだけだ。」  
その言葉に熱斗たちは少し恐怖を感じた。

悪魔は次の作戦を考えていた。それは、心理戦へと変わっていた。心というのは、弱いのである。そして、悪魔たちは再び熱斗たちのところへ向かおうとしていた。

男は次の目的を言った。それは、またしてもいじめだった。なぜこんなにいじめに向かわせるのだろうか。

そんなことを少し思いつつ、次の場所に派遣された。(つて、自衛隊か。)

そこには悪魔はさらに蔓延っていた。いつもどおり悪魔たちが見えた。そのときだった。後ろから声をかけられた。

「お前、何をしてるんだ。」

それは、頭に電波用のアンテナを立てた少年だった。その形相はあの町のようなだった。

「萌え船体。電波少年、林。」

“デンパシヨウネン”

ペナルティは某テレビ局の人気番組しか思っていない。

「君たちは悩みがあるでしょう。それを私の頭のアンテナがキャッチしているのです。ご主人様。」

いきなり、メイド口調になって、少し、不気味だった。

「ところで、何でそんなところにアンテナが立っているの。」

熱斗が言った。

「それは、電波を収集するためだよ。このアンテナで、地上波デジタル放送(よろしくね。デジアナ。)デジタルハイビジョン放送スカイネットジャパンCS放送、無線電波、マイクロ波電波(山手線の液晶に表示される

ものはすべてこれで送信。) などなどいろいろ収集できるんだ。」

「で、ところで悩みって何。」

ペナルティが聞いた。それに林はこう答えた。

「あなたたちは、少しだけけれどもこの長いトンネルから抜け出すことが出来るか心配になっている。」

その言葉に熱斗たちは少しだが共感してしまった。いつかは忘れてしまつたが、太刀川が泣いていた。その原因はこんなに悪魔を殺しても、ぜんぜんいじめなどが減らないことだつた。

「あなたたちは、悪魔と戦おうとしていることが間違っているのです。人間は欲の塊だ。それなら当然、悪魔を作り出す不満というのが生まれる。欲求不満という言葉があるように。」

人間は残酷だ。

地位のためにほかの人を使い、そして、殺す。そんなのどこでも起きている。それをやめさせるのは地球の草を刈るぐらい大変だ。

そんな人間たちを悪魔から守るのはおかしい。

人間が欲求したために悪魔が現れたのに、それから守るためにお前たちは無意味なことをしているのだ。」

その言葉に何か心が詰まつた。

Ⅱ 第206話 揺らぐ心。そして、Ⅱ

「お前たちは間違っている。」

その言葉は熱斗たちの心の中を駆け巡っていた。

「…人間はたとえ社会主義だ。民主主義だ。人間は平等だ。つて言つてもそれは虚偽だ。なぜ、今、世界では戦争をしまくっているのだ。なぜ、フリーターが生まれるのだ。なぜ失業者が生まれるんだ。2006年というのはある意味最悪だ。景気は回復したが。」

一人の人間がみんなを支配したいから、ほかの人間を人間だと思つていないからこうなるのだ。

人間がいれば、きっと地球は人間の手で滅びるだろう。

人間は卑怯だ。

どうせ地球が滅びる時には

人間だけで

逃げるのだ。動物や植物は

無視して。

そんな人間を  
助ける

というのか。神も間違っている。」  
その言葉がさらに追い討ちをかける。

「そういえば、あなたたちには不思議な力があるとこのパソコンで  
キヤッチーしたのですが。

僕はあるところでこんなことを聞いたことがあります。

それは、ある老人から聞いた話だった。その老人はこんなことを言  
っていた。神がお亡くなりになったときに神が持っていたすべての力  
をある人間たちに受け渡した。そのひとつがお前らに力だ。しか  
し、こんな人間たちのためにそんな力を使うのはすごくもつたいな  
い。そんな力は、困っている者に使うべきだ。」  
そのときだった。

「そんなことをたくらむのはやめなさい。」

あの男だ。

「くそ。」

林は悪魔に変わった。

「一体、これは。」

男は答えた。

「これは悪魔が持っている力のひとつだ。しかし、こんな力を使え  
るとはなかなか手ごわい奴が出てきたものだな。」

そのときには悪魔は逃げていた。

熱斗たちは心にしこりが残っていた。それを男は知っていた。それ  
が残っていれば、もう何も出来ない。そのことは男には分かってい  
た。

〓 第207話 歩むべき道 〓

「熱斗。」

男が言った。

「そういえば、ぼくの名前をあかしていなかったな。おれの名前は良太だ。」

男の話の内容に少しびっくりした。

「ところで、あの男に随分、凄いことを言われたみたいだが。」

それに熱斗が答えた。

「そうなんだ。人間を助けて何になるんだ。人間を助けたって、悪魔を生むだけだって。」

それに良太は笑った。

「たしかに、そうだ。しかし、悪魔は分かっている。お前らを見てみるって言いたい。マオだって、その隠してある部分には何か知っているんだろ。」

それにマオは少しおどろいた。

「まあ、見せなくともいいよ。あとは、太刀川。太刀川はなぜ人が戦わなければいけないのかということにひとつの解を見つけた。それは、やはり戦ってはいけないんだ。という解だ。」

熱斗。

それにナツトクした。そして、良太が言った。

「そうだ、今日は野球を見に行かないか。」

良太は、なぜそんなことを言ったのだろうか。

それは、熱斗たちの心がまだ不完全だったからだ。そんなことまで分かっていたのだ。

所沢で、(つて間違っているよ。野球、一体どこに見に行くんだよ。やっぱり甲子園だよな。 阪神一番さんより)

ところで、新木場に来た。熱斗たち(やっぱり、あそこ行くのか。)

そして、電車に乗った。(やっぱり、あそこ行くのか。)

そして、2時間後、電車で行ってきたのはインボイス西武球場だった。

しかし、そこに待ち合わせのは、悪魔だった。悪魔はどこまでもついてくるよ。どこまでも

「第208話 野球ではなく、悪魔の呪い。」

例の球場にきた熱斗たち。まわりは、込んでいた。しかし、それは西武ファンではなく、悪魔たちだった。しかし、まだ誰一人として気がついていない。

そして、ついに野球が始まった。

しかし、それと同時にある準備が裏で始まっていた。

悪魔たちは、隙を見計らっていた。そして、ついに（って、いつになつたら始まるんだ。道頓堀に突っ込むぞ。by 阪神ファン）悪魔が動き始めた。

「ここが最後となるだろう。お前にも分からなかったとは、随分と不幸な奴だったな。バニツシュ」（って、俺のセリフとなるな。By 梅園先生）

悪魔たちはこんな呪文をといた。

「碑文谷、大倉山、祐天寺、代官山、菊名、横浜、みなとみらい、県庁前に中華街……」

そして、光につつまれた。光から開放された。

ペナルティは、自分の家に戻っていた。もうそろそろ、夕方だ。下からおいしそうなにおいがした。ペナルティは思った。

「今まで、俺、何をやってたんだ。」

ペナルティには、もうあの記憶が消えていた。

それと同様に、八神たち、そして、マオたちにも起きていた。

ところで、熱斗はどうなったのだろうか。

熱斗も同じだった。元に戻っていた。

みんなの頭の中からこの記憶だけがなくなっていた。

しかし、変わったことがあった。それは、心だ。なぜだろうか。悪魔たちは、なぜ、心の成長を戻せなかったのだろうか。

それだけは、悪魔にも出来なかったのだろうか。しかし、悪魔たちにとって、これが命取りになるとは、思っていなかった。

悪魔たちは、西武球場で踊り騒いだ。悪魔たちの完全勝利だ。とみ

な叫んだ。悪魔たちは、熱斗を攻撃しに行こうとした。なぜ？

〓 第209話 悪魔の目的 〓

悪魔たちは、なぜ、熱斗を攻撃しようとしているのだろうか。一体、何が、悪魔を怖がらせているのだろうか。

それは、後になって現れることとなった。

熱斗を攻撃するための作戦を早速立て始めた。

しかし、悪魔たちにもなかなかいい作戦が思いつかなかった。今までの心理戦で行こうと思っても、失敗する確立が高かった。大きな友情が1つ切れた今では、一か八かの作戦だった。

それでは、どうすればいいのか。悪魔たちは攻撃には出たくはなかった。

悩みに悩んだ。

そして、ついに思いついた。

攻撃だった。これしか方法はなかった。

それには、人数を集めなければならない。そして、攻撃も、作戦を十分に練らなければ、やつつけられないだろうと言った。そのとき、ある悪魔が現れた。その悪魔をみた悪魔たちは、頭を下げた。

「これは。どうも。サナ様。」

悪魔たちにとつてどうやら、大事な人らしい。サナは言った。

「あなたたちは、どうやら大変なことをやっておりますね。」

悪魔たちは、言った。

「はっは。サナ様の言うとおりです。私たちは、人の体に乗っ取るためにこのようなことをやっているのです。」

「なんですか。あなたたちは。」

サナは怒った。

「あなたたちは、人間の体をもらってどうするつもりですか。」  
それに悪魔たちは答えられなかった。なぜ、悪魔たちは、人間の体を求めるためにこんなことをしていたのでしょうか。なぜ、地球を

征服しようと思いついたのでしょいか。

それは、人間の欲望だからだった。しかし、悪魔たちには、そんなことは分かっていなかった。しかし、サナは分かっていた。悪魔が人間の欲望から出来たものだと。

悪魔たちにサナは言った。

「あなたたちは、所詮、人間の欲望のかたまり、そんなことをしていいの。」

いきなりの話に驚いた悪魔たち。サナの言葉に悪魔たちの心は揺れた。

## 第210話 反逆

しかし、サナの言葉に悪魔たちはどうしても信用が出来なかった。

そして、ついに決めた。サナに一人の悪魔が言った。

「サナ様。そんなことはありません。人間の心の闇が私たちを作っているはずがないではありませんか。」

サナはその答えに何も言わなかった。いや、今後、どうなるか分かっていたのだ。

「分かりました。あなたたちがそこまで言うのなら、そうしなさい。しかし、必ずあなたたちは、あの少年に負けます。」

「それでは、どうすれば、いいでしょうか。」

「それは、私にも分かりません。私は、未来は予想できません。しかし、詳しくは分からないのです。少し、あなたたちがかわいそうに思えたから、私は、あなたたちに、私の持っている力を少し授けたいと思います。」

そして、ある呪文をサナは授けた。

「この呪文は、絶対に危機的な状況のときしか使ってはなりません。」

悪魔たちは喜んだ。

そして、悪魔たちは、同時に熱斗を攻撃するための体制が整ったこ

とを知らされた。

「ついに、やってきた。必ず、倒してやる。」

悪魔たちは、気合が入った。

そのころ、熱斗は、そんな計画があることを知らなかった。

悪魔たちは、熱斗にある手紙を出した。それは、悪魔たちが熱斗を呼び出すための手紙だった。


ペナルティは、熱斗たちのことを忘れ、普通の生活をすごしていた。平和な身のまわり、外では、テロがあったり、戦争が起こったりしていた。しかし、ペナルティには悲しいとしか感じられない。今となってしまえば、普通の少年なのだ。

しかし、この生活は長くは続かないことをまだペナルティは知らない。というよりも、これから戦いに出されるなんて普通はひとつばかりも思っていないかった。

ただ、ペナルティは、世におこる事件をただ見つめていただけだった。


そのころ、マオたちはどうしていたのだろうか。それは、次回。

|| 第211話 料理人 マオ ||

やはり、マオたちといえば、料理人。熱斗の舌までもうならせたくらいだ。

陽泉酒家で今日もせっせと働くマオたち。そこにまた新たな挑戦者が現れようとしていた。

そこに現れたのは、紛れもなく子供。しかし、マオは、自分の過去

と照らし合わせた。

マオは、史上最年少で特級廚師に受かった。しかし、そこまでの道のりは平坦ではなかった。

最初は、広州の泥水で悩まされた。しかも、それを解決できたのはいいものの、今度は、白い目で見られていた。しかし、それには理由があった。

理由、それは、自分の劣等感がそれを生んだのだった。マオは、自分に不安を持った。本当に大丈夫のだろうか。と。

そんな感じで、料理勝負は始まった。

久しぶりのように見える料理勝負。

一体、二人の結末はどうなるのであろうか。

その頃、熱斗は朝の5時だというのに、秋原町の郊外に呼ばれた。

「誰だ。朝のこんな時間に呼んだのは。」

熱斗は朝早くに起こされて凄く機嫌が悪かった。

「はっはは。洋子さん。じゃなくてようこそ。あなは、じゃなくって。…」

どうやら、悪魔も寝ぼけているらしい。

「何を言ってるんだ。」

熱斗が空き間を怒らせそうなことを言った。

「そんなことを言っているのかな。」

悪魔は言った。

「どういう意味だ。」

だんだん殺気が満ちてきた。

「あなたたちは、今日で、ネットセーバーや複雑な関係ともおさらばできる。」

そして、悪魔たちは攻撃を始めた。

「ロックマン。クロスフュージョンだ。」

ディメンショナルを名人に要請し、熱斗はロックマンとクロスフュージョンして、戦った。

こういう風に戦えるようになったのである。

しかし、悪魔たちは、奥の手を考えていた。

その頃、マオは両方の料理が出来た。

判断は、チヨウユウさんが判断することになった。

チヨウユウは言った。

「まだまだだな。マオのほうが勝っている。」

マオたちはなんとなく喜んだ。マオはまだ身に何が起ころうとしているかわかっていなかった。しかし、それは、確実に近づいていなかった。

「第212話 どうなる？熱斗？」

「さて、もうそろそろ私たちが本気を出さなければならなくなってきましたか。」

悪魔は不てきに笑みを浮かべた。

なんだか、ロツクマンの背筋が寒くなってきたみたいだ。

「千駄ヶ谷・信濃町・四ツ谷怪談・飯田橋・水道ばっしん・御茶ノ水博士・秋葉萌えー・浅くさい橋・両国相撲・禁止町・亀戸頭・新恋輪・濃いわ・市川・元柔田・下総中山& amp; #8252;」

（つていつまで続くんだ。新鉄道唱歌か。）

しかしながら、これでは使えなかった。

「じゃ俺たちが行くぜ。」

熱斗とロツクマンは攻撃を仕掛けた。それにあえぐ悪魔たち。

この様子だと熱斗とロツクマンが勝つと思った。しかし、すぐに展開は急変した。

それは、少しの間からだった。

悪魔たちはその隙に呪文を唱えた。

熱斗とロツクマンは謎の世界に入り込んだ。

そして、そこにはたくさんのお悪魔たちがいた。しかし、まだ念仏を唱えている。

「よし今のうちだ。」

熱斗はそう思った。しかし、体に力が入らない。

「どうだ。お前たちの力は、悪魔たちの力になる。お前たちなど、ただの灰になつてしまえ。」

熱斗は倒れこんだ。もうだめだ。

熱斗は何かを思った。自分にも分からない。しかし、今まで、誰かと一緒にいたからこそ力が出た。

それは、炎山でも桜井でもない。

一体誰。

それが、ある力を呼び起こさせた。

その頃、マオは、休んでいた。突然、何かを自分と呼んでいるような気がした。

しかし、その何かが出なかった。みんな、あの記憶を悪魔たちに消されたためだ。

熱斗は苦しんでいた。体が凄く重かった。

「ロックマン。」

熱斗は何かを言おうとした。しかし、寝てしまった。

ロックマンは叫んだ。しかし、悪魔は微笑んでこういった。

「お前のご主人様は、われわれの手で、殺される運命なのだ。」

悪魔はそれを言うとさらに喜んだ。まるで殺人鬼のようだ。

笑いは熱斗たちのいる空間を包んだ。

|| 第213話 力、そして、思い集結 |

熱斗に悪魔は最後の留めを行おうとしていた。

「ふふふ。この術で、お前を殺してやる。」

悪魔は、呪文を唱え始めた。そのときだった。まばゆい光が空間を走った。

「なんだ。一体。」

悪魔はびっくりしていた。

その光は、その空間を破壊した。そして、熱斗は光の中でマオやペ

ナルテイたちに会った。

マオは言った。

「今まで消えていた記憶がよみがえったよ。俺たちはどこでも一緒だっけ言ったら、本当になった。」

その言葉に熱斗は返した。

「ありがとう。」

そして、戦いへ戻っていった。

ロックマンとクロスフュージョンし直した。

「くそ。」

悪魔は言った。悪魔たちは次々に倒されていった。

悪魔の中には逃げ出すものもいた。

そして、戦いは終わった。そこへ、一人の悪魔が飛び出してきた。

熱斗は最初、攻撃を仕掛けに来たのかと思った。

しかし、その悪魔には攻撃をせずに近寄ってきた。この悪魔は、サナだった。

そして、熱斗に言った。

「どうもすいませんでした。私は悪魔の中で一番えらいものです。

一部の悪魔たちがこんなことをしてしまっただけ。」

そんなことを言われて、熱斗は困った。そして、言った。

「あなたが悪いのではない。だから、もうこんなことをしないで。」

サナにはそれだけでいいと思ったのだ。

サナはうなずいた。そして、木陰に去っていった。

これで、熱斗には一区切りついた。熱斗は思った。悪魔のおかげで、なんだかいい経験が出来たような気がした。

「また、会えるかな。おいしかったな、マオの料理。」

そんなことをロックマンに話しかけていた。

マオたちもそれぞれ元に戻った。しかし、今まで失っていたものを取り戻せてよかった。

みんな熱斗と同じようなことを思った。

悪魔は消すことが出来なかった。いや、今でもどこかで悪魔は増殖

しているのである。どこかで…。  
そして、熱斗たちを新たなことが待ち受けていた。それは一体。

## ペナルティ3紹介(前書き)

この文章は、紹介です。

評価投稿は、ペナルティ3にお願いします。

## ペナルティ3紹介

ペナルティ3について

このペナルティ2の続編のペナルティシリーズ第3弾が公開されま  
す。

Nコード n0243b

小説名 ペナルティ3

次のサイトでも確認できます。

<http://faitateuji.web.fc2.com>  
<http://faitateuji.web.fc2.com>  
/i (携帯サイト)

ちよつと見

|| ペナルティ3 ||

|| 第214話 地球 ||

地球、それは、46億歳。地球、それは、生命を育むことの出来る  
唯一の星。

しかし、その地球が、約50年前からおかしくなってきた。  
人間はそのおかしくなったことを地球破壊というらしい。

しかし、人間はそれを止められない。やめられない。かっぱえびせ  
ん(ってこれ余計。)

さて、地球にある少年がいた。2004年の春のうらら。さあ。あ  
と100メートル&amp;#8252;(馬か&amp;#82

52 ; )

名前はペナルティ。まあ、経歴はこの前を見てね& a m p ; # 8 2 5 2 ; ( つて、随分、酷い。それでも人間か。お前。 ) ペナルティは、悪魔に襲われていた地球をある友人たちと戦った少年だ。( つて、よく分かんねーし。 )

ところで、なぜペナルティは、なかなか活躍していないんだと思いの方がいるみたいです。

なぜでしょう。それは、いろいろ理由があったようです。

そんなペナルティの前に一人のウーマンじゃなくて、マンが(英語と日本語を混ぜるな。 ) ペナルティを訪れた。そう。それは、李だった。しかし、なぜ、李がペナルティのところへ訪れたのだろうか。ペナルティもそう思った。もしかすると熱斗を助けるなんていうこと? など思い李に聞いた。

「ああ。熱斗は無事だ。悪魔は、もう二度と人間を襲わないことを誓ったそうだ。それよりも、もしかすると、熱斗の存在が消えてしまいかもしれないんだ。」

その言葉にペナルティは耳を疑った。

「一体、どういうことですか。実際に会ったじゃないですか。」  
それに李が答えた。

「ああ。確かにそうだ。しかし、時空には欠点がある。それは、途中で未来が変わると、その未来が瞬時になくなるんだ。その空間が燃え尽きるんだ。」

その言葉はよくわからなかった。しかし、それがとても重要なことだということぐらい時空間のことについて知らないペナルティにだつてわかる。

「どうして、そんなことが起ころうとしているのですか。」

それに李はこう言った。

「それは、環境破壊だ。」

それは、なぜ?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0165b/>

---

ペナルティ2

2010年10月13日12時10分発行